

らつしやる間、大阪の山本様のお宅へでも行つて居ようかしら。

十一月六日。もしやと思ふ。もしそんなことがあれば、妾は妹に對して合す顔がない。父上や母上に對しても合す顔がない。妾は今日一日、進一郎様を合はさないやうに、午前中は萩野様を訪問し、午後から久し振りに、永井先生をお尋ねする。でも、さうして居るご何だか淋しい。進一郎様のお聲が始終耳の底で聞えて居るやうな氣がする。

十一月九日。今午前二時が鳴つた。が、妾は眼が冴えてしまつて寝られない。今宵の出来事を考へるご、今でも胸が湧き返るやうに興奮する。今でも、それを考へるご、ヂツとして居られない。

今宵、母は妹を連れて、四條へ買物に行かれた。お父様の所へは、碁敵の石田様が來られて、宵から碁を打つて居られた。妾は、居間の縁側で、一人ボンヤリと、夜の庭を見詰めて居た。スルスル後の襖が、軽く開かれた。見るご、思ひがけない進一郎様であつた。平素よりは、沈んだ青い顔をして居られた。

「少し御邪魔してもいいですか。」

「はい！ さうぞ！」と、妾は不安な期待に胸を躍らしながら答へた。

進一郎様は、這入つて來られるご、妾を半間ばかり離れた

心から同感して下さる方は、貴女の外にはないと思つてしまつたのです。純子さんは可愛い美しい。が、本當に自覺した女性ではなかつたのです。女性らしい感情や感覺が、スツカリ目醒めて居る方は思へないので。私は貴女を見た刹那にさう思つたのです。この女と結婚することが出来なければ一生獨身で暮してもいいご。

進一郎様は、心の底から興奮してあつた思ひました。到頭、おしまひにはこんなごまで仰有りました。

「私は、伯父様や、伯母様や、殊に純子さんに、手を突いてお詫びをする。そして、私の輕卒と背信の罪を負ふ、そして私は貴女に妻になつていたゞきたいと思ふ。若し、伯父様や、伯母様や、又父や母が許さなかつたら、私は、社會を捨て親兄弟と離れても、貴女と一緒に暮したいと思ふ。」

妾は、暫らくの間、興奮のために、頭がフラ／＼しました。妾は妹に濟まないと思ひながらも、妾は進一郎様のお言葉をさんなに欣んだかも知りませんが、おしまひに勝利を占めたのは、やつぱり妾の良心でした。

妾は、心を勵ましてやつごかう云ひました。

「貴方のお心は、よく判りました。が、妾は妹を裏切るやうなごとは死んでも出来ません。」

妾は、さう云つて泣き伏しました。

進一郎様は、何か暫らく考へて居ましたが、

縁側に、腰を下しながら、暫らくは黙つて居られた。妾も、息が詰まるやうな沈黙を續けて居た。

「あのう澄子さん！」と、進一郎様は、やつご搾るやうな聲をお出しになつた。

「何う云つてよいか。私には分らないのです。が、私は此夏、純子さんの代りに貴女が、東京へ來て下さつたら、さんなに皆のために、幸福だつたか分らないと思ふのです。」

かう云ひながら、あの方は、ちつご妾の顔をお見詰になつた。私は、化石したやうに堅く冷たくなつて居た。

「私は誤つたのです。私が本當に愛して居るのは、貴女なのです。純子さんに對する私の愛情を、戀だと思つたのは、私の大きな間違だつたのです。純子さんに對する私の愛情は、妹に對するやうな、一寸した親愛の感じだつたのです。私は貴女に接して初て、戀を知つたのです。貴女に對する私の愛を、太陽に比べたら純子さんに對する愛は、月のやうに白光のないものです。私は、貴女を見て初て本當の愛を感じたのです。あ、私は、大變な間違をやつてしまつたのです。」

かう云ひながら、進一郎様は、ブル／＼と興奮して身體を振はせて、あつしやいました。妾も烈しい感情の渦巻のために、いつか烈しく泣いて居たのでした。

「私は貴女を見たごきに、この人こそ私が知らず／＼求めて居た本當の女性だと思つたのです。私の趣味や嗜好なごに、

「でも、此のまゝ私が、純子さんと結婚することが、皆のため、いや純子さんの爲にも幸福だご考へになりますか。私の心は、スツカリ貴女のものになつてしまつて居るのです。純子さんは、私の心の抜殻と結婚することが果して幸福でせうか。」

さう云はれて見るご、妾には何が何だか分りませんでした。が、やつぱり妾は、妾の正しいご信する所から、一歩も離れませんでした。

「ごうぞ、妾の姉としての立場をお察し下さい。」

さう云つて妾は泣き伏してしまひました。進一郎様は、黙つてあつしやいました。が、到頭諦めたやうに、

「私のやつたごきは、取り返へしのつかないごだつたのか。」と、獨言のやうに仰有りながら、悄然として私の部屋を出て行かれました。その後妾を見て居るご、また妾は深い深い谷間へでも落ちて行くやうな、淋しい／＼氣がする。

十一月十一日。薄暗い／＼沈黙が、家中に充ちて居る。進一郎様は、何かお書き物があるご云つて、食事が濟もご、直ぐ自分のお部屋へ引き取つてしまふ。純子は、青い／＼顔をして居る。

「純子や、何うかしたのかい。」と、お母様は、口癖のやうに聞いてあつしやる。

妾は、妾て心が鋸で引かれて居るやうに苦しい。進一郎様

のお心もよく判る。妹の苦しみもよく分る。

妾は、妾の進一郎様に對する心持を、自分で誤間化さうとして居る。が、私の心持が戀でなくして何であらう。妾は、妹のために、進一郎様のお言葉を斥けた。が、それは本心だらうか。偽り者め！偽り者め云ふ聲が、妾の心の一隅で叫んで居る。古い道德に囚はれるな。お前の本然の心に從へ！ご心の中で叫ぶ者が居る。が、さうして妹の戀人を奪ふことが出来よう。妾は一生失戀に苦しむとも、そんな獸のやうなことは死んでもしたくない。併し……

十一月十二日。進一郎様は、今朝起きると、急に、お歸りになる云ひ出す。明日から二三日、奈良から大阪へ遊びに行く筈であつたのが、お流れになる。母や父が幾何止めても、お聴きにならない。妾は、何だか氣がさして止められない。純子は顔を泣きはらして居る。

到頭晩の急行で、お立ちになる。純子とお母様とお父さまが七條へお送りに行く。妾は、頭痛がする云つてお断りする。愈々お立ちになる云ふ間際に、進一郎様は妾と二人限になつた瞬間に、私に小さい紙片をお渡しになる。見るごこんなことが書いてある。

「私は運命が恐ろしくなりました。純子さんにお會ひする前に、一分でも二分でも早く貴女にお目にかゝることが出来たら、三人とも幸福であつたてせうに。貴女は、私を、きつば

りと斥けて下さいました。が、それにも拘はらず、貴女が心から私を愛して下さいたことを、信ぜずには居られないのです。

私は貴女のお心が、目覺めて、本當の愛のためには、凡てを犠牲にしうと云ふ決心が、付くまで待つて居る積です。」これを讀んだ瞬間に、光明と暗黒とが妾の心の裡で、渦を巻くやうに思ひました。

十一月十三日。野分の吹き去つたやうに家の中が荒んで居る。お母様は、

「早く結婚式の日を決めて呉れないと困る。準備の都合があるのに、若い人は呑氣で困る。」と、滾してゐらつしやる。それを聞くご、胸が痛くなる。妹の顔が、だん／＼暗くなつて行く。今日は、一緒に散歩に誘ひ出しながら、心から慰める。が、幾何慰めても、妹の顔は明るくはならない。

「妾なんか、進一郎様の奥様には、勿體ないわ。初めからあんなに云つて下さらなかつた方が、幸福だつたかも知れないわ。」

と、しく／＼泣き出してしまつたので、妾もつひ貰ひ泣きしたくなる。妹の不幸の原因が妾だと思ふご、妹の前に跪いて謝りたくなる。

十二月十日。結婚の期日に就いて、度々問ひ合はせても、何ごも返事がないので、お母様が大變心配してゐらつしやる。もう、そんなに冷淡のなら貰つて呉れなくてもいいな

ご、仰有つて居る。返事を出せない進一郎様のお心が、判つて居る妾は、本當に心苦しい。妹は見違へるほど瘦せてしまつた。

十二月廿日。初めて駒井様から、返事。當分延期にして呉れ。四月頃まで延ばして呉れとの返事。勢込んで居られたお母様、ガツカリなさつた様子。此の先、何うなる事やら、何だか心配で堪らない。

二月十日。妹は風邪の氣味、熱二十八度、食慾少しもなし。

二月十八日。妹恢復遅し。うつら／＼として一日眠つて居る。

二月廿八日。もう廿日にもなるのに、妹少しもよくならず。醫師は氣鬱症なりと云ふ。進一郎様のことにて、胸を痛め居るべく、いぢらしごもいぢらし。

三月十日。進一郎様の御洋行日、定まりし由、新聞にて知る。それなのに、結婚の話少しも進まず。母上大變心配し給ふ。

「破談にするなら、早くさう云つて呉れ、ばい。」と云ふ。妹、少しく快方に向ふ。

三月廿日。駒井様の叔父様、突然東京より來る。定めて結婚式の事ならんさて、皆々欣ぶ。純子一番欣ぶ。

三月廿一日。あゝ、妾は生れて初めて、今日ほど苦しかったごはなかつた。お母様とお父様ごに呼ばれて、何かと思

つて行つて見ると、思ひがけなく進一郎様のお話。お母様は、

「向ふ様では、最初純子ごいふ望みてあつたが、佛蘭西へ連れて行くのには、純子では年が若いし、それに純子は語學には趣味がないし、外交官の夫人としては、お前の方が、適當だと思ふから、是非お前を呉れと云ふお望み。純子には少し可哀さうだけれども、純子は年が若いし、まだ幾何でも機會があるのだから、私達は何なら姉のお前の方を貰つて呉れた方が、萬事都合がいいと、直ぐ承諾した。」と、仰有る。

妾は、餘りの驚きに、暫らくは口が利けなかつた。仲人口の結婚なら、貰ひかけた妹を、よして姉を貰ふごも、世にあるごかも知れないが、進一郎様と妹ごは、兎に角一時愛し合つた間ですもの。それなのに何うしてさう手輕に妹ご姉を取り替へることが出来るてせう。妾はそれほど、女性ご云ふものを手輕に見て居る父上や母上や叔父様が、恨めしくてならなかつた。また進一郎様も、何ご云ふ方だらう。妾に對する戀が、ごんなに本當でも妹の愛を、ごんなに手輕に捨て、しまふ方は、妾は憎まずには居られなかつた。それに、お母様は純子に云つてしまつたのだご。また純子はそれを泣きながら、承諾したのだご。あゝ、何ご云ふごだらう。何ご云ふ間違つた事だらけの世の中なのだらう。妾は、妙な怒と興奮ごのために、進一郎様に對する心の中の愛を忘れて叫んだ。「妾は、お断りいたします。何だか純子に濟まないやうに思

ひますから。」
 さう云つたまゝ、妾は父が何と云つても、母が何と云つても返事をしなかつた。
 妾は、父母の部屋から出るに、そつと純子の部屋へ行きました。病氣がやつと、恢復したばかりの純子は、蒼い瘦せた顔をして、ちつと机に靠れて居ました。
 「純子さん！ みんなお母様から聞いたのよ。しつかりして下さい。進一郎様のことなぞ、もうさつぱり忘れて下さい。妾も、あんな方と、死んでも結婚しないつもりよ。」
 妾が、かう云ふと妹は、わつと泣きながら、何時まで経つても、顔をあげませんでした。

私の拾つた日記帳は、これで盡きて居ました。屹度投身者の残したものに違ひないと思つた私は、一時はこれを警察へ届けようかと思ひました。が、かうした女性に、——デリケートな心や感情を持ちながら、妹のために、自分の感情を立派に制御して居る女性に對する尊敬のために、警察官のやうな、石のやうな頭を持った人達にこの日記帳を手渡すことを思ひ止まつたのでした。

が、果して、この日記帳の筆者は、自殺して居るでせうか。私は、何うしても、さうとは思はれないのです。もし、自殺したとしたならば、姉の方でなくして、妹の純子ではな

マ ス ク

見かけ丈は、肥つて居るので、他人からは非常に頑健に思はれながら、その癖内臓と云ふ内臓が、人並以下に脆弱であることは、自分自身が一番よく知つて居た。

一寸した坂を上つても、息切れがした。階段を上つても息切れがした。新聞記者をして居たとき、諸官署なごの大きい建物の階段を駆け上るに、目ざす人の部屋へ通されても、息がはづんで急には、話を切り出すことが出来ないことなごもあつた。

肺の方も餘り強くはなかつた。深呼吸をする積で、息を吸ひかけても、ある程度迄吸ふと、直ぐ胸苦しくなつて来て、それ以上は何うしても吸へなかつた。

心臓と肺とが弱い上に、去年あたりから胃腸を害してしまつた。内臓では、強いものは一つもなかつた。その癖身體丈は、肥つて居る。素人眼にはいつも頑健さうに見える。自分では内臓の弱いことを、萬々承知して居ても、他人から「丈夫さうだ〜」と云はれると、さう云はれることから、一種ごまかしの自信を持つてしまふ。器量の悪い女でも、周囲の

かつたかと思ふのです。若し、妹の純子が自殺したとすれば、姉の日記帳が落ちてある筈はないのですが、それにはこんな想像が加へられるのです。

姉の日記を偶然に見た妹が、戀人の心が、夙くに姉に向いて居たことを知り、また姉の犠牲的な心持を知つた爲、戀人に對する失戀と姉に對する感激の心持で、自分の身を失くして、姉と戀人とを結び付けるために死んだのではないかと思はれるのですが。しかしこれは私の小説家らしい想像です。が、その當座私は新聞を注意して居ました。一月も前に溯つて新聞を読んで見ましたが、「老婆の投身」さか「放蕩者悔悟の投身」なご、云ふ字は、目に付きましたが、「令嬢の投身」さか「若き女の投身」さか云ふ字は、生憎見當りませんでした。

それで見ると純子か澄子か、投身の覺悟をして、一度は疎水の岸に立ち乍ら、又思ひ返したのかも知れません。その時に、此の「姉の遺書」丈が自殺の決心の名残りとして、遺されたのかも知れません。

世の中の事件は、平凡に終り安いものです。姉と妹との此の戀のいきさつも、案外平凡に終つて、純子か澄子かの孰らか、若き日本外交官の夫人として、歐洲の何處かに居るかも知れません。また失戀した方の純子か澄子かも、案外い、良縁を得て、世の一角に楽しい生活を送つて居るのかも知れません。私はそれがさうであることを望みます。(終)

者から何か云はれると、自分でも「満更ではないのか」と思ひ出すやうに。

本當には弱いのであるが「丈夫さうに見える」と云ふ事から来る、間違つた健康上の自信でも、あつた時の方がまだ頼もしかつた。

が、去年の暮、胃腸をヒドク壊して、醫者に見て貰つたとき、その醫者から、可なり烈しい幻滅を與へられてしまつた。

醫者は、自分の脈を觸つて居たが、

「オヤ脈がありませんね。こんな筈はないんだが。」と、首を傾けながら、何かを聞き入るやうにした。醫者が、さう云ふのも無理はなかつた。自分の脈は、何時からと云ふことなしに、微弱になつてしまつて居た。自分でちつと長い間抑へて居ても、あるかなきかの如く、ほのかに感ずるのに過ぎなかつた。

醫者は、自分の手を抑へたまゝ、一分間もちつと黙つて居た後、

「あゝ、ある事はありますがね。珍らしく弱いてすね。今ま

行性感冒は、都會の地を離れて、山間僻地へ行つたやうな記事が、時々新聞に出た。が、自分はまだマスクを捨てなかつた。もう殆ど、誰も付けて居る人はなかつた。が、偶に停留所待合はして居る乗客の中に、一人位黒い布片で、鼻口を掩ふて居る人を見出した。自分は、非常に頼もしい氣がした。ある種の同志であり、知己であるやうな氣がした。自分は、さう云ふ人を見付け出すことに、自分一人マスクを付けて居る云ふ、一種のてれくさ、から救はれた。自分が、眞の意味の衛生家であり、生命を極度に愛惜する點に於て一個の文明人である云つたやうな、誇をさへ感じた。

四月となり、五月となつた。道の自分も、もうマスクを付けてなかつた。ところが、四月から五月に移つる頃であつた。また、流行性感冒が、ぶり返した云ふ記事が、二三の新聞に現はれた。自分は、イヤになつた。四月も五月もになつて、まだ充分に感冒の脅威から脱け切れない云ふことが、堪らなく不愉快だつた。

が、道の自分も、もうマスクを付ける氣はしなかつた。日中は、初夏の太陽が、一杯にボカ／＼照して居る。そんな口實があるにしろ、マスクを付けられる義理ではなかつた。新聞の記事が、心にかゝりながら、時候の力が、自分を勇氣付けて呉れて居た。

丁度五月の半であつた。市俄古の野球團が來て、早稲田で

さうした心持よりも、更にこんなことを感じた。自分があの男を、不快に思つたのは、強者に對する弱者の反感ではなかつたか。あんなに、マスクを付けることに、熱心だつた自分迄が、時候の手前、それを付けることが、何うにも氣耻しくなつて居る時に、勇敢に傲然とマスクを付けて、數千の人々の集まつて居る所へ、押し出して行く態度は、可なり徹底した強者の態度ではあるまいか。兎に角自分が世間や時候の手前、やり兼ねて居ることを、此の青年は勇敢にやつて居るのだと思つた。此の男を不快に感じたのは、此の男のさうした勇氣に、壓迫された心持ではないかと思つた。

仕合が、連日のやうに行はれた。帝大と仕合がある日だつた。自分も久し振りに、野球が見たい氣になつた。學生時代には、好球家の一人であつた自分も、此一二年殆んど見て居なかつたのである。

その日は快晴と云つてもよいほど、よく晴れて居た。青葉に掩はれて居る目白臺の高臺が、見る目に爽やかだつた。自分は、終點で電車を捨てるに、裏道を運動場の方へ行つた。此邊の地理は、可なりよく判つて居た。自分が、丁度運動場の周圍の柵に添ふて、入場口の方へ急いで居たときだつた。ふと、自分を追ひ越した二十三四ばかりの青年があつた。自分は、ふとその男の横顔を見た。見るに、その男は思ひがけなくも、黒いマスクを掛けて居るのだつた。自分はそれを見たと同時に、ある不愉快な激動を受けずには居られなかつた。それと同時に、その男に明かな憎惡を感じた。その男が、何さなく小憎くらしかつた。その黒く突き出て居る黒いマスクから、いやな妖怪的な醜くさをさへ感じた。

此の男が、不快だつた第一の原因は、こんなよい天氣の日中に、此の男に依つて、感冒の脅威を、想起させられた事に違なかつた。それと同時に、自分が、マスクを付けて居るときは、偶にマスクを付けて居る人に、逢ふことが嬉しかつたのに、自分がそれを付けなくなるに、マスクを付けて居る人が、不快に見える云ふ自己本位的な心持も交じつて居た。が、

若杉裁判長

△△地方裁判所の、刑事部の裁判長をして居る、判事若杉浩三氏は若い時、可なり敬虔な、クリスチャンでありました。が、普通クリスチャンの青年が、社會に出てしまふと、丸切り物忘れをしたやうに、ケロリと、クリスチャンで無くなるやうに、若杉さんも何時の間にか、青年時代の信仰を、何處かへ置き忘れて居ました。夫は、大學時代に作つた澤山のノートの中へ、置き忘れたのかそれとも司法官試験の時に、妄みに追ひ使はれた或地方の區裁判所の事務所のベンチに、置き忘れたのか、分かりません。

が、今では若杉さんは、決してクリスチャンではありませぬ。誰が見ても、あの法服を着て法廷に濟し込んで居る若杉裁判長が、青年時代に、熱烈な信仰を、懐いて居た事には、氣が附きまします。が、獨逸の學生が、若い時に血氣に任せ、盛んに決闘をやつた傷痕が、官僚政府に出仕して、意氣地なしの、老官吏に成り果てた後迄も、彼等の老顔の皺の間に、残つて居るやうに若杉裁判長の青年時代の信仰も、やつぱり何處かに痕跡を、残して居たやうです。

ほゞ、一種の快感を、感ずるものです。まして、その被告人に少しでも、縁故のある人達が欣ぶのは無理ありません。かうした場合で、若杉裁判長が何時の間にか、名裁判長の名を、謳はれ出したのも、決して不道理ではありません。

無論、若杉裁判長が、罪と云ふ事に就いて、普通の裁判官とは、全く違つた考へを懐いて居た事も當然な事です。此の人は、何ちらか云へば、決して、裁判官と云ふ柄では無かつたのです。あの薄暗い法廷で、嚴めしい顔をして居る法官としては餘りに、繊細な感情を、持ち過ぎて居たのです。實際當人も、最初から法科を、やらうなご云ふ意志は、毛頭無かつたのです。東京の高等學校に居た頃は、文科で、而も哲學志望でありました。當人の考へては、將來は教育家になる心算で、居たらしいのです。無論教育家と云つても、人間の精神に、強い力を與へ得るやうな、本物の教育家になる心算で居たのです。が、教育家志願の若杉浩三が何うして法科に轉じたかに就いては、二つの原因があります。一つは、非常に崇拜して居た、森田と云ふ同窓生が、急に文科志望を止めて、法科へ轉ずる決心をしたからです。何でも、森田と云ふ人は、一年からズートと文科の首席を通して来た人ですが、卒業する半年前になると、その人の兄さんと云ふ人が「將來文科では、とても飯が喰へない、此際思切つて法科へ變つたら何うか」と、云つて来たさうです。實際文科を出て、困ま

夫は外でもありません。若杉裁判長は罪人に對して、非常に深い同情を、持つて居た事です。殊にその罪人が、犯した罪を、少しでも後悔し、懺悔でもして居るやうな、様子が見えるご、裁判長の判決は、立合の検事を、呆氣に取らせるほど、寛大でありました。無論こんな時、立會の検事は必ず控訴をしました。その控訴が棄却になる事もありましたが、却つて原判決が取消されて、もつと重い判決が、下る事も屢々ありました。

元より、裁判長として、自分の下した判決が、取消される事は、決してその人に取つては、名譽ではありません。が、夫にも拘はらず、若杉裁判長の判決は、いつも寛大に失する位でありました。裁判長が、若杉判事だと知るご、事情を知つた被告は、雀躍りして欣ぶ迄になりました。

世人を戦慄させたやうな、極悪人の場合は別として、世人は、被告が寛大の刑に、處せられる事に對して、大した抗議を懐くものではありません。否、その被告人に幾何かでも、同情すべき點がある時などは、世人は刑罰が、輕ければ輕いつて居る實例はその頃も多かつた見え、非常に聰明な森田と云ふ人は、直ぐ轉科をする決心をしたさうです。自分よりは、成績もよく、學資も豊富な森田君が、將來の生活問題を、氣にして轉科をするごなるご、當時の若杉裁判長も、勢ひ首を傾けなければなりません。

その上に、若杉さんは、かうした出來事に、逢つて居た事があります。何でも、高等學校の確か、二年生であつた頃ですが、若杉さんは、ある晩春日町から傳通院の方へ富坂を、登つて居たさうです。すると、半分ばかり、坂を上つた右側にある、ミルク屋の前に、二三人、人だかりがして居るので、何かと思つて立ち止まるご、そのミルク屋の中から、土體の男が、立派な服装をした、紳士の右の手を、纏て縛つて連れ出して來るのです。一組かと思ふご、さうした組合せが幾つも、後から出て來るのです。何の組もくも、縛つて居る方が、労働者の風をして、縛られて居る方が、紳士の服装をして居るから、奇體です。今から考へれば、夫は賭場へ手が入つたので、珍らしくも何んごもないのですが、その頃はさうした實世間の出來事に、全く無經驗であつた若杉さんは、呆氣に取られて見て居たごの事です。すると、若杉さんの前へ、もう一人青年が來たさうです。此男は此場の事情を若杉さん以上に、知らなかつたご見え、ミルク屋の入口に近づいて、家の中を覗き込むやうにして居たさうです。する

さ、もう縛り上げる罪人の種が、盡きたと見え、一番最後に、手ぶらでミルク屋を出ようとした、土工體の男は、入口に立ち塞がつて居る此の青年が邪魔になつたと見え、

「逃げ！ 何を見て居やがるんだ」と、怒鳴り附けたばかりでなく、荒々しくその青年を、突き退けました。無論此の青年は、此の男が自分の持たぬある權力を、持つた刑事である事を知りません。

「何をするんだい！」と、怒鳴り返しなから、勢よくその刑事に、飛びかかりました。するこそその刑事は、

「何！ 反抗する！ 反抗するなら、警察へ来い」と云ひながら、亂暴にも、その青年の手を、縛りにかかりました。恐らく、同僚が皆夫々獲物を連れて、歸るのに、自分一人、手ぶらで歸るのは、此刑事に取つては、一寸不快な事であつたのに、相違ありません。何でもいゝから、兎も角も一人縛つて歸らうと云ふ、悪い見らしかつたのです。青年は、相手が刑事だと、聞くさ少しさしたじく、さしたやうでしたが、夫ても威勢よく反抗して居ました。が、力に於て勝つた刑事は、難なく青年の右の手に捕縄をかけて、到頭引張つて行くぢやありませんか。恐らく、職務執行妨害でも、云ふやうな罪名で、兎も角も、警察へ拉して行かうと云ふ肚らしいのです。而も若杉さん達の立つて居た所から、二三間離れた所へ引ずつて行つてから、顔を二つ三つ、ひつばいたらしい、音さ

へ聞えたさうです。恐らく、こんな刑事の亂暴は、現代の進歩した、警察制度の下では、決して行はれては、居りません。が、若杉さんの高等學校時代、即ち今から十數年前ては、明かに行はれて居た事に相違ありません。

多感な青年であつた若杉さんが、之を見て、極度に憤慨したのは、無理はありません。人權の蹂躪、人間に對する侮辱、夫は正義の觀念が飽く迄も強かつた若杉さんに取つては、身の毛もよだつ程の不正であつたのです。彼は、國家の權力が、かうした野蠻な人間に依つて濫用せられる事を、身慄ひする程恐ろしく思ひました。

その晩、寄宿舎へ歸つてからも、さうした不正に對する義憤は、中々靜まりませんでした。床に就いてからも、まだその事を思ひ續けて居ました。その時に、ふと將來法律を學んでかうした、無辜の人々の爲に、侃諤の辯を振つて見ようかと云ふ考へが、若杉さんの心に浮びました。

若杉さんが、法科を選んだ遠因は恐らく、其處にあるのでせう。が、直接の原因は、自分の尊敬する森田君が、急に文科を見限つて、法科に轉じた爲でせう。その頃は、まだ今のやうに法科生過剰の現象はありませんでしたから、法科へ轉科するのは、今よりも、ずつと容易でした。が、辯護士になる筈であつた若杉さんは、辯護士が餘りに世俗的な、餘りに實際的な商賣であるに、嫌氣がさし、卒業間際になつてから、

志を願つて司法官になつたのです。

かうした經歷を、持つて居る若杉裁判長が、普通の裁判官に比して、より内面的で、より人道的で、悪人や罪人を、普通の人間とは、全く違つた生存物だを見るやうな、弊が少しも無かつたのも、當然だと思はれます。其上若杉さんの罪惡觀には、基督教的の分子が、餘程多量に、含まれて居た上に、凡ての犯罪に於ても、人間的な動機を、十分汲み取る事が出來たので、何うしても罪人を、憎み切れなかつたのでせう。此の罪人の血管を流れて居る血も、俺の血管を流れて居る血も、さう大した相違が、あるものではないと云ふ、裁判官としても餘りに、人間的に過ぎた信念が、常に若杉さんの裁判心理の中に、動いて居たのでせう。もう一つ若杉さんの心理に、動いて居た感情は、何んな事があつても、冤罪の人を作つてはならぬと云ふ考へでした。よく裁判の話の時は、引合になる格言ですが「縦令九人の有罪者を逸することも、一人の冤罪者を作ること勿れ」と云ふ戒です。若杉さんの胸にはさうした考慮が、常に烈しく動いて居たらしいです。

まあ、言葉を変へて云ひますれば、若杉裁判長の判決が、如何にも寛大であつたと云ふ事は、裁判長の人道的な人格からの當然の歸結だと云つてもよいでせう。若杉裁判長が、罪人に對する理解の籠もつた同情は、段々立會の検事にも傳染したと見え、最初ほどは検事が頻々控訴しなくなりました。

が、時々、若杉さんに對して、課刑が寛大に失ふと云ふ、非難がないでもありませんでした。さうした非難をする人でも、若杉裁判長の人格の底深く、植ゑ附けられた信念の、力強さを知るに、何時の間にか、さうした非難を忘れることもなく、捨て、しまふやうでした。

若杉裁判長が、如何にも、人情を噛み分けた、同情の溢るやうな判決を、被告に下した實例は數々切れない程あります。放蕩無頼の兄が、父に度々無心をした揚句、父が應ぜぬのを憤つて、棍棒を振つて、打つてかゝつたのを、居合せた弟が見るに見兼ね、棍棒を握るなり、兄をたゞ一打ちに、打ち殺した事件の裁判なごも、若杉裁判長の名聲を擧げた、名裁判の一つでありました。普通の裁判官なら、譬へ被告に同情をするにしても、尊親族殺人と云ふ罪名に拘泥してどんなに酌量をして、四五年の實刑は、課したてせう。が、若杉裁判長は、罪を憎んで五年の懲役を、云ひ渡すと同時に、執行猶豫の恩典を附けることを、忘れませんでした。此被告に就いては、村の村長を筆頭として、百五十名が連署した嘆願書が出て居た程ですから、當人を初め一村擧つて、雀躍りして喜びました。

まだこんな事件を數へるなら、幾つもありませう。若杉裁判長としても、刑法の涙も云ふべき、執行猶豫の恩典を、十分に利用して、何ちらかさ云へば機械的に失し易い法律の

運用に、一味の人情味を加へると云ふ事は、裁判官としても、愉快な事であるに、違ありませんでした。

さうした譯で、五萬以上も人口のある、此の△△市で、若杉裁判長と云へば、名裁判長として令名が、噴々たるものでありました。

が、若杉さんの令名が、頂上に達した頃でせう。次ぎにお話しするやうな、事件が起りました。誰でも、一度か二度かは、地方の新聞紙で見たことがあると思ひますが、關西地方には屢々起る、あの「中學生のデゴマ」と云ふ事件です。之は活動寫眞の悪影響の一つだと云つて、世の識者達が、活動寫眞を非難する、材料の一として居るやうですが、丁度△△市にも「中學生のデゴマ事件」が起つて市民の眼を聳てしました。而も、その犯人が、規律の嚴肅で評判のよい、縣立中學の生徒で、而も級長をして居る優等生で、その上色白の美少年であつたと云ふのですから、世人を、驚かしたのも無理はありません。

犯罪の手段は、やつぱり紋切型の通り、その少年は、△△市の町端れにある、ある富豪の家に、脅迫状を送つて「何月何日の夜に、鎮守の八幡の大鳥居の下へ、金貳百圓を新聞包みにして置く事、若し實行しないならば、全家を爆裂弾を以て焼き拂ふべし」と云ふ、タワイもない事を、並べ立てたのです。その家でも何うせ性質の悪い悪戯だらうと云ふ事て、

事達は、片唾を呑みました。そして、少しでも、その男に不審な舉動がありましたら、直ぐ飛びかゝらうと云ふ、身構へをしました。すると、その男は鳥居の下迄来て、足を止めたかと思ふと、一度四邊を見廻してから、夜目にもしるきその新聞包を、そつと取上げたてはありませんか。柔道の方の刑事が、獅子が獲物にても飛び附くやうな勢で、電光のやうに飛びかゝりました。刑事は、無論一大格闘を豫期して、飛び附いたのですが、案外にも刑事の強い腕には、女のやうな華奢な身體が、觸りました。擊劍の方の刑事が、吹いた呼子で集まつた署長以下の五人は、この少年を一と目見るこ、皆オヤオヤと云ふ顔をしました。

が、その弱々しい少年が、この脅喝取財未遂の犯人に、相違ありませんでした。

その少年が、轟々たる世評の裡に、公判に附せられたのは、申す迄ありません。全體、未成年者でもあるし、微罪不檢舉になる筈であつたのですが、此少年が、癩癩玉で以て、實際に脅喝したと云ふ事が、此の少年の爲に、非常に不利な結果を及ぼしました。

が、此少年が豫審で有罪になり、公判に附せられる事になつても、此少年の同情者は、餘り失望しませんでした。公判になれば裁判長は若杉さんだ、實刑を課するやうな事は決してあるまいと、皆が思つて居たからです。

その儘打捨て、置きますと驚くぢやありませんか、丁度その約束の日の前夜に、その富豪の家の門前に當つて、一大爆音が聞えたと云ふのです。が、之は恐らく此事件を傳へた、新聞紙の誇張であつたのでせう、當の犯罪者の少年は、癩癩玉と一緒に、三つばかり打つけたと、云つて居りますから、そんな大した音のしなかつたのは、確です。が、脅迫状の爲に、内心幾何か、びくついて居た、富豪の一家が、此の爆音を聞いて、色を變じたと云ふのは、強ち誇張ではありません。捨て、置いては一大事と云ふので、早速警察へ人をやりまして、脅迫状が、舞ひ込んでからの、一部始終を、訴へ出しました。長い間、事件がなくて、閑散に苦しんで居た警察は、此の訴を聞いて、蘇返つたやうに活動を始めました。脅迫状に指定された翌晩が来るに警察署長以下警部一名刑事巡查六名が、悉く變装して、鎮守の森を、遠巻きにしたさうです。そして柔道初段と云ふ刑事と、擊劍が三級と云ふ腕節の強い刑事とが、選まれてその大鳥居の蔭に、身を隠しました。そして、如何にも札束でも入つて居さうな、新聞包みをその鳥居の丁度真下に置きました。

その晩は、非常にいゝ月夜で、刑事達も一種ロマンチックな心持で、デゴマ團の襲來を待つて居ました。すると、刑事達が、いゝ加減退屈した頃に、爪先上りになつた參詣道を、マントを着た一人の男が、急ぎ足に上つて來たさうです。刑

第一回の公判が開かれました。若杉裁判長の冒頭の訊問には、被告に對する、溢れるやうな、同情が見えました。被告は、少年も、臆面もなく犯罪事實を述べ立てました。そして、少年の無鐵砲さが、時々裁判長を苦笑させました。實際、此少年は冒険譚なさに、感化された少年が往々無鐵砲な事をやるのと同じやうな意味で、知らず識らずこの大それた犯罪に、陥つたやうです。要するに、少年に特有な、ロマンチックな傾向が、つひ邪道に陥つたのに、過ぎませんでした。若杉裁判長は、少年の心理に、十分、同情する事が出来ました。だから、立會の檢事が、少年の心理に少しの理解をも持たない、峻嚴な論告をした時、何うしても、心の裡で首肯する事が出来ませんでした。辯護士の熱烈な辯護を聽かない前から、執行猶豫を與へると云ふ事は、裁判長の肚の中では、もう定まつて居たらしいです。辯護士は、二時間に近い程の雄辯を振ひました。辯護士の辯護の力點は何でも、此少年の犯罪は、之れ少年自身の罪に非ずして、社會の罪である。換言すれば、教育家と活動寫眞との罪であると云つた風な主旨でした。が、實際裁判官の眼下に、蒼くなつて、神妙に控へて居る少年を見た時は、誰でも憐憫の情を催さずには、居られませんでしたが、色白の丸顔で、愛くるしい少年でした。實際、此少年が、ホンの悪戯でやつた事を、警察署が大騒ぎをやつて、脅喝取財と云ふ大事件に、拵へ上げた觀がないて

もありませんでしたから。

此時、若杉裁判長は、辯護士の辯論を聴きながら、自分の少年時代を回想して居ました。するさ友達の悪太郎に使喚せられて、隣村の林檎畑へ夜襲を行った事を、歴然と思ひ出しました。夫は少年の心をわく／＼させるやうな、ロマンチックな冒険でした。夫は、法律的に解釋すれば、立派な野外竊盗でした。が、少年時代にこそすれば、誰でも行ひ易い奔放な自由な冒険的な悪戯を、悉く犯罪視する事が、果して正當な事でせうか。實際若杉裁判長の心は、此少年に對する同情で、一杯でありました。無論、優等生で級長であつたこと云ふ事實も、裁判長の心を、動かしたに違ありません。

判決云ひ渡しの日は、此次の月曜日と云ふ事になつて、法廷は閉ぢられました。

翌日の新聞紙は、法廷の光景を傳へると同時に、少年が執行猶豫の、恩典に浴すべき事を、正確なる事實として、豫想してありました。被告の少年に對する同情者も、亦此事に就いては、少しの疑念も懐いて居りませんでした。

所が、その判決があること云ふ、月曜日の三日前、即ち金曜日の晩に、若杉裁判長の身に、偶然ある事件が起りました。

さ、云ふのは、その金曜日の晩、夫は何でも三月の何日かに當つて居ました。若杉さんの家では産後間もない夫人が、まだ産褥を離れて居ない時でした。もう男の子三人のお母さ

そして、妻を起さぬやうにこ抜き足して、居間の方へ近づいて、襖を開けました。書齋の電燈の光が、開いた襖の間から、次の間を照しましたが、夫はホンの中央部丈でした。若杉さんは、何の氣なしに、次の間へ足を踏み込みました。が、その刹那、ならぬ氣配が、電燈の光の及ばない、箆筒を置かれた片隅の間で致しました。人だ、盜賊だ、若杉裁判長は、電氣に打たれたやうに其處に立ち盡くしました。するさその間の中から頑丈な一人の大男が、スツクさばかり、若杉さんの、眼の前に立ちました。實際、若杉さんは今迄、被告函の中に畏まつて居る、大人しい竊盜や、強盜や殺人犯なら幾人見たか分りません。大抵はペコ／＼頭を下げて、神妙に縮み上つて居る男ばかりでした。が、今宵若杉さんの前に立つて居る本當の盜賊は、さう大人しい人間ではありません。見附けられたからは、居直つてやらう、さ云ふ肚をあり／＼と、見せて居ました。其處には、裁判官と被告、さ云ふ關係の代りに、赤裸々な人間同志の、力づくの關係しか、豫期せられませんでした。一秒、二秒、三秒、泥棒の方でも、動きませんでした。若杉さんの方でも、動きませんでした。若杉さんは、全身を押し詰まされるやうな、名状し難い不快な、壓迫を感じて居ました。が、その中でも、若杉さんの理性は、懸命の力を籠めて、善後策を講じて居たのです。男の意地さしても、裁判官の威厳を保つ爲にも、泥棒位は取押へる事が、

んでしたが、何時もお産が長びくので、産後の衰弱は、傍の見る目も痛々しかつた程です。その晩も、常ならば、夜遅く迄騒ぎ廻る男の子も、宵から強制的に、寝かされて居ました。そして若杉さん丈は、次の茶の間に身動きもせず、臥て居る妻に時々言葉を掛けながら、書齋で十二時頃迄、書見に耽つて居ましたが、十二時を打つを合圖に、下女がその部屋に敷いて置いた床の中へは入りました。その時次の間の妻に、言葉を掛けましたが、もう寝てしまつたか見えて、返事はありませんでした。

幾時間経つたてせう。若杉さんはふと目を覺しました。するさ、夫人が寝て居る茶の間とは反對の側の居間の方から、コトコトと云ふ音が聞えて來ました。若杉さんは、大方鼠もが、居間の棚の上を、駆け廻はつて居るのだと思つて、再び眼を閉ぢましたが、その物音は、五月蠅く續いて來ました。が、何時もは、鼠が、居間で暴れる事はない筈なのに、考へて居るさ、若杉さんは漸く、鼠が暴れる原因が分りました。夫は、妻の産見舞として、到來した澤山の菓子箱や果物籠などを、棚の上に積み重ねてあつた事です。それと氣が附くさ若杉さんは、聲を出して、鼠を追はうと思ひましたが、次の間に、寝て居る妻を駭かしてはならぬと、氣が附くと、そつと自分で床を抜け出して、枕許に袖だ、みにしてあつた、着物を着流し、寝る時に消して置いた電燈を捻りました。

必要でした。が、その格闘の恐ろしい物音が、産褥に在る妻に與へる激動、又居間の向うの六疊に寝て居る、幼い三人の愛兒に與へる駭きと危険さを考へるさ、若杉さんの手は、何うしても延びなかつたさうです。若杉さんは、此の泥棒に相當の金をやつて無事に歸つて呉れさ哀願しやうとさへ、考へた位です。が、夫も裁判官としては、餘りに威嚴のない事でした。その時に、ふと「泥棒は逃がせばよい」と云ふ考へが浮びました。若杉さんは、泥棒の不意の襲撃を避ける爲に、二三歩後へ退きながら「わあーっ」と力限りの、大聲を出しました。が、その聲は、全く豫期しない結果を惹起しました。若杉さんは、自分の聲が終るか終らぬかに、次の部屋から夫の聲に慄へた妻の恐ろしい悲鳴を聞きました。夫と、同時に居間の向うの部屋からは、三人の愛兒が、駭いて泣き出しました。

親子五人の聲に、駭いたさ見え、泥棒は何時の間にか、居なくなつて居ました。無論、一物も盗んでは居ませんでした。が、衰弱した身體に、さうした激動を、受けた夫人は、急に高熱が出たのも、無理はありません。その翌日は、四十度に近い熱が、一日續きました。その上、極度の過敏になつた夫人の神経は、些細な物音にも、慄へるやうになりました。主治醫は、婦人の生命その物に就ても、憂慮を懐くやうになりました。

その上、三人の愛兒迄が、その夜の出来事があつて以来、妙に物に慄へる、臆病な子供になりました。

若杉さん自身も、あの泥棒と相對峙した一分間ばかりの、息も詰まるやうな、不快な、不安な壓迫から、中々脱け切る事が出来ませんでした。

若杉さんは、盜賊に見舞はれた、不快な印象を、マザ／＼と頭の中に浮べながら、かう云ふ事を考へました。自分は學校を出てから十四五年の間、罪と云ふ事ばかりを、考へて来た、そして、その罪に適當な刑罰を課する事を、自分の職責として来た。が、實際自分は本當に、罪と云ふ事を、正當に考へて来たであらうか。夫は、餘りに罪を、抽象的に、考へて来たのではあるまいか。罪人の側からのみ、罪を考へて居たのではあるまいか。自分の目の前に、畏まつて居る被告が、如何にも大人しく、神妙なのに馴れて、彼等が被害者に及ぼした、恐ろしい悪勢力に就いては、何の考慮をも費やさなかつたのではあるまいか。

さう考へて来るに、若杉さんは、自分の過去に於て下した判決の、基礎を爲した信念が、段々揺いて来るのを感じました。若杉さんを襲つた賊、夫は罪名から云へば、竊盜未遂でした。が、一家に及ぼした悪影響を考へれば、身の毛もよだつ程です。夫人が、夫から受けた激動の爲に發熱し、その發熱の爲に衰弱して遂には、其爲に慮れるやうな事があれば、

した。

「被告何某を禁錮一年に處す」と云ふ主文の宣告があつた後、幾何待つても、執行猶豫の云ひ渡しが續きませんでした。被告の顔にも、傍聽人の顔にも深い失望の色が浮びました。が、若杉裁判長は、そんな事には一向頓着がないやうに、理由書の朗讀が了ると、扉を排してサツサと、退席してしまひました。

かの盜賊は形式は兎も角、明に夫人を殺したのです。また、三人の愛兒を受けた、悪い影響も、金錢を以ては、償ひがたい、大なる被害に相違ありません。その上、若杉さん當人が、受けた不快な、壓迫や不安も、無形ではあるが、重大なる被害には相違ありません。

若杉さんは、生れて初て、罪の及ぼす影響を、骨身に浸みるほど、感じました。

夫は、若杉裁判長の、今迄懐いて居た罪惡觀を、根底から覆へしてしまひました。彼は、被害の、翌朝、世の中の犯罪者一般に對する憎惡が、初て自分の心の中に、湧き出るのを感じました。が、若杉さんは、自分の感情の轉換が、餘りに自分本位の動機から、出て居る事を心苦しく思ひました。が、轉換したのは、若杉さんの感情ばかりではありませんでした。若杉さんの思想も、ある轉換を示して、最初に換つた感情をグ／＼裏附けて行きました。

月曜日の午前、豫定の通り、デゴマ中學生の判決云渡しがありました。縱令無罪ではなくとも、執行猶豫は、必ずあると云ふので、被告の肉親の人達は、一種の安心を以て傍聽に行きました。

が、當日に限つて、裁判長は少し、蒼白な顔をして居ました。そして、判決文も平素のやうに、朗々とは響きませんでした。

身投げ救助業

物の本によるご京都にも昔から、自殺者は可なり多かつた。

都は何時の時代でも田舎よりも生存競争が烈しい。生活に堪へ切れぬ不幸が襲つて来るご、思ひ切つて死ぬ者が多かつた。洛中洛外に烈しい飢饉なごがあつて、親兄弟に離れ、可愛い妻子を失ふた者は、世をはかなんで自殺をした。除目に洩れた腹立まぎれや、義理に迫つての死や、戀の叫はぬ絶望からの死、數へて見れば際限がない。まして徳川時代には相對死なご云ふて、一時に二人宛死ぬ事さへあつた。

自殺をするに最も簡便な方法は先づ身を投げるごであるらしい。之は統計學者の自殺者表なごを見ないても、少し自殺ご云ふ事を眞面目に考へた者には氣の付く事である。所が京都にはよい身投げ場所がなかつた。無論鴨川では死ねない、深い所でも三尺位しかない。だからおしゆん傳兵衛は鳥邊山で死んで居る。大抵は縊れて死ぬ、汽車に轢かれて死ぬなご、云ふ事も無論なかつた。

然しごうしても身を投げたいものは、清水の舞臺から身を

ある。然し京都の人々はこの不便を忍んで自殺をして來たのである。適當な身投げ場所のないために、自殺者の比例が江戸や大阪なごに比べて、小であつたごは思はれない。

明治になつて、檳村京都府知事が疎水工事を起して、琵琶湖の水を京に引いて來た。此の工事は京都の市民によき水運を具へ、よき水道を具へるご共に、またよき身投げ場所を興へる事であつた。

疎水は幅十間位ではあるが、自殺の場所としては可なりよい所である。ごんな人間でも、深い海の底なごてフワ／＼して、魚なごにつゝかれて居る自分の死體の事を考へて見ると、餘りいゝ心持はしない。譬へ死んでも、適當な時間に見付け出されて、葬をして貰ひたい心がある。それには疎水は絶好な場所である。蹴上から二條を通つて、鴨川の縁を傳ひ、伏見へ流れ落ちるのであるが、何處でも一丈位深さがあり、水が綺麗である。それに兩岸に柳が植ゑられて、夜は蒼いガスの光が烟つてゐる。先斗町あたりの絃歌の聲が鴨川を渡つて聞えて來る。後には東山が靜に横たはつて居る。雨の降つた晩なごは兩岸の青や紅の灯が水に映る。自殺者の心にこの美しい夜の堀割の景色が、一種の Romance を惹き起して、死ぬのが餘り恐しいごも思はれぬやうになり、フラ／＼と飛び込んでしまふ事が多かつた。

然し、身體の重さを自分で引き受けて水面に飛び降りる利

投じた。「清水の舞臺から飛んだ氣で」ご云ふ成句があるのだから、この事實に誤りはない。然し下の谷間の岩に當つて碎けて居る死體を見たり、またその噂を聞くご、模倣好きな人間も二の足を踏む。何うしても水死をしたいものはお半長右衛門のやうに桂川まで辿つて行くか、逢坂山を越えて琵琶湖へ出るか、嵯峨の廣澤の池へ行くより外に仕方がなかつた。然し死ぬ前のしばらくを、充分享樂しようご云ふ心中者なごには、この長い道程もあまり、苦にもならなかつた。が、一時も早く世の中を逃れたい人達には二里も三里も、歩く餘裕はなかつた。それで大抵は首を縊つた。聖護院の森だごか、糺の森なごには椎の實を拾ふ子供が、宙にぶら下つて居る屍體を見て、驚くごが多かつた。

それでも京の人間は澤山自殺をして來た。凡ての自由を奪はれたものにも、自殺の自由丈は殘されて居る。牢屋に居る人間でも自殺丈は出来る。兩手兩足を縛られてゐても極度の克己を以て息をしないごによつて、自殺丈は出来る。

ごもかく、京都によき身投げ場所のなかつた事は事實で

那には、ごんなに覺悟をした自殺者でも、悲鳴を擧げる。之は本能的に生を慕ひ死を怖れるうめきである。然かしも何うごもする事が出来ない。水烟を立て、洗つてから皆一度はうき上る、その時には助からうごする本能の心より外何もない。手當り次第に水を掴む、水を打つ、あえぐ、うめく、もがく。その内に弱つて意識を失ふて、死んで行くが、もしこの時救助者が、繩でも投げ込めご大抵は夫を掴む。之を掴む時には投身する前の覺悟も助けられた後の後悔も心には浮ばない。たゞ生きやうごする強き本能がある。自殺者が救助を求めたり、繩を掴んだりする矛盾を笑ふてはいけない。

ごもかく、京都にいゝ身投げ場所が出来てから、自殺するものは大抵疎水に身を投じた。疎水の一年の變死者の數の、多い時には百名を越したごさへある。

疎水の流域の中で、最もよき死場所は、武徳殿のつひ近くにある淋しい木造の橋である。インクラインの傍を走り下つた水勢は、なほ餘勢を保つて岡崎公園を廻つて流れる。そして公園ご分れやうごする所に、この橋がある。右手には平安神宮の森に淋しくガスが輝いて居る。左手には淋しい戸を閉めた家が並んで居る。従つて人通があまりない。それでこの橋の欄干から飛び込む投身者が多い。岸から飛び込むよりも橋からの方が、投身者の心に潜在して居る芝居氣を、満足せしめるものご見える。

所が、この橋から四五間位の下流に、疎水に添ふて一軒の小屋がある。そして橋から誰か身を投げると、必ず此家から極まつて背の低い老婆が飛び出して来る。橋からの身投げが、十二時より前の場合は大抵變りがない。老婆は必ず長い竿を持つて居る、そしてその竿をうめき聲を目當てに突き出すのである。多くは手筈がある。もしない場合には水音さうめき聲を追掛けながら、幾度もく突き出すのである。それとも遂に手筈なしに流れ下つてしまふ事もあるが、大抵は竿に手筈がある。夫を手繰り寄せる頃には、三町ばかりの交番へ使に行く位の厚意のある男が、屹度彌次馬の中に交つて居る。冬であれば火をたくが夏は割合に手輕て、水を吐かせて身體を拭いてやる、大抵は元氣を恢復し警察へ行く場合が多い。二言三言不心得を悟す口籠りながら詭言を云ふのを常とした。

かうして人命を助けた場合には、一月位経つて政府から褒狀に添へて一圓五十錢位の賞金が下つた。老婆は之を受取る、先づ神棚に供へて手を二、三度たいて後郵便局へ預けに行く。老婆は第四回内國博覽會が岡崎公園に開かれた時今の場所に小さい茶店を開いた。駄菓子やみかんを賣るささやかな店であつたが、相應に實入もあつたので、博覽會の建物が段々取拂はれた後も、その儘で商賣を續けた。之が第四回博覽會の唯一の記念物だ云へば云へる。老婆は死んだ夫の

残した娘と、二人で暮して来た。小金がたまるに従つて、小屋が今のやうな小綺麗な住居に進んで居る。

最初に橋から身投げがあつた時、老婆は何うする事も出来なかつた。大聲を擧げて呼んでも、滅多に来る人がなかつた。運よく人の来る時には、身投げは疎水の可なり烈しい水に捲き込まれて、行方不明になつて居た。こんな場合には老婆は暗い水面を見つめながら、微かに念佛を唱へた。然し、かうして老婆の見聞きする自殺者は、一人や二人ではなかつた。二月一度、多い時には一月に二度は自殺者の悲鳴を聞いた。それが地獄に居る亡者のうめきのやうで、氣の弱い老婆には何うしても堪へられなかつた。到頭老婆は自分で助けて見る氣になつた。餘程の勇氣と工夫とで、老婆が物干の竿を使つて助けたのは、二十三になる男であつた。主家の金を五十圓ばかり費ひ込んだ申譯なさに死なうとした小心者であつた。巡查に不心得を悟される、此男は改心をして働く云つた。夫れから一月ばかり経つて、彼女は府廳から呼び出されて、褒美の金を貰つたのである。その時の一圓五十錢は老婆には大金であつた。彼女はよく考へた末、その頃や盛になりにかけた郵便貯金に預け入れた。

それから後云ふものは、老婆は懸命に人を救つた。そして救ひ方が段々うまくなつた。水音と悲鳴とを聞く老婆は急に身を起して裏へかけ出した。そこに立てかけてある竿を

取り上げて、漁夫が戯れて鯛でも突くやうな構へて、水面を睨んで立つて跪いてゐる自殺者の前に竿を巧に差し出した。竿が目の前に来た時に取りつかない投身者は一人もない云つてよかつた。夫を老婆は懸命に引き上げた。通りがりの男が手傳ふたりするときは老婆は不興であつた。自分の特權を侵害されたやうな心持がしたからである。老婆はこのやうにして、四十三の年から五十八の今迄に、五十幾人かの人命を救ふて居る。だから褒美の場合の手續なども頗る簡單になつて、一週間で金が下るやうになつた。府廳の役人は「お婆さんまたやつたなあ」と笑ひながら、金を渡した。老婆も初めのやうに感激もしないで、茶店の客から大福の代を、貰ふやうに「大きに」と云ひながら受け取つた。世間の景氣がよくて二月も、三月も、投身者のない時には、老婆は何だか物足らなかつた。娘に浴衣地をせびられた時なごにも、老婆は今度一圓五十錢貰ふたらと云ふて居た。その時は六月の末で例年ならば投身者の多い季であるのに、何うしたのか飛び込む人がなかつた。老婆は毎晩娘と枕を並べながら聴耳を立て、居た。そして十二時頃にもなつて、愈々駄目だと思ふ「今夜もあかん」と云ふて目を閉ぢる事なごもあつた。

老婆は投身者を助けることを非常にいゝ事だと思つて居る。だから、よく店の客なご、話して居る時にも、「私でも之で、人さんの命をよつほど助けてゐるさかへ、極樂へ行か

れますわ。」と云ふて居た。無論その事を誰も打ち消しはしなかつた。

然し老婆が不満に思ふことは、たゞ一つあつた。夫は助けてやつた人達があまり老婆に禮を云はない事である。巡查の前では頭を下げて居るが、老婆に改めて禮を云ふものは殆どなかつた。まして後日改めて禮を云ひに来る者などは一人もない。

「折角命を助けてやつたのに薄情な人だなあ」と老婆は腹の裡で思つて居た。ある夜、老婆は十八になる娘を救ふた事がある。娘は正氣が付いて自分が救はれた事を知る、自身も世もないやうに、泣きしきつた。やつと巡查にすかされて警察へ同行しようとして橋を渡らうとした時、娘は巡查の隙を見て再び水中に身を躍らせた。然し娘は不思議にも、また老婆の差し出す竿に取りすがつて救はれた。

老婆は再度巡查に、連れられて行く娘の後姿を見ながら、「何邊飛込んでもやつぱり助りたいものやなあ」と云ふた。老婆は六十に近くなつても、水音と悲鳴とを聞く、必ず竿を差し出した。そしてまたその竿に取すがることを拒んだ自殺者は一人もなかつた。助かりたいから取りつくのだと老婆は思つて居た。助かりたいものを助けるのだから、これ程いい事はないと老婆は思つてゐた。

今年の春になつて、老婆の十數年來の平靜な生活を、一つ

の危機が襲った。夫は二十一になる娘の身の上からである。娘はやゝ下品な顔立てはあつたが、色白く愛嬌があつた。老婆は遠縁の親類の二男が、徴兵から歸つたら、養子に貰つて貯金の三百幾圓を資本として店を大きくする筈であつた。之が老婆の望みてあり楽しみであつた。

所が、娘は母の望みを見事に裏切つてしまつた。彼女は熊野通二條下るにある熊野座と云ふ小さい劇場に、今年の二月から打ち續けて居る嵐扇太郎と云ふ旅役者とありふれた關係に陥ちて居た。扇太郎は巧みに娘を唆かし、母の貯金の通帳を持ち出させて、郵便局から金を引き出し、娘を連れたまゝ、何處にもなく逃げてしまつたのである。

老婆には驚駭と絶望との外、何も残つてゐなかつた。たゞ店にある五圓にも足りない商品と、少しの衣類としかなかつた。それでも今迄の茶店を續けて行けば、生きて行かれない事はなかつた。然し彼女には何の望もなかつた。

二月もの間、娘の消息を待つたが徒勞であつた。彼女にはもう生きて行く力がなくなつて居た。彼女は死を考へた。幾晩も／＼考へた末に、身を投げやうと決心した。そして堪へがたい絶望の思を逃れ、一には娘へのみせしめにしようと思つた。身投げの場所は住み馴れた家の近くの橋を擇んだ。彼所から投身すれば、もう誰も邪魔する人はなからうと、老婆は考へたのである。

老婆は老いた肌が見物にあらはに、見えてゐたのに氣がつく／＼、あわてゝ前を掻き合はせたが、胸の裡は怒と耻と燃えて居るやうであつた。見知り越しの巡査は「助ける側のお前が自分でやつたら困るなあ」と云ふた。老婆は夫を聞き流して逃げるやうに自分の家へ駆け込んだ。巡査は後から入つて来て、老婆の不心得を悟したが、夫はもう幾十篇も聞き飽きた言葉であつた。その時ふと氣がつく／＼、あけたまゝの表戸から例の四十男を初め、多くの彌次馬が物めづらしくのぞいて居た。老婆は狂氣のやうに唾け寄つて烈しい勢で戸を閉めた。

老婆はそれ以來淋しく、力なく暮して居る。彼女には自殺する力さへなくなつてしまつた。娘は歸りさうにもない。泥のやうに重苦しい日が續いて行く。

老婆の家の背戸には、まだあの長い物干し竿が立かけてある。然しあの橋から飛び込も自殺者が助かつた噂はもう聞かなくなつた。

老婆はある晩、例の橋の上に立つた。自分が救つた自殺者の顔がそれからそれと頭に浮んで而も凡てが一種妙な、皮肉な笑を湛へてゐるやうに思はれた。然し多くの自殺者を見てゐたお蔭には、自殺をする事が家常茶飯のやうに思はれて、大した恐怖をも感じなかつた。老婆はフ／＼としまゝ、欄干から、ずり落ちるやうに身を投げた。

彼女がふと、正氣付いた時には、彼女の周囲には巡査と彌次馬とが立つて居る。之はいつも彼女が作る集團と同じであるが、たゞ彼女の取る位置が變つて居る丈である。野次馬の中には巡査の傍に、いつもの老婆が居ないのを不思議に思ふものさへあつた。

老婆は耻しいやうな憤ろしいやうな、名状し難き不愉快さを以て周囲を見た。所が巡査の傍の何時も自分が立つべき位置に、色の黒い四十男が居た。老婆は、その男が自分を助けたのだと氣の附いた時、彼女は掴み付きたいほど、その男を恨んだ。いゝ心持に寝入らうとするのを、叩き起されたやうなもしやくしやした、烈しい怒が、老婆の胸の裡に充ちて居た。

男はそんな事を少しも氣付かないやうに「もう一足遅かつたら、死なしてしまふ所でした」と巡査に話して居る。それは老婆が幾度も、巡査に云ふた覺えのある言葉であつた。その内には人の命を救つた自慢が、あり／＼と溢れて居た。

安樂椅子

父の病が重い云ふ電報を受けとつてからも、私は二三日歸らうか歸るまいかと思つた。父は、國にあつた少年時代だつて打ちこけて話したことはなかつたし、まして此頃では三四年目毎に歸つたときに、二言三言言葉を交すだけで、感情的には何の親しみを持つてゐなかつた。たゞ肉親と云ふ強い偶然の綱でくゝられてゐるために、父が危篤だとすると歸らなければならぬやうな氣が自分でもするし、また他人にそれを聞かせても、目の色を易へて、私に早速の歸國を勧めてくれる人もゐた。だが、父が病苦に悩みながら死んで行く容子なぞを見に行くことなどは、何だか無用にイヤな物を見に行くやうな氣がしてならなかつた。だが、やつぱりそんな氣持で、數年前母が死んだとき歸らなかつたが、その後何となく氣が、こがめられた。母の命日は、正月の二三日だが、去年の正月だつたか、私は初夢に、母の墓參をしてゐる夢を見て、やはり母の死床に駈けつげなかつたことを、心の中のことかて後悔してゐるのだなと思つた。

そんな意味で、母よりはズツと親しみの薄い父ではある

てよいことをしたと思つた。やつぱり父の死床に侍する方がよいと思つた。さう思ふと、もう父は死んでゐはしまいかと云ふことが、急に心配になり出した。歸つた以上なるべくなら、死目に會ひたいと思ひ出した。

連絡船に乗つたのは、八時頃だつた。瀬戸内海は、いつものやうに明るいまわやかな海だつた。何と云ふゆたかな、光に充ちた海だらうと思つた。忘れはてた昔の愛人にも會ふやうな心持で、私は前甲板に立つて故郷の山々を見てゐた。さの山にも、さの森にも、それ／＼少年時代の記憶がついてゐた。だが、山川の姿にも久しく接しないので、ついさうでない山を、その山ださ感ちがひして、後で氣がついたりした。

兄が、親類の者二三人を棧橋まで、迎ひに来てゐた。私は、いきなり訊いた。

「お父様は、さうだ。まだ生きてゐるのか。」

「うむ。まだ生きて居る。」

こ、兄は答へた。私達の家族は、こんな場合でも、あまり話をしない流儀だつた。私達は、すぐ俵に乗つて家へ急いだ。小さい都會に、記念道路さか云ふ廣い道が、不調和につけてあつた。

私達の俵は、十丁ばかり行くこ、すぐ私の家の門についた。見るこ、古い門は無くなつてゐて、扉が門の廣さだけ開

が、今度は初から歸る方の氣持が強かつた。だがあまり早く歸りすぎて、一週間も十日間も、父の死を待つて、東京でのいろ／＼な仕事を氣にしながらつまらぬ故郷で、日を過すことなどは、私には到底堪へられなかつた。

私は、もしかすると父死すの電報が、來はせぬかと思ひながら、二三日出發を遅らせたが、「モウアト四五ニチカエルナライマ」と云ふ電報が來たので思ひきつて歸つた。

下の關行の急行が、夜の十一時近く岡山へ着いたので、宇野行の汽車の出る翌朝まで、私は岡山の宿につかねばならなかつた。

私の宿まつた三好野華壇と云ふ宿屋は、落着いたしづかな宿屋だつた。戸も障子も閉してなかつた。庭一面の闇にさるすべりのやうな赤い花が咲き亂れてゐた。そして、その花の下は泉水になつてゐるのだらう、時々魚が水をはねる音がした。東京での繁雜な生活の中なごては到底得られさうもないしづかな一夜だつた。私は、心が東京の煩しい生活から、洗はれたやうにすが／＼しく感じた。私は、やつぱり歸つて來

いてゐるのだつた。勝手口の方から、出入するので、此の門は、殆んど不用になつてゐるこは云へ、崩れたまゝ、そのまゝになつてゐるのは、淋しかつた。私は、家へ月々送金してゐるのではあるが、きまつたものゝ外は、殆んど送らなかつた。私の肉親に對する冷淡さのために、門が無くなつてしまつたのだらう。

玄關のすぐ横の八疊の座敷に、父は臥してゐた。瘡せて骨ばかりになり、齒が無い口が、咽喉まで落ち込んでゐた。「老いさらばえたる老人」として、古い物語りに出て來る老人のやうに瘡せ朽ちてゐた。だが、思つたほご、みにく／＼もあさましくもなかつた。私なごは違つて思ひきり高い鼻がいよいよ高く見えて、死相の出でゐる顔を、却つて高尙にさへ見せてゐた。身體の中の汚い液體などは、すっかり乾き切つて身體全體がから／＼してゐる感じだつた。

「今朝、初めてお前が歸るのを知らしたんぢや。昨日から知らして置くこ、待ち切れんと思つたから。」

兄は、私にさう云つてから、さ／＼眠むつてゐるらしい、父の耳に口を寄せた。

「寛が歸りましたぜ。」

父は、氣がついて、魚の目のやうに、生色のなくなつた茶色の目を、私の方へむけてしよぼ／＼させた。

「さうな、寛さんが歸つたんぢや。分りますか。」

義姉が父の耳に口をあて、叫ぶと、父はうなづいた。歡喜
——それに多くの悲しみの加つた表情が、もう半もうろ
こしてゐる眼の中にうごいた。

「さうな。分りますか。」

さう云つて、私は父の手をさつた。さすがにあはれい悲し
みが、胸の中にうごいた。

父は、何か云ひたさうにして齒のない口をもが／＼して、
「ほつ……」

と云ふやうな音を出した。

「昨日までは、まだ云ふことが分りよつたんぢや。今朝から
は分らんようになつたんぢや。お父さん、何んな。」

さう云つて、義姉は、父の耳に口をよせた。父は、もごか
しさに、口をもが／＼させて、また何やら分らない呻き聲
を出した。

「何んな。なんな」

私も、つひ國言葉で、父の耳に叫んだ。いらだ、しげな表
情を浮べて、父は右の手を上げ、指したが、その指した方
向には、何もなかつた。

「お父さん、書いて見ませ。」

義姉はさう云つて、雜記帳の白い頁を開けて、父の顔の前
に差し出した。

ちやから、邪魔をせん方がえ、と云ふんぢや。」

と、兄は答へた。私は、病苦のないことがうれしく思つた。

その日の午後私が、母の墓參をして、歸つて來たときは、
父は私の顔を見ても、それが私であることを意識してゐるら
しくは見えなかつた。刻々、衰弱して行くらしかつた。私
は、しばらく枕頭に坐つてゐた。

また、父が口をもが／＼させた。そして呻いた。

「み……」

「あゝ、水ぢや。水と云ふのだけは分るんぢや。」

義姉が、さう云つた。私は、せめての孝養にと思つて、長
い口のついた水差で、父の口の中へ水を入れてやつた。父
は、それをのみそこなつて、いた／＼しくもせんた。

父は、やつこもせびるさ、また分らない呻き聲を出した。

義姉と私の實妹とが左右から、

「なんな。なんな。」と訊いた。

「起きたいと云ふんな。」

兄が訊いた。父は、うなづいた。兄と義姉とは、父の上半
身を、徐々に一寸づゝ位起して行つた。だが、起しきつてし
まふと、枯れ却つてゐる父の腰骨は、烈しい苦痛を得たらし
かつた。父は、苦しさにうめいた。

「やつぱり、ねるんな。」兄が云ふと、父は大人しくうなづい
て、また元のやうに仰向けにねた。

右の手の指先で、白い頁の上に何か書いた。だが、父は畫の
多い漢字を小さい場面へゴタ／＼こかくので、指先の動き丈
で、さう判讀しようもなかつた。

「字を書かせるさ、漢字ばかり書くんぢや。」

と、姉は云つた。儒學の家に生れただけ、それほど學問を
したわけではないのだが、字丈は漢字をかきたがるのだつ
た。

「アイウエオの五十音圖がないかしら。あれを指させるこ
い。」

さう私が、發案した。そして、小學校讀本の一の卷の、五
十音圖を、父の顔の前に出したけれど、父はいぶかしげにそ
れをみつめたぎりて、もうその一字々々は見えぬらしかつ
た。

父の云ひたいことを、云はせようとするあらゆる試みが、
失敗すると、父はあきらめたやうに、疲れた目をこぢて、し
まつた。

「何も病氣はないんぢやから、苦しきもないんぢや。たゞ臥
てゐることが苦しきんぢや。」

兄は、さう云つた。

「お醫者さんには、見せたの。」

と、私は云つた。

「見せたけれども、藥は呉れん。もう、だん／＼往生するん
ぢや。」

「外に、苦しきことはない。臥てゐるのが苦しんぢや。」と、
兄が云つた。

「病人が、起きる／＼と云ひ出したり、冬、障子を開けてく
れやこし云ひ出すと、もう先が長くないんぢやとなう。」と、
義姉が云つた。

私達は、ちつと父の顔を、みつめてゐた。すると、父がま
た、もが／＼口をうごかし始めたかと思ふと、

「あ……んらく……」と云つた。

「あんらく……何だらう。」私が云つた。

父は、またもごかしさに、口をうごかしながら、

「い……す。」

と、つけ加へた。

「あゝ、安樂椅子ぢや。前から、安樂椅子を買つてくれ／＼
云ひよつたんぢや。」義姉が云つた。

「買ってあげればいゝぢやないか。」

私は、ルイ十四世の宮廷にでもあるやうな、ごんな立派な
安樂椅子でも、買つてやりたく思つた。

「いや、買ふたんぢやけさ、あんまり腰かけもせんぢや。
こなに、ねてゐると、苦しきから、安樂椅子にでもこしかけ
たら、安樂になるやうに思ふんぢやらうけさ、身體の丈夫な
人が、こしかけてこそ、安樂ぢやらうけさ。」

兄は、さう云つた。

父は、そのあくる日、死んだ。父は、二三年軽い中風に罹つてゐたのだが、それ以来の望は、俾に乗つて高松の街を思ふ存分歩きたいと云ふことだつた。今度死床についてからの望みは安樂椅子にこしかけたいと云ふのであつた。私には、人間が物も云はれなくなつた死に際までも、何かの望みを持つてゐることを、考へると悲しかつたが、父の望が、いかにも手輕であるのが、うれしかつた。

父が、柩の中に、は入つてしまつた後だつた。私は玄關の片隅に、腕附の籐椅子が、一臺置いてあるのに氣がついた。五六圓位の安物だつた。これが、兄が買つて與へたと云ふ安樂椅子だらう。なるほさ、これぢや父があまり、腰かけなかつたのも無理はないと思つた。

蠣フライ

汽車が、國府津を出た頃、健作は食堂へは入つて行つた。寝るまでの中途半端の時間なので、客は十四五人もあちらの卓や此方の卓に散在してゐた。大抵は、二三人連れてビールや日本酒を飲んでゐた。健作は、晩飯を食つて居ないので、ビフテキとチキン・ライスを注文した。

健作はチキン・ライスを喰つてしまつてから、ふさ氣がついたのだが、健作が坐つて居る席は、一番遠い端に、此方へ背を向けて、坐つてゐる女が、愛子に似てゐることだ。肩の容子や、襟すぢや着物の好みも、愛子を想ひ起さずにはゐられなかつた。愛子は、もう五年以上會つてゐなかつたし、彼女が、商科大學出の秀才と結婚したと云ふ以外は、何もきいてゐないのだがしかし彼女の後姿などはこんな場合にも、思ひ出せないことはなかつた。その上商科大學出の秀才らしい男が彼女とさし向ひて、食事をして居た。

腰かけてゐるために、背の高さは、分らなかつたが、立ち上つたら、スラリとするに違ひない上半身を持つてゐた。フオークの使ひ方なさが、充分は分らないが、愛子らしい手さ

ばきだつた。

健作は、愛子と一しよに、幾度も食事をした。だが、そんな場合、彼女位、はにかみ屋はなかつた。そんなに、お腹がすいてゐても、健作の前では、何一つ手をつけなかつた。幾品も取つた料理に、全然箸をつけない時が、あつた。

「何か、お上りなさいよ。お腹が、すくてせう。」

「いゝえ。」

「をかしいな。でも、僕はお腹がすくから食べますよ。」

「えゝ。さうぞ。」

彼女は、頑強に何も喰べなかつた。

だが、その中に彼女でもやつぱり喰べる料理が、あるのに氣がついた。それは、蠣フライだつた。はにかみ屋の彼女もカキフライだけには、手をつけた。

「わたし、カキは大好きよ。カキフライならいくらでもいただくわ。」

さう云つて、御飯をたべずに、彼女はカキフライを喰べた。

健作は、彼女さしよにレストランへは入るときは、一番に訊いた。

「おい、蠟フライは出来るかね。」

そして、出来るさきくさ安心して、は入った。春が来て、蠟のない季節になると健作は彼女さしよに、食事をするのに困った。だが、彼女は食事をしないことによつても苦痛を感じないらしかった。御飯の代りに彼女は、絶えず、デセールやチョコレートを喰べてゐた。

彼女さしよ、別れてからも、健作は蠟フライを見るごとに、彼女を思ひ出した。彼女が、何處かで、きつと蠟フライを喰べてゐるに違ひないからだつた。

愛子らしい後姿を見て、健作はすぐ、蠟フライのことを思ひ出した。健作は立ち上つて、その傍へまで行つて愛子か、さうかを確める必要がなかつた。確めたところで、たゞお互に心を擾し合ふだけだつた。また、そのことで幸福らしい彼女の夫婦生活に少しの陰影でも投げることは、いやだつた。やがて、愛子らしい女は、立ち上つた。背丈は、愛子よりも少し高いやうに思つた。だが、顔は見せずじまひて主人の後により添ふて向ふ側の出口から出て行つてしまつた。

健作は、それでいゝと思つた。結局たしかめないのがいゝと思つた。愛子の客車と健作の乗つて居る客車とは、食堂車で隔てられてゐるから、此方で強いて確めようと思はない以

上、確めずに済めることをうれしいと思つた。

だが、健作が勘定しようとしてボイを呼ぶと、やつて来たボイは、先刻愛子らしい女のサーヴをしてゐた一番背の高いボイだつた。

健作は、勘定を拂ひながら、訊かずに居られなかつた。

「ねえ、今君が給仕してゐた御夫婦があたねえ。」

「え、ゐらつしやいました。」

「あの奥さんの方は、蠟フライを喰べなかつたかい。」

「え、召上りましたよ。御自分のを召し上つた上に、旦那さまの方も召し上りましたよ。」

健作の頬に、微笑が思はず浮んだ。そして彼は少し寂しかつた。けれども、愛子の幸福を欣んだ。

第一人者

吉岡正夫が父の轉任の都合で四國の北岸にある此 中學に轉校をして来た初には、何さなく薄氣味の悪い思をした。云ふのは地方の中學ではともすれば、新しく轉校して来た學生を壓迫する。偶には何の理由もないのに生意氣だとか氣障だとか云つて袋叩きにする事などがある。殊に九州や四國では夫がひざい。で正夫はもう後一年で卒業する事が出来る東京の私立中學に止りたかつたのであるが、正夫の母は一人しかない男の兒を膝下に置きたい爲、同行を求めて止まなかつたのである。

正夫が、市に着いたのは三月の終りであつた。春の來るのが早い南國ではもう麗かに澄み渡つた浅緑の空の下に、内海の藍色の潮がヒタ／＼と漲つて居る頃であつた。船が市に近づくさ海岸に在る古城の白聖が空にも海にも映つて、微かに輝いて居る背後に市の小さい都會は靜に横たはつて居るのであつた。

正夫は大都會の繁華と喧擾を愛する少年ではあつたが、また此の美しい海岸の小都會に對しても好奇の目を睜るのであつた。

が彼はT市の閑靜な番町に、自分の家が定まつた後、初めて中學の門をくゞる日は何さなく氣が進まなかつた。自分を全く見知らない、而も自分に對して何んな感情を懷いて居るかも知れない多くの人々の間に身を交へる事は何うしても、ある種の不安と恐怖の種とならずには居なかつた。

「僕嫌だな、何だかきまりが悪いや。」と、初登校の朝は、こんな意味の言葉を母に對して幾度も繰り返して、自分の不安を紛らさうとした。

が正夫が、T中學の五年甲組の教室に初めて姿を見せたとき、その周圍に興へた感 覺は正夫の豫期して居たものとは全く違つて居た。正夫の瀟洒な洋服姿と、その都會的な顔とは先づ彼の新しい級友をして、彼にある好意を持たしめた。彼が東京から来た事が判つた時、皆の持つて居る好意はもつと深くなつた。地方の中学生は大抵は東京崇拜の癖があ

るものだから。

其上正夫に對する皆の好意は二、三日するさある程度の尊敬をさへ交へるやうになつた。それは英語の論議が正夫に當つた時、彼は非常な熟練と光彩を以て其役目を果した。實際彼の發音なり、譯し方なりは田舎には見られぬ垢抜けのした光つたものであつた。

級の中でも氣の軽い如才のない學生は先頭第一に正夫と言葉交へて、夫を一の誇のやうに思つて居るらしかつた。日を経るに従つて正夫に交情を求むる者が多くなつた。一週間を経たぬ内に、正夫は自分が組に於ける人氣の中心であるの氣が附いた。又正夫は自分に交情を求め人々に十分の満足と與へる事を解して居た。彼は東京に育つた少年のみが持つて居る魅力のある秀れた交際術を持つて居たのである。

正夫は誰にも好かれた。誰をもそらさなかつた。彼は無意識の裡に一級の人心を收攬した形であつた。

間もなく正夫が運動なら何でもやる事が判つてから、彼は一躍して全校の人氣役者になつた。四月の終にT中學が近所のM中學と庭球の試合をした時、正夫は選手に缺員があつた爲に勧められて前衛を務めた。其時彼は痛快な演技を見せた。軽快なモーションと水際立つたストツプヴォレーとで、彼は見物の喝采を博した。

まれて、一壘なごを守る事なごあつた。彼の鮮やかな捕球や盗塁は又々皆を感嘆させた。

全校の生徒の間に吉岡正夫は段々一個の偶像として取扱はれるやうになつた。何をしても彼は華美であつた。何をしても彼は鮮かであつた。彼は早くも教室に於ける花形となり運動場に於ける英雄となりました。

彼が町を散歩して居る時なご、摺れ違ふ下級生の群はよく丁寧にお辭儀をした後、振り返りながら彼に就て嘆賞的な言葉を交し合つた。

友人が五六人集る時は彼は何時も一座の中心であつた。彼の巧みな言ひ廻しや、警句なごが、何時も皆の心を魅した。級に於ける、何んな問題に就ても彼の意見は一番尊重せられた。而も聰明な彼は自然に級友の間に勢力を占めて行く事さへ知つて居た。

三

其間に段々一學期が終りに近づいた。運動場の葉櫻が地上に投げる影が濃くなつた。空の色とT市の沿岸を洗ふ内海の潮の色とが相伴うて群青色に變つて行く。

到頭一學期の試験が來た。正夫の心の裡で試験に對してある不安を懐かすには居られなかつた。自分は今迄は學力に於ても優に全級の最上位にあるものと信ぜられて居た。が、試

二

その内に何時しか春が老いて、壯快な五月が來るさ此中學では、創立記念の大運動會が催される。

五年の中から十人の委員が選舉されて色々な庶務に當つた。正夫は委員の章である紫の布を右腕に捲いて、色々な競走の出發掛を務めて居た。凡ての學生と見物人の目は右の手に合圖の短銃を持つて居る瀟灑な正夫の姿に集つた。彼は學生として一番華やかな晴がましい役廻りを務める自分の得意と満足を感じたのであつた。

彼は學科の方でも、段々名聲を増して行つた。彼は數學は餘り得意ではなかつた。でも問題の解法を命ぜられて、黒板の前で立ち盡すやうな事はやらなかつた。數學を除いては大抵の學科に於て、彼は級友を感服させた。殊に彼の書く新しい文章は皆に清新な驚異を與へたのである。

彼は短艇を漕いだ。内海の澄明な潮の上で、彼は隅田川で習つた新しい漕法を得意になつて説明する事なごもあつた。彼は野球も拙くはなかつた。野球部は頻りに彼に選手たらんことを勧めたが、彼は少し肩が弱いので何うしてもプレートに立つこと又は出来なかつた。彼は華やかな投手の位置なれば兎も角普通の選手として野球にのみ没頭する事を餘り好まなかつた。夫でも試合の時に急に缺員がある時なごは頼

験は今自分の學力を何の腹藏なく評價しようとして居るのである。彼は級友の自分に對する期待を裏切る事は堪へ難い事であつた。

東京の中學に居た頃は首席からは可なり離れて居た。彼は今迄は自分の才で實力を二倍にも三倍にも見せて來たのであつた。彼は何うしても首席になりたいと思つた。

愈々試験が近づいた。正夫の野心は彼をして十分勉強せしめた。

暑中休暇になる前に試験の成績は發表された。そして五年甲組の首席は皆の期待した通り吉岡正夫であつた。成績が張り出された控室で彼の崇拜者の誰彼は彼を圍んで喝采した。「痛快だね。榊谷を蹴落して呉れて、あんな奴に風上に立たれるさやり切れないからな。」「ナニ吉岡君が首席になるのは初から定まつて居るさ、ねえ君。」正面から賞め立てる者があつた。正夫は、もう凱旋した將軍のやうに得意であつた。「ナニ君偶然だよ……」さ紛らして居るもの、喜悅と満足は胸一杯であつた。何をやらしても花形で、何時でも群衆の人氣の焦點にある自分の幸福をしみじみ感じた。彼は之からも、かうした光榮ある位置を決して離れまいと決心した。

長い夏休みが過ぎて秋が來た。二學期の初からも正夫は相變らず級の牛耳を取つた。否全校の牛耳を取つた。學期の初に級長の改選があつた。榊谷は彼に級長の席を譲らねばなら

なかつた。彼が級の中心でありたい、首領でありたいと云ふ欲望は十分に達せられた。彼は凡ての點に於て全校の第一人者であつた。

彼は運動としては庭球に一番熱心であつた。彼は庭球部の委員となつて大將の前衛を引き受けた。一學期にも三回ばかり附近の中學校との對抗試合があつた。其度毎に大將の組は見事な優勝を占めた。後衛の太田は眞面目にねばる男であつた。正夫は前衛として思ふ存分に活動した。

所がT中學の庭球部には忘るべからざる仇敵があつた。夫は内海を隔てた山陽道の大都會にあるH中學であつた。T中學はH中學の爲に四五年續けて破られて居た。「が今年には愈々復讐が出来る、吉岡が居るから。」と全校の生徒は凡ての期待を吉岡の頭上に置いた。何時も負けるのは前衛が悪いからだ。所が今年には吉岡が居る。戦はずして勝利は明かだ、と皆はさう思つた。夫も無理はなかつた。吉岡に對する信頼は一種の信仰になりかゝつて居たのだから。

H中學へ仕合申込の挑戦狀が送られた。返事は直ぐ來た。日取は十月の十七日と定まつた。

正夫も流石に責任の重いのを感じた。彼は他の選手と共に毎地球の行き通ひが、見えなくなる薄暮迄練習を續けた。其時のT中學の庭球部は大將組を除いては大抵は弱かつた。ただ副將になつて居る大野山本と云ふ組が其頃グン／＼腕を上

安を感じて居たのである。

仕合は正午十二時から始まつたが、仕合の時には何時も審判をする筈のKと云ふ數學教師がその日は差支へがあつて見えなかつた。又H中學側にも適當な人がなかつた。仕方なしに兩方の選手が交代に審判の席に立つ事になつた。

T中學は最初に大野、山本の副將組を出した。之は弱い敵と當らせて優退させる作戦であつた。夫は見事に圖に當つた。副將組の大野山本の當り方は素晴らしいものであつた。殊に前衛の山本は、ネットに添うて燕のやうに輕快に身體を蹴しながら見事なストツプヴォレーをなした。その見事な演技振りに、中學の生徒は熱狂して喝采した。正夫は山本に對する喝采に最初は加はつた。が彼は其喝采が激しくなるに従つて微かな不安を感じた。夫は大將たる自分が山本以上の喝采を博する事が出来るだらうかと云ふことであつた。彼は山本よりも拙く行つたら何うしよう、大將たる自分が手もなくやられたら何うしようと思ふと、自分の技倆に對する自信がラケットを握りしめる指の間から脱け出すやうに思はれた。

大野山本組は敵の二組を見事に斃して優退した。

その後に出た敵の中堅組が優退した。味方の第四の組が敵の第四の組と合つて、又も敵は難作のない勝利を占めた。愈愈正夫がラケットを手にして立つた。敵味方共に一齊に拍手を以て、大將の出陣を迎へた。

げて來て居た。殊に前衛の山本は吉岡の特長をスツカリ呑み込んで、中學選手としては立派な腕になりかけて居た。仕合の近くになるに従つて副將の山本組が日に／＼目に見えて腕を上げた。殊に前衛の山本は敏捷であると共に落着があつた。大將組が三度に一度は副將組に勝を譲つた。而も負けるにしても勝つにしても火の出るやうな接戦であつた。生徒達は副將組の進歩を祝しあつた。吉岡が卒業しても大丈夫だ、立派な後繼者がある。と安心する者さへあつた。が吉岡自身は何となく不安を感じた。副將組の實力が段々増すに従つて大將たる自分の位置の動搖を、感ぜずには居られなかつたのである。

四

仕合の日は來た。その朝、運動場の庭の木で百舌鳥が一羽長い間鳴き渡つて全校の生徒の氣を緊張させた。九時頃H中學の帽子を着けた中學生が列を作つて校門には入つて來た。そして庭球コートの周圍の芝生に腰を下して仕合の始まるのを待つた。

T中學の選手達は水色の制服を着て、コートを掃いてから、又ラインへ石粉を撒いたりした。正夫は平常よりは少し蒼い顔をして居た。そして人に訊かれると「昨夜寝そこなつたものだから。」と答へて居た。彼は何となく今日の仕合に不利を感じた。

戦は先づ吉岡組のサーヴで始まつた。後衛は相互に自重して高い球を送つて前衛を避けた。吉岡は次第に後方へ下つて居たが、機を見て見事なスマッシングをした。味方は一齊に拍手をしたが、審判は冷靜に「アウト。」を宣告した。敵は拍手を以つて吉岡の失策を祝した。此の第一の失策は全く正夫を上り氣味にしてしまつた。彼は何時にもなく焦つた。そして何時にもなく失策した。「吉岡シツカリ。」と味方は聲を揃へて應援した。何時も賞讃の言葉ばかりを聽くに馴れた彼はこの激勵の言葉を聞くのを好まなかつた。負けかけて居ると云ふ自覺は愈々彼を上り氣味にした。一ゲーム、二ゲームとも彼の敗に歸した。最後のゲームに彼は死身になつて奮闘した。が事實は冷酷である。そのゲームにも正夫は零敗を喫したのである。味方は皆同情を以て彼を眺めた。が他人から憫まれて居ると云ふ事が又彼の心を苦しめた。彼は初めて敗者の悲哀を知つた。而もその悲哀を平靜な心で辛抱する爲には、彼は今迄餘りに優勝の位置に馴れ過ぎて居たのである。彼が常勝

の光榮、第一人者たる位置は、今日で終るかも知れないと思つた。選手達は皆彼の周圍に集つた。「吉岡君、大丈夫だよ。山本君が今日は當つて居るから大丈夫負けはしないよ。」と云つて慰めた。

が、正夫は思つた。山本が勝つても夫は山本の勝利であつて自分の勝利ではない。山本が勝てば庭球の大將たる自分の位置は、空虚な名義丈のものになつてしまふのだ。何時も自分が占めて居る殊勳者たる光榮は山本の爲に奪はれてしまふのだ。さう思ふと、彼の心の裡で「山本が負けて呉れ、ばい。」と嘯く聲がした。「山本が負けたら、中學は敗れるが、自分の大將たる名譽は動かないのだ。」と云ふ嘯きが夫に續いた。

五

彼は敗戦の苦悶で暫くボンヤリとして居たが、ふと氣が附くと山本組は、敵の優退組と相對して火花を散す激戦をやつて居る。此日の山本は殆ど奇蹟に近い腕を示して居る。殆ど失策をしない山本を正夫は、賞讃よりも寧ろ嫉視の眼を以て見て居た。その嫉視がさすれば憎惡に變り、彼は山本の失策するのを期待するやうな心持さへ懷き始めた。

ふと雷のやうな喝采が起つた。夫は味方が山本組の勝利を賞讃したのであつた。山本組は少しく休息すると再び蹶起し

て敵の大將に向つた。するさ横に居た吉岡の後衛の太田が、「吉岡君、今度は君が審判をして呉れ給へ、大事な仕合だから。」と彼に嘯いた。吉岡は負けた自分が審判席に着くのは何となく氣が引けた。が一度の敗北に氣を落す小心者に見られるのが嫌さに彼は審判席に着いたのである。

T中學とH中學の勝敗を決すべき最後の仕合が、敵味方の強い緊張の裡に始まつた。山本の奇蹟は尙續いた。彼は平生とは別人と思はれる程の秀れた腕を見せて、見る／＼内に一ゲームを取つた。

審判席に居る正夫の苦悶も仕合と共に進んだ。全校が熱望して居る勝利が自分以外の者の手に依つて得られつゝあると云ふ事が、彼には堪らなかつた。山本は今自分の負けた敵の大將を壓迫して、全校の尊敬の的、期待の的、信頼の的となりかゝつて居る。山本は今大將たる自分以上の腕を示して、自分を蹴落しかゝつて居るのだと思つた。

「山本が負けて呉れたら。」夫が彼の苦悶を救ふ唯一の希望であつた。然し卑しい、怯しい希望である事は、吉岡の良心が明に知つて居た。が彼の飽くなき野心は彼の良心を麻痺せしめた。

六

山本組は既に二ゲームを取つて居た。今は最後のゲームで

狂つて居る。誰も其間に一の冷たく苦悶して居る心の在つた事に氣が附かなかつた。

あつた。が勝利は明に山本のものであつた。見る／＼山本は敵の後衛の打つた高球を、網から三間ばかりも下りながら、大きくスマッシングをした。その球は敵陣深く貫いて後のラインを掠めた。インであるかアウトであるか、容易に判定の着かない球であつた。正夫は「アウト。」と高く叫んだ。拍手を始めてやうとした味方の學生は不本意ながら夫を止めて、低ながら不平の嘯きを洩した。H中學の應援隊は聲を揃へて、「審判！ 公平！」と叫んだ。今度は敵の後衛の球が山本の右を抜いて味方の後方のラインを掠めた。その球も亦曖昧な球であつた。「イン。」と正夫は再び高く宣言した。味方の應援隊は以前よりも、もつと高い不平の聲を揚げた。夫に應じて敵方から、「審判！ 公平！」の聲が起つた。

夫にも拘はらず山本の腕は益々冴えて行つた。彼は最後に文句の附けやうのない鮮かなストツプヴォレイを二度續けて、見事な勝利を占めた。

勝利はT中學に來たのである。應援隊熱狂は極點に達した。萬歳！ の聲と共に學生は次ぎ次ぎに選手を胴上げにした。母校の勝利を欣ぶ無邪氣な學生は、無論庭球部の大將たる正夫を胴上げにして、大なる喝采を浴びせた。正夫は何時にもない、淋びしい笑顔をして之に應じた。

光榮ある庭球コートに、今、秋の日は落ちかゝつて居る。その夕日の中に三百に近い學生は光榮ある勝利に酔うて躍り

敵の葬式

到頭春になつた。佛蘭西風の古城の庭園には薔薇の花が咲いて、鶯が鳴き出した。森からは啄木鳥の聲が聞え出した。野には一面に罌子粟が眞赤な花を附けた。夫が塹壕のつい近く迄、咲き續いて居る。麥の脊が緑にグン／＼延びて行つた。

陰惨な冬の塹壕生活の痛苦を沁々嘗めながら春の來るのを待ち侘びて居た兵士達は、一旦春が來たことなること、何んなに塹壕の中から廣闊な地面へ出たが事だらう。縦令塹壕を一步踏み出すと、其處には、彈丸の流れが必然の死を意味して居たにしろ、彼等は兎も角塹壕を出て、思ふさま新鮮な空氣を吸ひたかつた。冬の間、無味なじめ／＼した生活から唐げられ、腐らされて居た彼等の生命は、跳躍と自由を望んで、ムズ／＼して居た。塹壕を離れる事が、許されるのなら鐵火の中を、突進しやうと云ふ心が、將卒に共通した希望であつた。

かうした將卒の心持は、攻撃を敢行するには絶好な機會であつた。英軍の總司令部では、靜に總攻撃の畫策を廻らして

殊に敵味方とも、塹壕の中に深く閉ざされて、一彈も交へぬ頃などは、空中に於ける飛行機の格闘が、大戦の唯一の象徴であつた。

敵の飛行機が、味方の飛行機に射落されて、遙かな虚空から、石を落すやうに眞一文字に墜落する時などは、塹壕の味方の兵士は、半身を地上に晒しながら、拍手喝采した。

が、英軍の飛行機は、さもすれば、獨のフォツカアに惱まされた。フォツカアは、一和蘭人に依つて、發明された新しいタイプの飛行機で、獨軍の戦闘機として、今年の初から、その不氣味な姿を戦線に現はした。夫は常に八千呎以上の高空を遊弋して居た。そして鴉鳥が地上の獲物を狙ふやうに、遙かの低空を飛行する英機の姿を物色した。敵の姿が眼に入ると、フォツカアは一揺り揺つて機首を逆さまにするや否や敵機を目がけて、眞一文字に落下するのであつた。フォツカアの機體は、急速の落下に適當するやうに作られてゐた。而も、急下しながら拳下りに切つて放す、機關銃の亂射の正確さが、英佛軍の飛行機に取つて、大なる權威であつた。

英のF E型や、佛のソツピイズやスパットは、フォツカアの一騎打に、兎もすれば無残に破られた。

殊にフォツカアを操縦して、ソムの空中を、縦横に活躍する獨のイムメルマン大尉の驍名は、英軍飛行家をして殆ど顔色なからしめた。

居た。

春が進むに連れて、英軍戦線の後方の道路は、人間と馬と大砲との輸送で益々雑沓した。數哩の間、運輸自動車の間斷なく續いた。帶革や背囊の眞新しい新編成師團の兵士達が、ゾロ／＼と戦線へ急いだ。冬の間塹壕の中で寒さに顫へて居た印度人の師團が、他の戦線へ移されて、その後へ濠洲人の師團が交代した。彼等は見上ぐるばかりの身長と、強健な四肢を持つて居た。かうしてプウロンからソム迄、大攻勢前の活氣は勃々として動き始めた。

孰れの場合にも、戦機は先づ飛行機の活躍から始まつた。薄緑に晴れた大空の遙か彼方に、瑞西境の高山の彫琢されたやうな鮮やかな山影が、春の透明な空氣の裡に、見えるやうになつた頃から、彼等の飛行機の活躍は、日毎に烈しくなつて來た。塹壕の兵士達が、土と土の間から、天の一角を見詰めて居ると、薄い白雲の間から、敵とも味方ともつかぬ機影が、幾つもの、生み出されるやうに姿を現はす事がよくあつた。

獨逸の公報は、續げざまに「イムメルマン大尉は、その幾番目の敵機を打落せり」と報告した。そしてその幾番目と云ふ数が、日毎に増して行つた。

「イムメルマンを倒す」と云ふ言葉は、もう三月の初から、英軍飛行隊の宿題であつた。夫が五月の初が來ても、解けずに残つて居た。イムメルマンが高空から逆落しの急襲を癖に兼ねて、射落された英機の数が、もう五十を起して居た。

ヌーヴ・シャベル戦線の後方二哩にある、英軍の第二格納庫に屬する飛行將校達は、イムメルマンの名を、幾度腹立たしげに發音したか分らなかつた。

「今日はイムメルマンの死骸に花輪を投げてやらう」と、云ひながら罌子粟の花を摘んで、小さい花輪を用意して出發した英軍の飛行家が、幾人もなく歸つて來なかつた。

イムメルマンは敵機の墜落を見済ますと、大きな波形を描いて地面近くの低空を飛んで、敵手の死を葬つた。そして、きまつて喪章の着いた小さい花輪を投ずるのであつた。

「イムメルマンの死骸に花輪を投げる」、夫は英軍飛行家に取つて、何れほご晴がましい事であるか判らなかつた。

ヌーヴ・シャベルの飛行隊では、最も優秀な技術を持つて居ると稱されて居るダアレム大尉は、五月のある朝出動を命ぜられると、彼はイソ／＼と乗り馴れた最新式のF E型を引き出した。

「さあ！ 今日こそはイムメルマンの最後の日だぞ」こ、快活に同僚達に挨拶するや否や、急角度の上昇をして、見る見る裡に機體を隠してしまつた。

が、何時になつてもダアレム大尉は歸つて來なかつた。夕日が平原の彼方に落ち、微かなそよ風が、麥の穂を撫てる夕暮が來ても、ダアレム大尉は歸つて來なかつた。ダアレム大尉は仲よしのハウスマン大尉は、格納庫附近の高山に立ちながら、友人の歸來を待つて居た。F E型に取つて、最極限の飛行時間である、五時間が夙くに経過しても、ダアレム大尉は歸つて來なかつた。

ハウスマン大尉は、日がさつぷり暮れてから兵舎へ歸つて來た。そして、

“Ah Dalem's lastday, ”云ひながら、悄然と木造の椅子に腰を下した。同僚達は一頻り深い哀愁に囚はれた。そして、人々は何時が來たら、イムメルマンの最後の日が來るだらうかと思つた。

が、ダアレム大尉は死んだのではなかつた。その日から二十日ばかり経つた頃に、瑞西にある俘虜情報局から、一通の書狀が、ハウスマン大尉の手に届いた。それは、俘虜としてマダデブルグに收容されて居る、ダアレム大尉からの通信であつた。彼はその一節に如何にしてイムメルマンの襲撃を受けたかを述べて居る。

殿に居たマツカビン少尉は、之等の格闘に間に合はなかつた。「フオツカアに備へる爲に、なるべく上空を飛べ」云ふ教訓に、餘りに忠實であつた彼は、八千呎の高度を保ちながら、味方と敵との烈しい戦ひを遙か低空に見て居た。そして、自分も戦鬪の渦中に翔け入らうと機首を下げやうとした時に、彼は、はしなくも、前方三千呎の上空に三隻のフオツカアが、翼を連ねて飛翔しながら、將にサヴェジ中尉を狙つて一文字に、翔け下らうとして居るのに、氣が附いた。

サヴェジ中尉も、既にその危機を悟つたらしく、急角度を以て大きい圓を描きながら、上昇に努めて居たが、先頭のフオツカアが近づくと、中尉は忽ち劇しい猛襲を加へた。敵機は見る間に、機首を下にして、クル／＼廻轉しながら、落下した。

この敵を、辛うじて片付けてしまふと間もなく、中尉は他の二機から、猛然と襲はれたのであつた。二機は翼を揃へながら、中尉の頭上から襲ひかゝつた。

フオツカアの特長は、急激なる下降に堪へる事と、その機關銃は急激に下降しながら、發射してもその正鵠を失はないやうに、ちやんと固定されて居る事だつた。隼のやうに、眞上から襲ひかゝるフオツカアは、英軍の飛行家に取つて、恐るべき苦手であつた。

サヴェジ中尉は、何うかして此の危難を、脱しようと思つた。

「到頭彼奴にやられちやつた。全く他愛もなくやられちやつた。僕が、氣が附くと、もう機關銃の弾丸の流れが、背後の上空から僕の機體を烈しく縫ふて流れた。振り向くと、後方僅か三百呎の上空に、フオツカアの悪魔のやうな機體を見た。しまつた！ と思つたが、もう遅かつた。機首を振向けて、攻撃的姿勢を執るなさは、及びも附かない事だつた。自分は、咄嗟の場合に機首をグット逆さまにして、降下する事に依つて、敵弾は避さうとしたが、操縦に一分の隙もないイムメルマンは、弾丸のやうに自分の機尾に迫つて來た。而も間斷なく機關銃の亂射を續けながら。ガソリンの油筒は、節のやうに射かぬれて居た。さ、僕の右の手に刺すやうな痛みを感じた。操縦舵に少しも力が、は入らなかつた。左の手で持ち換へやうとした時、左の手の拇指は他の一弾に依つて腕ぎ取られてしまつてゐた。もうさうする事も出來なかつた。油筒からは、刻々にガソリンが洩れて居る。速力を出して飛ばうものなら、直ぐ發火する事は、知れ切つた話だつた。

此方が、戦鬪力を失つてしまつたを見るに、イムメルマンは、直ぐ發砲をやめてしまつた。彼奴が、武士の情を知つて居る事は、我々の間に、知れ渡つて居る話だが、夫を自分は實見する機會を得た。彼は、僅かの間隔を隔て、地上迄隨いて來た。そして、自分と、同乗の、大尉とが、群がつて來た獨の歩兵の爲に、俘虜らしい侮辱を受けやうとして居るに、するらしく見えた。彼は、フオツカアの第一次の襲撃を避け、突如として、地上三千呎の低空まで、急激な急下降を試みた。

二隻のフオツカアも、夫に續いた。氣球から投下された石のやうに、眞直に而も確實な急降を以て夫に續いた。

マツカビン少尉は、何うかしてサヴェジ中尉の危急を救ひたいと思つた。が、その戦鬪區域に入る迄には、三千呎に近い垂直の降下を試みねばならなかつた。彼は機首を逆さまにして、サヴェジ中尉を追ふ二隻のフオツカアを、追つたのである。

二隻のフオツカアの機上に在る機關銃は、劇しい銃火を間斷なく吐いた。見るに、サヴェジ中尉の機體は、幾度も怪しく揺れて居る。マツカビンは、もう中尉の運命が定まつたのを感じた。さ、先頭に立つたフオツカアは、中尉の機の頭上を掠めたかと思ふと、ニツケル製の小さい投げ槍を、幾十本ともなく空中に閃かしながら投げ附けた。その一本が、明にサヴェジ中尉を、傷つけたに違ひなかつた。もう中尉は、スツカリ機の操縦を失つて居た。機關部は散々に打ち貫かれて居た。

機が左右に、力なく二三度揺れたかと思ふと、機首を逆さまに地上へ急いだ。

後で判つた事だが、サヴェジ中尉を倒したフオツカアの操

縦者は、外ならぬイムメルマン大尉であつた。驍名西部戦線を壓して居るイムメルマン大尉であつた。彼は今日も亦、垂直に落下しながら、機關銃の銃弾を以て、敵機を縫ふ云ふ放れ業をやつたのであつた。

が、這のイムメルマンも、敵を倒した昂奮に取紛れて、自分の背後に他の敵機が、間近く迫つて居た事に、全く氣が附かなかつた。

マツカビン少尉は、サヴェジ中尉を倒したフオツカアの背後に迫つて居た。彼は、フオツカアの機關銃が、前方の敵を打つやうに固定されて居る爲に、背後の敵を射撃する爲には、機體その物を廻轉せしめなければならぬ云ふ、フオツカアに固有な缺陷を心得て居た。彼は、此の缺陷を唯一の頼りとして、烈しく敵機に迫つて居たのであつた。

歐洲大戦の飛行戦史に於て、最も記念すべき時が、刻々に迫つて居た。もう、兩機の間隔は、二百呎も隔て、は居なかつた。マツカビン少尉の機に、同乗して居る偵察將校は、突如として機關銃の火蓋を切つた。イムメルマンは、明に狼狽した。彼は左に急廻轉を試みた。マツカビンも直ちに同じ方向に轉回して、再び敵機の背後に出た。イムメルマンは、機首を敵機に向けやうとして、幾度も狂的な圓舞を試みた。が、その度にマツカビンは巧妙な操縦に依つて、敵機の背後に出た。最初の不利な位置が、イムメルマンに飽く迄も、

た。

「おめてたう、ソムの英雄たるマツカビン少尉！」云つた。

マツカビンは、煙に捲かれたやうに、何と答へていゝか判らなかつた。すると、司令官の傍に居た副官は、

「君は到頭あの男をやつつけたのだ。なに、あの男云へばイムメルマンに定まつて居るぢやないか。」と、云ひながらマツカビンの肩を叩いた。

同僚の飛行家達は、悉く彼を取捲いて、喝采した。皆は恐ろしく昂奮して居た。彼は手の痛くなる迄彼等から握手を強ひられた。そして、自分の成し遂げた思ひがけなき奇蹟に、茫然となつて居た。

イムメルマンの死！ 夫は、英軍の飛行隊に取つて、何と云ふ大きい福音であつた。今迄、フオツカアの不氣味な機體から受けて居た壓迫が、今日こそは晴々取除かれたやうに思つた。夫は飛行將校の何人に取つても大なる歡びに相違なかつた。

一人が國歌を、口誦み始めるに、皆は一齊に之に和した。彼等は手を舉げ、足を踏み鳴らしながら、其處に大なる歡喜の渦巻を作つて居た。

誰もが、その親友の一人か二人かを、イムメルマンの爲に、失はしめられたと云ふ苦い恨みを持つて居た。そのイムメル

崇つた。英機の機關銃弾は、絶間なく空中の英雄を見舞つた。夫は三十秒にも足らぬ短い格闘であつた。イムメルマンは、最後の手段として急劇な急回轉を試みた。が、その途端に、一弾が彼の身邊の身體の急所を貫いたと見え、機は忽ち安定を失つて、二三回横轉したかと思ふと、石塊の如く垂直に地上に墜落するや否や、忽ち青い焰を吐いて、燃え上つた。

マツカビンは、初陣の功名に、揚々として低空を一週した。其處は、味方の陣地内であつた。落下した敵機の周囲には味方の兵士が蟻の如くに集まつて居るのが見えた。すると、忽ち地上から、大きい喝采が湧き上つた。夫は、プロペラの音にも紛れず、彼の耳に聞えて來た。兵士は、悉く手巾を出して、彼を見上げながら、打ち振つて居る。彼は全く得意であつた。二回ばかり、喝采に答へて、波狀飛行を試みるに、得得として、根據地に急いだ。が、彼は自分が何故に、地上の兵士達から之れ程迄の喝采を受けたかを、全く知らなかつたのである。イムメルマンを倒した事などは、彼の夢にも思ひ及ばなかつた所である。

が、彼が根據地に近づくと、彼の大なる勳功を、戦線からの電話で知悉して居た同僚の飛行家達は悉く營舎の中から走り出して來た。そして、最先に立つて居た司令官の少將は、彼が着陸するや否や、直ちに駆けよつて強い握手を彼に與へ

た。

「おめてたう、ソムの英雄たるマツカビン少尉！」云つた。

マツカビンは、煙に捲かれたやうに、何と答へていゝか判らなかつた。すると、司令官の傍に居た副官は、

「君は到頭あの男をやつつけたのだ。なに、あの男云へばイムメルマンに定まつて居るぢやないか。」と、云ひながらマツカビンの肩を叩いた。

同僚の飛行家達は、悉く彼を取捲いて、喝采した。皆は恐ろしく昂奮して居た。彼は手の痛くなる迄彼等から握手を強ひられた。そして、自分の成し遂げた思ひがけなき奇蹟に、茫然となつて居た。

イムメルマンの死！ 夫は、英軍の飛行隊に取つて、何と云ふ大きい福音であつた。今迄、フオツカアの不氣味な機體から受けて居た壓迫が、今日こそは晴々取除かれたやうに思つた。夫は飛行將校の何人に取つても大なる歡びに相違なかつた。

一人が國歌を、口誦み始めるに、皆は一齊に之に和した。彼等は手を舉げ、足を踏み鳴らしながら、其處に大なる歡喜の渦巻を作つて居た。

誰もが、その親友の一人か二人かを、イムメルマンの爲に、失はしめられたと云ふ苦い恨みを持つて居た。そのイムメル

周囲は急に静になつた。今迄の狂喜は急に聲を潜めた。彼等は餘りに、勝利の歡びに、浸り過ぎて居た。恐るべき敵としての、イムメルマンのみを考へ過ぎて居た。彼等は、軍司令官の此の武士的な寛活な提議を聽いて、強い敵愾心の變形としての歡喜が、急に褪めかゝつて行くのを感じた。

彼等は今、名飛行家としてのイムメルマン、敵ながらも天晴れの勇士としてのイムメルマン、且て捕へられたダアレム大尉が「彼は紳士なり」と、嘆稱したイムメルマンを考へ始めて居た。すると、勇士の死に對する悲壯な心持、名飛行家の死を惜しむ人間本然の敬虔な心持、さうしたものが、皆の心に段々滲じみ出て來るのであつた。その上、強敵を倒してしまつた云ふ安心が、彼等の心持に餘裕を與へ始めて居た。もうイムメルマンは死んで居るのであるから、彼に對してそんな寛容な心持にてもなれるやうであつた。

その上、敵の勇士の死を用ふ云ふ事が、人間として、そんなに美しい事であるか云ふことを、彼等は考へ附いた。獨軍が隨一の名飛行家として、誇つて居た彼を、物の見事に倒して、而もその遺骸を、軍葬として、禮を厚うして葬ることが、何んなに武士道的で紳士的であらうか皆は考へた。彼等は、急に敬虔な心持になつた。センチメンタルな、而もヘロイツクな心持になつて居た。司令官の少將は皆の心持を代表して居た。

柩は、廣場の正面に設けられた、祭壇に安置された。式は簡單で嚴肅であつた。

老牧師は、敬虔な聲を振りしぼつて、莊重な祈禱の聲を上げた。

飛行隊の人々は、任務に就いて居る者を除いて、悉く參列して居た。彼等は各自、敬虔な心持を懷いて居た。ソムの戦線を縦横に荒し廻つた敵は、もう微塵も戦闘力のない死體として、彼等の前にいたましく置かれて居る。もうフオツカアもない、機關銃の脅威もない、たゞ勇士の死云ふ嚴肅な事實があるばかりである。

軍樂隊は、莊嚴な「悲しみの曲」を、吹奏し始めた。二三の士官が、その曲に合はして、歌詞を口誦んだ。夫が段々聲高く擴がつて行く。彼等の心の裡の感情が、此曲にピッタリと合つた爲だらう。

夕日は、フランドルの丘陵の彼方に、眞紅の色を漂はしながら、落ちかゝつて居る。戦線の砲聲も、何時の間にか云ひ合はしたやうに、途絶えてしまつて居た。列席の將士の悲壯な心持を、掻き擾すものは、もう何もなかつた。彼等は凡ての怨恨を忘れ、凡ての敵愾心を地に擲ち、敵の勇士の爲に、嚴肅な軍葬を執行して居る。夫は、人間が相害ひ合ふ戰爭中に於て、最も輝いた美しい瞬間に相違なかつた。

勇士イムメルマンは、今敵の人々に十分に哀悼され、十分

「這は、軍司令官だ！ 何ぞ云ふ武士的な、人道的な考だらう。さうだ、本當だ。あの男は死んでしまつたのだから、もう決して我々の敵でない。祖國の爲に、生命を捧げた勇敢なる一個の軍人である。彼の死は、彼が我々との敵對關係を、永久に消滅せしめて居るのだ。我々は彼に、軍人として、勇士として十分な敬意を拂はねばならない。さうだ、諸君の有志者は、彼の死骸を收容の爲に、直ちに出張して呉れ給へ。」

飛行隊長の言葉は、感激に充ちたハラーと拍手に依つて、迎へられた。忽ちに、二臺の自動車が用意せられた。その中の一には、敵の勇士の爲に、白木の柩が用意されて居た。イムメルマンの遺骸の收められた柩は、間もなく彼が戦死の場所から自動車に運ばれて、飛行隊に到着した。柩の上には、野生の草花で作られた花輪が、幾つも飾られてあつた。

飛行隊の格納庫の直ぐ傍に、此村の教會堂があつた。彈丸の破片で、會堂の窓や天井は、無残に破壊されて居た。が、その會堂の年取つた坊さんは、戦争の慘禍の裡に、只一人止まつて居た。そのみすばらしい會堂の前の廣庭で、幾度飛行隊の勇士の軍葬が、營まれたか判らなかつた。その中の幾人かは、イムメルマンの手にかゝつて居たのである。イムメルマンの軍葬も、今その同じ場所で、行はれやうとするのであつた。

に敬意を表されて、華やかに、悲壯に葬られやうとして居るのであつた。

此時であつた。寂寞として將に夕暮の静けさに入らうとする大空の一角に、微かながら空氣をさよもす推進器の音が、聞え始めたのである。

推進器の響には、極度に敏感である飛行隊の人々は、各自に天の一角を凝視した。二三の人の手には双眼鏡さへあつた。

夫は、紛れもなく獨機の襲來であつた。恐らく獨の飛行家達は、彼等の明星たるイムメルマン大尉を倒されて、復讐の熱に燃えて居たのだらう。彼等は、決死の勢で英軍の飛行隊の根據地を襲つて來たのである。

ひよい／＼と虚空から生れるやうに、小さい機體が、彼等の双眼鏡に映つて來る。三隻！ 五隻！ 七隻と數は忽ちに増して、十二隻に及んだ。さ、今迄は氣が附かなかつたが、此の一隊よりも三千呎ばかりの高空に、同じく十二隻から成る他の一隊が、規則正しい縦陣を描いて、飛來して居る。大規模の襲撃である。廿四隻の敵機は、上空下空に別れて、襲來して居るのである。

その方向から云つても、此根據地を襲撃しようとする意志が、明に見えて來る。

今迄、イムメルマンの軍葬の喪主として、嚴肅なる姿勢を

保つて居た飛行隊長の顔には、大なる動搖が現はれた。老牧師は、今丁度最後の祈禱を擧げて居る。敵襲は云ひながら、嚴肅なるべき儀式を中斷する事は、軍葬と云ふ名義から云つて、可なり心苦しい不面目に相違なかつた。が、さうした心持の爲に、敵機の跳梁を擅にせしむべきでは、元よりない。隊長は、手を擧げて第一大隊長を麾くこ、即刻出動すべきを命じた。

今迄、式場に列して居た飛行將校の中から、第一大隊に屬する將校が、四十名近く、バラ／＼と列を離れて、格納庫へこ急いだ。

後には、尙五十名ばかりの人々が、残つて居た。が、もう彼等の心持は、スツカリ掻き擾されてしまつて居た。もう、三分前の心持は、似ても似つかぬ焦々とした心持であつた。嚴肅な、悲壯な、武士的な、敬虔な心持は、心の底からムズムズと湧いて來る敵愾心の爲に、見る間に侵略されて行つた。

式は、軍樂隊の最後の吹奏に依つて、終らうとして居たが、もうその悲しみの曲譜に和するものは、一人もない。彼等の心には、殺伐な荒々しい感情が、旺然と湧き始めて居る。彼等の心持は、少しもそぐはない奏樂が、彼等の心を焦立たせた。

味方の飛行機の出發する推進器の音が、彼等の心持を益々掻き擾した。葬式に列して居るやうな心持は、少しも残つて

取られて、奏樂の手を止めた。

將校達は、何時の間にか、イムメルマンの柩に背を向けて、空中に於ける敵味方の、烈しい格闘を見ながら足を踏み鳴して、國歌を合唱した。

其處に凡ての虚飾はなかつた。たゞ戦ひがあつた。凡ての虚飾を許さない恐ろしい戦があつた。彼等の心には、夫に適はしい生一本な敵愾心のみがあつた。烈しい憎惡のみがあつた。浮ついた裝飾の感情は、もう微塵も残つて居なかつた。敵に對する正當な、露骨な、本當の感情のみがあつた。

が、司令官の少將は、軍隊の名に依つて行はれた軍葬が、中斷することが、心苦しうあつたのだらう。熱狂した人々に聲をかけた。

「諸君！ 我々はイムメルマン大尉を、敵の勇士として、彼の墓穴へ送るのを忘れてはならない。」追に隊長の命令は行はれた。十人に近い將校は、イムメルマンの柩を擔ぎ上げた。

空中の戦は、今酣である。敵も味方も、縦横に飛び違つて、機關銃の砲火を、炎の如く吐いて居る。再度の命令に依つて、残つた將校の一部は援軍として、出發せうとして居る。

イムメルマンの柩は、今墓穴へ送られつゝある。夫を擔いで居る將校達は、揚々として夫を高く差上げながら歩いた。夫は既に敵の勇士の遺骸としてではなかつた。今日の光榮ある勝利を飾る、分捕物としてであつた。

居なかつた。

が、軍葬と云ふ名義の手前彼等は荒み切つた感情をちつこ抑へて、尙その席に止ることに努力した。

一分！ 二分！ 忽ちラットタットタットと云ふ烈しい機關銃の音が聞えて來るこ、もう義理にも、平靜な態度を裝ふ事が出来なかつた。敵に對する憎しみ、敵機に對する憎惡敵愾心が旺然として、彼等の心胸に溢れた。

するこ、今迄は彼等の憎しみや敵愾心から、免れて哀悼の的にさへなつたイムメルマンの柩迄が、再び彼等の心の裡に峻しい感情を、呼び起し始めた。

夫はもう、名飛行家の遺骸ではなかつた。天晴な敵の勇士の遺骸でもなかつた。味方の勇士を、幾十人もなく屠つた、憎むべき敵、惡魔の如き敵の厭ふべき死骸に相違なかつた。

飛行將校達の柩を見る目には、明に憎惡が爛々燃え始めた。もう「悲しみの曲」を聽いて居る餘裕は、彼等になかつた。夫に、焦立たされた一人の將校は、靴で荒々しく床を蹴つた。その心持は、皆に共通して居るものであつた。

こ、敵機に傷つけられたのであらう、味方の一機がクルクルと木の葉の如く舞ひながら、空間を落下するのが見えた。隊中第一の熱血兒と云はれて居るジョーンズ大尉は、もう堪らないと云つたやうに、大きい聲を出して國歌を歌ふ、こ云ふより叫び出した。突如皆は之に和した。軍樂隊は呆氣に

群衆

此話は、露西亞の革命に附隨した挿話の中の一つである。西比利亞の中央、イルチツシコ河に添うたトボリスクの街では、露曆三月三日の夕方に町の中央に在る聖救世主寺の鐘が、思ひ出したやうに烈しく、夕霧の裡に鳴り響いた。

戦争の初期には、戦線からの重要な報知を知らせる爲によく此鐘が急調に打ち鳴らされたものだが、此の一年ばかりは全く打ち絶えて居た。鐘の番人も町民も同じやうに戦争に飽いて居たからである。所が今日は前例もない程に、急調に鳴つて居る。小さい街の隅々に迄鳴り餘つた鐘の音は街を圍んで蒼茫と擴がる廣野へ迄も流れて居る。久し振りの鐘の音に町民は各自に仕事を捨て、戸外へ出た。人々は口々に「奥國が降伏したのだ」「さか」「ワルソウを恢復したのだ」「さか」「單獨講話が成立したのだ」「さか色々々に此の鐘の音を説明しようとした。が夫等の推測は皆違つて居た。さ見るさ、街の一端から赤い一旛の旗を附けた自動車群衆の間を縫ひながら徐々に進んで来た。青いルバーシカを着た青年が車中に突立つて小さい電報紙片を大聲で讀み上げると、群衆の間から「革命

るものがあるまい。が、彼等は生來初めて得た完全の自由と權力との意識を、何等かの方法で少しも強めたいのであつた。其爲には昨日迄の權利者に亂暴をするのが一番である。群衆は口々に「專制の狼」ださか「ロマノフ家の犬」なぞ、絶叫しながらグレイボウ氏の家に礮を投げ附けた。彼等はグレイボウ氏を憎まない迄も、昨日迄の官權に自由に亂暴が出来るのが、嬉しくつて堪らなかつたのである。

が、グレイボウ氏の家の表へ向いて居る窓の硝子が、殆ど破壊し盡された時に群衆は急に引き上げ始めた。夫はアルベルスキイ町の、ある酒屋の酒藏が開かれて火酒が飲めるさ云ふ噂が聞えて来たからである。開戦以來禁酒令に依つて禁ぜられた火酒の匂は、如何なる露西亞人をも支配する力があつた。彼等は「自由」に酔ふ前に先づ火酒に酔ひたかつたのである。

其翌日も、その翌日も町民は幸福であつた。彼等は革命と共に、地上に極樂が落ちて来るやうに思つて居た。が四五日経つと夫が、全くの空想であつたのが判つた。パンが一フントに就き急に五コベツク高くなつた。砂糖が三コベツクばかり高くなつた。其上に郵便が恐ろしく遅着した。郵便脚夫も革命の祝賀で騒いで居るからである。が夫よりも一番困つたのは、盜難が頻々として起る事である。實際泥棒は共和政體でも專制政治でも痛痒を感じないさ見えて盛んに活動した。

萬歳！「自由萬歳！」の聲が、風のやうに湧き上つた。トボリスクの街が革命の報知を歡呼を以て迎へたのも無理はない。此街は古くから革命黨の流謫地で、刑期があけて土着した者が、町民の三分の一を占めて居る。

革命成功の報知が確實ださ云ふ事が判るに連れて町は蘇つたやうに生々とした。見る／＼内に街路には幾つもの行列が組まれて、町で一番目貫きのアベルスキイの通からはウラーの聲が絶間なく揚つた。革命の爲に生涯を西比利亞の荒地に埋められて居た流謫の人達は、此の報知を聞くさ欣びの餘に半狂亂のやうになつた。是等の人々は完全に贏えた自由に陶酔してしまつて、足もしごるに行列の先に立ちて無暗に嗚鳴り散らし、わめき散した。

斯うなるさ一番惨めなのはトボリスク政廳の役人達であつた。中でも群衆が一番に襲來したのは知事のグレイボウ氏の邸宅である。元來此の人は西比利亞に居る知事の中では、よく物の判つた温厚な老人であつて町民の氣受けも良かったのである。恐らく群衆の中の一人でもグレイボウ氏を留めて居

夫に今迄の警察は群衆に依つて解散させられてしまひ、其代りに民兵さ云ふのが組織されて居るが、此連中は町の治安を計る代りに、町の酒屋を飲み歩いて居たものだ。其上悪い事には町の混亂を見て取つた西比利亞を迂路つて強盜の一團が、トボリスクの近傍の密林の中に天幕を張つて毎夜のやうに、町中を襲ひ始めた事である。

醫師のズドラスチエンコ氏の一家八人が襲殺せられたのも、此強盜團の爲であつた。一體ズドラスチエンコ氏はトボリスク公立病院の外科主任で、戦争が始まるさ直ぐアコヰイナ方面の戦線に勤務して居たのだが、去年の秋から病疾の盲腸周圍炎が再發したので、故郷へ歸つて療養をして居たが、此頃には全く快癒したので、再び戦線へ出發しようとして居たのであつた。

ズドラスチエンコ氏は、二十を頭に不思議に女の子ばかりの六人の子供に取巻かれて、呑氣に病後の幾日かを暮して居た時に、舊政府から出征命令を受け取つた。夫と同時に醫療材料の購入費として五千留交附の達示があつた。是は、一片の達示書に過ぎなかつたが、町では五千留の正金がズ氏の懐に、は入つたやうな噂が立つて居た。

革命があつてから一週間目の晩に、二十名ばかりの強盜がズ氏の邸宅を襲つたのである。ズ氏は下婢のけた、ましい悲鳴を聞くさ寢衣のまゝて枕元の拳銃を取つて部屋を出た。す

る。銃を擬したまゝ待ち構へて居た三人の賊が咫尺の間から一度に發砲した。ズ氏は物も云はずによろめいて壁に凭れる。其儘ズル／＼と倒れてしまった。

夫からの模様は茲でも餘り書きたくない。強盗の中でサムソンのやうに強い禿頭の男が、二尺ばかりの針金を以てズ氏の娘達を片端から絞め殺して行つた。おしまひの番に當つたズ氏夫人は、絞める手数さへ入らなかつた。末の子のニーナの殺されるのを見た時に昏倒した夫人は、もう冷めたかゝり成りかゝつて居た。

盜賊は夫から根氣よく屋探しをし始めた。ズ氏夫人の指輪を初とし少しは金目の物も出たが、當にして來た五千留ばかりは何うしても見當らなかつた。最後に首領の男は手下の一人の持つて來た書付を、手に付るこ「チエツ」を舌打をしたまゝ、ズタ／＼に破つてしまつた。

ズ氏一家の災害を聞いたトボリスクの人達は、革命の陶醉から醒めて心から其の不幸を悲しんだ。大方の町民は大抵、人のよいズ氏の親切な治療を受けて居たからである。

翌日開かれた町會は全會一致で、ズ氏一家を町葬にする事を可決した。

町葬の日に當られた三月十三日が來た。停車場前の廣場に集つた群衆は嚴肅で眞面目であつた。革命の行列で騒ぎ廻つた亂暴な人達は血眼になつて強盗の殘忍を憤つて居た。民兵

である。そして腕の鈍いセザノフは、早くも停車場で、ある夫人の手提を拘り損つて聲を立てられたので、群衆の中へ紛れ込まうとしたのである。セザノフの肚では縦令捕まつても、二三ヶ月で監獄から出られると思つて居たらしいが、夫は群衆心理を知らないセザノフの獨斷に過ぎなかつた。

今茲に集つて居る群衆は、強盜、殺人、竊盜など、云ふ不正に極度の義憤を感じてゐる。而も不正の犠牲になつた八個の柩を前にして其の義憤は狂熱に達して居る。罪せられざる不正の爲に焦せりに焦つて居る。

「盜賊だ！」と云ふ聲を聞いて、群衆は夢中になつた。今迄壓せられて居た義憤が油然として排け口を見出したからである。セザノフは百年目であつた。撲ぐられる、蹴られる、踏まれる、眼が飛び出してグタリこなつた後にも群衆は尙放さずに撲り續けた。息子の危急を初は遠くから傍觀して居た老セザノフも到頭堪らなくなつて、死物狂になつて群衆を制止しようとした。がそんな事は此地方の格言で云へば「鼠が熊を襲ふ」のこ、同じ事だつた。同類を見て取つた群衆は、忽ち新しい犠牲者を取り捲いた。見る／＼老人の禿頭が拳の渦巻の間に隠見したかと思ふと、其顔は妙に充血して鼻から夥しい出血があつた。群衆は息の通はない死骸をまだ蹴つて居る。

「此奴等はズドラスチエニコを殺した強盜の仲間だ。」と誰か

團の連中は直ちに強盜狩をやるべき事を群衆に聲言して居る。女達の中にはハンカチを出して時々涙を拭つて居るものさへある。

コサツク兵の喇叭の哀音が群衆の頭上に流れたかと思ふと、黒布の附いた八ツの柩が馬車に載せられて式場に到着した。柩は後になる程段々小さくなつた。黒いリボンを附けた花輪を群衆は各自に柩を目當に投げた。中でも女達は一番小さいニーナの柩に一番多く投げ與へたのである。

式場に八ツ柩が靜に横はつた時には、群衆は死んだやうに靜であつた。只婦人連のヒステリックな泣き聲が、二三ヶ所で此靜肅を破つて居た。所が、金の十字を胸に吊した正教の坊さんが、十字を切つて式を始めやうとする途端に、停車場に近い群衆の間にけた、ましい騒ぎが起つたのである。

夫は拘摸のセザノフが捕つた爲である。革命の成功に最も無關心なセザノフは、此頃でも舊政府時代同様に拘摸を商賣にして居る。此男が革命に感謝して居る點は、革命の爲に群衆がよく夢中に熱狂するので仕事は甚だ仕易いからであつた。此男の父の老セザノフも鑄掛を商賣にはして居るもの、よく金物を盗んで來たり、頼まれたサモワルの壊れを繕ふ代りに、又直ぐ壊れるやうに目に付かないやうな傷を附けたりするやうな悪い事をやつて來た。今日も親子は揃つて町葬を見に來たと云ふよりも混雜を見越して仕事をしに來たのが云つた。此説明は頗る群衆を満足させた。町葬の場て響が取れた事を群衆は奇蹟のやうに語り合つた。

するこ此騒動がまだ元の靜肅に歸らない内に一人の青年が、乗り捨てた馬車の馭者臺に突つ立ち上つた。右の拳を昂然と高く振り廻しながら、

「諸君！ 自由と平等を享受する新露西亞の諸君！」と叫んだ。群衆は何事も判らずにワツと喝采した。

「諸君は、自由と正義を標榜しながら、僅かな犯罪、單なる竊盜罪の爲に尊むべき人命を奪ふことを果して正當なりと思惟するか、而も罪もなき其父迄を……」群衆は茲迄聞くこ、クワツこなつた。如何なる場合にも群衆は自分達多數の方を正當なりと心得て居る。

「彼奴も盜棒の味方だ！」と一人が叫んだのが、此青年に對する死刑の宣告であつた。此男も拘摸のセザノフと寸分違はぬやうに撲り殺された。コサツクは此三つの死骸に綱を附けて引張つて行つた。正義を叫んだ青年は泥棒と一緒にされた。丁度キリストが泥棒と一緒に磔にかつたやうに。

するこ又一人の青年が、前と同じ馬車の馭車臺に上つて、

「諸君！ 自由の第一義は言論の尊重にある、正義を叫んで居る青年が何故に豚の如く虐殺されるのか。」と、叫んだ。青年の聲は頸を帯びて居るが目は爛々として燃えて居た。が矢

張り群衆は自分達多數の方を正當だと心得て居た。スワゴ云ふ間に人々は、此第四の犠牲に飛びかゝつた。が、青年は幸にもコサクの爲に半死半生の體で辛く救ひ出された。話は是丈である。茲に集つて居る群衆も決して悪い群衆ではない。不正に對し義憤を感じ、其犠牲に涙を注ぐ人達である。が夫等の人達によつて、耿々たる正義の言葉を吐いた勇ましい青年が、何うして豚のやうに殺され又は殺されかゝつたか。人は獨りて居る時最も賢い。群衆すればするほど、本當の理智を失つてしまふのだ。

勳章を貰ふ話

春が來た。歐洲大戰第二年目の春が來た。凡ての物を破壊し、多くの人類を殺傷して居る、戦争も、春が蘇つて來るの丈は、何うする事も出来なかつた。

戦争の荒し壊す力よりも、もつと大きい力が、砲弾に碎かれた塹壕の、ベトンごベトンごの割目から、緑の若草となつて萌え始めた。砲弾に頂を削りさらされた樺の樹にも、下枝一杯に、水々しい若芽が、芽ぐんで來た。

冬の間、塹壕の戦士達の退屈な心を、腐らせた陰鬱な空の色が、目に／＼快活な薄緑の色に變つて行つた。

戦線に近いブルコウに在る野戦病院の患者達も、銘々蘇つて來た春を、心の裡から貪り味はつた。彼等が、戦場に於ける陰鬱な苦しい過去を考へるこ、硝子窓を透して、病室の裡に漂うて居る平和な春の光が、何物よりも貴く思はれるのであつた。

ワルサウから、コヴノ要塞にかけての戦場で、勇名を轟か

した見習士官イワノウキツチの負傷も、もう全く癒えて居た。

彼は、露曆三月十三日の朝、何時もよりも早く目を覺した。長閑な春の朝であつた。病院の廊下に釣るされた籠の中の駒鳥は、朝早くから、鳴きしきつて、負傷兵達の夢を破つて居た。イワノウキツチは、寢臺の上に、置き直るこ、両手を思ひ切り擴げて、大きい伸をしようとした。が、右の手丈は、彼の神經の命する通に動いたが、左の方には、彼の神經中樞の命令を奉ずる、何物も残つて居なかつた。彼は苦笑した。彼にはまだ、左の手が存在するやうな感覺丈が残つて居た。そして其の感覺の爲に度々欺かれた。が、此の朝丈は自分が不具に成つたさ云ふ悔恨は、少しも残つて居なかつた。

彼は、二三日前總司令部から、此日ニコラス太公が戦線からの歸途此病院を訪うて、サン・ジョルジエ十字勳章を彼に與へるこ云ふ通知を受けて居た。その勳章には三百ルーブルの年金が附いて居た。彼は此名譽と年金を以て、元の大學生生活に、還らうと思つて居た。そして靜かな、煩はされな

い生活を樂しまふと思つて居た。

サン・ジョルジュ十字勳章に、彼は十分に相當して居た。「勇士イワノウキツチの五つの英雄的行動」を云つたやうな話は、戰場美談として、廣く流布されて居た。此病院に來る特志看護婦や、色々な團體の慰問使は、有名な勇士イワノウキツチに握手を求め事を忘れなかつた。

イワノウキツチは、今朝、何の蟠りもない晴々とした心持であつた。彼は廊下に釣るされた籠の中の、駒鳥の快い啼聲を寢臺の上で聞きながら、太公が彼に勳章を呉れる晴がましい情景を想像して見た。

イワノウキツチは、全く得意であつた。彼は暢やかな心持で寢臺から下りるに、眞新しい軍服に着換へた。彼は久し振りに、軍服を着たのであつた。左の腕がない爲に、服の袖が、ダラリとして居るのが淋しかつた。が、夫は、彼の、のう／＼とした心持を曇らすには、足りなかつた。彼は、病院の廊下を、大股でゆつくりと歩き始めた。硝子戸越に見える芝生には、朝の陽光が一杯に溢れて居た。彼はこの時、ふと自分の所屬聯隊の、副官のダシコウが、自分に勳章を呉れると、云ひ出した事を思ひ出した。が、本當は、ダシコウが呉れたのではない、彼が自分の勳功で堂々貰ふのである。が、イワノウキツチは、心の裡で「俺に勳章を呉れたのは、矢張副官のダシコウだ」と思つた。何うしてダシコウが、彼に勳章を

與へたか、夫は、斯んな話がある。

二

大學生から、從軍を志願して、見習士官に採用されたイワノウキツチがワルサウに到着したのは千九百十五年の夏の始めであつた。

もう、その頃は、ワルサウを去る五十哩位の所で、露獨の重砲が、凄じい格闘を續けて居た。ワルサウの街の、大きい建物の、硝子窓が砲彈の響で、氣味悪く顛へる事なごよくあつた。がワルサウの市街は、何んまであつたらう！ イワノウキツチは最初ワルサウを、煤煙さ、埃ま軍隊の街だと思つて居た。所が、停車場から市中へ足を踏み入れると華やかな初夏の景情を備へた街々が、一歩々々眼前に、展開されて行くのであつた。輕やかな夏の新裝を身に着けた、貴婦人達の群がアレジュ・ウジヤッドウスキの大道を、幾つも流れて行つた。彼等は皆鮮やかな色彩のバラソルを翳して居たので、強い太陽の光を浴びた街は、萬目鏡を覗いたやうな、絢爛な光景を呈して居たのであつた。

戦争は、何處に在るのだらうと、イワノウキツチは思つた。行路樹の蔭の野天のカフェにも、客が一杯に溢れて、アイスコヒイなごを飲んで居た。イワノウキツチを、駭かした事は、まだ澤山在つた。凡て

の劇場も、活動寫眞も興行を續けて居た。殊に喜歌劇をやる小劇場には士官や兵卒が群集して、若い歌手の女達に喝采を浴びせて居るのであつた。

たゞ唯一の戦争の印としては、波蘭王スタニスラスの古王宮たるヴェキラノウ宮殿の上に、一旒の赤十字旗が初夏の風に、翻つて居るばかりであつた。

イワノウキツチは、愈々出征を決まつた時、心の裡で、凡ての歡樂に、別辭を告げて居た。其上、愛國的の興奮から、從軍を志願した丈あつて、最初は獨軍の砲聲を聞きながら、下らない、歌劇なごに現を抜かして居る士官や兵卒に、可なり大きい反感を持たずには、居られなかつた。が、イワノウキツチは、若い青年であつた。殊に彼の血には歡樂に脆い南露西亞人の血が流れて居た。

イワノウキツチが、編入されたワルサウ守備の聯隊が、駐屯して居たラジエンキ王宮の近所にはバガテラと云ふ、有名な遊園地があつた。其處には、喜歌劇や活動の小屋が、幾つもの／＼並んで居た。聯隊の士官達は、毎晩九時頃から、晝間の練兵の疲れを、全く忘れたかのやうに、銘々緑色の新しい軍服に着換へて、髻を丁寧に入して、小劇場の棧敷に顔を並べて居た。彼等は銘々花束や花輪を用意して氣に入つた歌手の女に贈るのであつた。イワノウキツチも、斯うした歡樂に直ぐ馴れてしまつた。

イワノウキツチの注意を、最初に惹いた女は、リザベッタ・キリローナと云ふ歌手であつた。彼女は一座のスターではなかつた。が、その娘らしい表情と濕ひある肉體とは、容易にイワノウキツチの心に喰ひ入つてしまつた。彼女の丸い顔立ちと稍や黄味のかつた眸とは、彼女の波蘭土人であることを明に説明して居た。彼女は、日陰に咲く淋しい草花のやうに、自分の周圍に、淋しい陰影を持つて居た。稍や感傷的なイワノウキツチは、彼女のかうした淋しさに却て、心を惹かれるのであつた。

彼は、毎夜必ずリザベッタの出演する白鳥座の棧敷に、身を置いた。そして、彼女が餘り目立たぬ役を演じ終ると、決まつて花束を贈つたのであつた。

イワノウキツチが、その女を獲るのは、ほんの僅かな努力であつた。二十日も経たぬ頃には、彼は彼女と一緒に、ワルサウの街の夜更に、馬車を走らせて居る自分を見出したのである。が、イワノウキツチは自分の戀に怖しい競争者のある事に直ぐ氣が附いたのである。幕が降りてから歌手たちが銘贈られた花束を手にして、再び舞臺に現はれる時、リザベッタは、必ず二つの花束を持つて居た。一つはイワノウキツチが贈つたものであつたが、他の一つは何人に依つて贈られたのか分らなかつた。人氣の立たない、淋しいリザベッタは二つ以上の花束を持つて居る事は、甚だ稀であつたが、二つ

を缺いた事はなかつた。イワノウキツチは、花束の代りに上等な花輪を贈つて見た。すると、リザベッタは又二つの花輪を以て舞臺に現はれた。イワノウキツチが大きい花輪を贈るに隠れた敵手は、又直ぐ大きい花輪をリザベッタに贈つて、その挑戦に應ずるのであつた。

イワノウキツチは、相手の名をリザベッタに訊くま彼女に、微笑を洩しながら、何とも答へなかつた。

が、間もなくイワノウキツチの敵手を探ぐる眸に映じたのは、何時も此小屋でよく顔を合はす同じ聯隊の一等大尉のダシコウの姿であつた。ダシコウは聯隊副官を務めて居る大きい團體の男であつた。この男は毎晩必ず一人で、棧敷に顔を見せて居た。そして屹度、花束を一つ又は、用意して居るのであつた。

イワノウキツチは、本能的に此男を、自分の競争者だと思つて居た。イワノウキツチの感じは、彼を全く欺かなかつた。ある晩、彼は馬車を雇うて、リザベッタが樂屋から出るのを迎へて居た。

彼は、華やかな戀の欣びを、感じながら、小柄なりザベッタを、抱へるやうにして、馬車に乗せて馭車に合圖の手振をした。その時であつた。彼は樂屋口の閉場時の、混亂した群衆の中に、聯隊副官のダシコウ大尉の蒼白な頬を、燃ゆるやうな二つの眸を見出したのである。イワノウキツチは怖る

營舎の内部が酷い熱氣に蒸されて、大きい暖爐のやうになつて居た。そして、ワルサウ名物の蠅が、天井にも、床にも、壁にも、一杯に止まつて、夫が不斷に動いて、壁や天井其物迄が動いて居るやうに見えた。

が、夜になるころラジエンキ宮殿の泉水には冷たい微風が吹き起つた。月の光がワルサウの街を、青い湖水の水底にあるやうに思はせた。その中を霧が烟のやうに絶えず上つて、霧の晴間には、月の光にぬれた樹木の青葉が、きら／＼と輝いて居るのが見えた。そんな宵、彼は必ずリザベッタの家を訪うた。

彼女は、バガテラから餘り遠くない、ブラウスキ街十二番地に在る家に住んで居た。彼女は大きい建物の三階にある部屋を三つばかり占めて居て、ローナーと云ふ年寄の婦人と慎しく住んで居た。彼女は劇場に出る前の短い時間を、欣んでイワノウキツチを歡待した。

彼がリザベッタの室に居る時、折々老婆がダシコウの來た事を告げに来る事があつた。が、そんな時リザベッタは、一寸イワノウキツチに氣兼ねしながら、

「病氣だご云つておくれ」ご謝絶した。さうした後などは、イワノウキツチは殊更に自分の勝利者たる境遇を、勝誇るやうな氣持がした。

さうかうする内に、七月は進んだ。ワルサウの左翼を、擁

しい物を見たやうに、顔を背けた。そして馭者に命じて、速力を増さしめた。

その次の朝、イワノウキツチは、ラジエンキ宮殿の廣場で不意に、ダシコウ大尉と逢つた。彼は妙な壓迫を感じて足を止めて擧手の禮をした。するとダシコウは、悪意のある微笑を湛へながら、近寄つてイワノウキツチの肩を軽く叩きながら、

「君は第一大隊の候補生だつたね。俺は聯隊副官のダシコウだ、いゝか！ 聯隊副官のダシコウだよ」ご云ひながら、更に皮肉な笑ひ方をした。

イワノウキツチは、此の男が戀の對手たる自分を階級之力を以て、壓迫しようとする悪意を、歴歴と感したのである。彼は反抗の心が、胸に溢れるのを感じた。するとダシコウは再びイワノウキツチの肩を叩きながら、

「又ゆつくり逢はう、白鳥座以外の處でネ」ご云ひながら、脅威的な悪意のある笑を残して去つた。

三

七月が、段々終りに近づいた。ワルサウの市街を照す日光は、日に／＼熱度を加へて來た。夫と同時にワルサウを半圓に取巻いて居る獨軍の戦線が時々刻々、縮まつて行つた。イワノウキツチには、毎晩夜の來るのが待たれた。晝間は、

護して居るルブリンの要塞が危険だご云ふ報道が傳つた。追に、その頃からワルサウの街には、負傷兵が充ち溢れた。負傷兵を載せた無蓋の馬車が、ワルサウの大通に續いて居た。その中でも、毒瓦斯にやられた病兵が殊に多かつた。彼等は紫が、つた顔色をして、頻りに咳をした。

獨逸のタウベ飛行機が、夏の空高く、黒い十字を描いた翼を閃しながら、ワルサウの街の上を、飛び廻る事があつた。が、ワルサウの貴婦人達はベラソルを傾しげながら、また平然と空を仰ぎ見た。夜は芝居も活動寫真も、不相變、興行を續けて居た。無論イワノウキツチとリザベッタの會合も續いて居たのであつた。

所が七月の終りに近づいた頃、イワノウキツチは、或日聯隊副官のダシコウから呼び付けられたのである。

彼は、その後もダシコウ大尉と二、三度逢つた事がある。その度に、此一等大尉は妙な苦笑ひを頬に浮べて居るのを常とした。

此日ダシコウ大尉は、イワノウキツチの顔を見るま、何時ものやうに、一寸苦笑ひをしたが、彼は直ぐ椅子に反り返りながら、

「見習士官イワノウキツチ」ご命令口調を以て、云ひ放つた「お前は、ブラウスキ街の十二番地を知つて居るだらう。いか、俺は今上官として、お前に命令を發するのだ。」

イワノウキツチは、斯う聞いた時、挑戦の手套を投げ付けられたやうに、きつこなつた。

ブラウスキ街の十二番地云ふのは、彼の新しい情人であるリザベッタの、住んで居る、建物の所在地に相違なかつた。

「俺はお前の上官だよ、いゝかイワノウキツチ！俺の云ふことは命令だよ、いゝか！注意をして聴きなさい。お前は、今後ブラウスキ街十二番地に、足踏みをしてはいけなないんだ。いゝか彼處にある、木造の階段を昇つてはならないんだよ、いゝか判つたか。」

此命令を聽いて居たイワノウキツチの顔は、赤く充血したと思ふ間もなく直ちに蒼白になつてしまつた。そして彼の唇が痙攣的に顫へ始めた。

「が、ダシコウ大尉はかう云つてしまふと、今迄の事が丸切り、冗談であつたかのやうに、笑ひ出してしまつた。彼は急に言葉を和げて、

「が、俺は、只では、命令はしないよ。此命令にはチャント賞罰が附いて居るのだ。イワノウキツチ君、お前はサン・ジョルジエ十字勳章を欲しくはないか、年金の附いた奴だよ。一年に三百ルーブルの年金の附いた奴だよ。俺は此聯隊の副官だ、いゝか、勳章の申請は、俺の思ふ通になるのだ。さうだイワノウキツチ君！安つばい歌劇の歌手よりも、十字勳

の紙片には、

「木曜日にワルサウ陥つべし。」と書いてあつた。何週の木曜日だか、正直な時日は分らなかつた。が、夫が、ワルサウの市街を、ほのかに運命付けたやうに見えた。ワルサウの市民は、此紙片を見て笑つた。が夫は、嘲笑でもなければ、苦笑でもない、一種妙な、皮肉な笑ひ方であつた。

波蘭人の多いワルサウの市民は、戦に就いて、こんな事を云つて居た。

「露兵が獨兵を、遠く驅逐して呉れ、ばい、ばい。そして彼等がワルサウから、遠く離れてくれ、ばい、ばい。」此の彼等の内には、獨兵も露兵も、一所に包まれて居たのである。

亡國の民として、露國の主權に服従して居た人々には、今度獨軍が、ワルサウを占領する云ふことは、借家人が、何時の間にか、自分の家が賣物に出て居るのを知ること、餘り變つた駭ではなかつた。

彼等は、タウベが、飛んで居る空の下で平氣で、アイスコヒーや、曹達水を飲んで居たのである。

ワルサウの衛戍隊であつたイワノウキツチの聯隊も、戰場へ送られる日を待つて居た。夜なごは三十哩離れて居ない戰場で敵、味方の照明弾が打上げられるのが明に見えた。

イワノウキツチには、急に色々な任務が、割當られ出した。夫が妙に夕暮から夜にかけての仕事が多かつた。

「章の方を選んだらそんなものだ。」かう云ひながら、ダシコウは、再び洪笑したのである。

が、若いイワノウキツチには、恐しい激動があつたばかりである。彼には、まだ正義の心が、何物にも紛らされなほざ、明に残つて居た。殊に、彼から情人リザベッタを、權力を手段とて、奪つて行かうとするダシコウの態度に對する憎悪が、旺盛と湧いて來るのを制する事が出来なかつた。

「何うだ、イワノウキツチ君！」

ダシコウは、返事を催促した。イワノウキツチは自分の激怒を放つべき、機會を得たやうに思つた。右の手が劍欄を探らうとする動き方をするのを、漸く制しながら、

「豚奴！」

と吐き付けるやうに云ふと、その儘屏を力まかせに開いて、外へ出た。ダシコウは彼の後姿を見ながら、

「夫ぢや罰の方が欲しいのだな。」と後から、捨臺白を投げた。

四

ルブリンが陥ちた云ふ報道が來た。獨の飛行機タウベが、ワルサウの上空を見舞ふ日が多くなつた。その内の一機が夏の日に、輝いて流れるヴイスツラ河の上空から、ワルサウの街の上を低く、飛翔しながら、多数の紙片を撒いた。そ

ダシコウの命令を、イワノウキツチは、無意識に守つて居る形であつた。リザベッタに逢はずに四五日が過ぎてしまつた。

八月の三日であつた。聯隊に、到頭出動命令が下つた。翌四日を以て、ワルサウを撤退し、野戦軍を合すべく、ツイラルドウ停車場方面の戦線へ、進出せよと云ふのであつた。

イワノウキツチは、初めて、砲火の洗禮を受けるべく、戦の大渦巻の中に入らねばならなかつた。

彼は、道にリザベッタの事が、忘れられなかつた。戰場へ出る事は、ある程度迄死を意味して居たのだから、彼は、リザベッタに、最後の名残を告げようと思つて居た。

撤退の準備として、ワルサウの工場は、もう大抵、火を掛けられて居た。夫と獨機の爆彈の爲に起つて居る火事とて、ワルサウの街は煌々明るかつた。イワノウキツチは、中隊長の眼を盗んで、秘かに、ラジェンキの營舎を抜け出したのである。

道では、折々避難者の馬車に逢つた。彼等は家財や道具を崩れ落つる程、馬車に積んで、停車場の方角へ急いで居た。

が、其晩もワルサウの市民の大部分は、まだ落着いて居た。芝居も活動小屋も興行を續けて居た。今ワルサウを占領して居る者も彼等には、他人であつた。二、三日後に、ワルサウを占領する者も亦、彼等には他人であつた。

其夜、リザベッタは、市街の混亂と騷擾を怖れて、出演しては居なかつた。彼女は極度に興奮して居た。夏の夜に適しい薄青い服を着て、ソファに倚りながら、不安な動搖に充ちた瞳を輝しながら市街に起る雑多な物音に脅えて居た。彼女は、イワノウキツチが扉を開けるを、直ぐ駈け寄りながら、

「ワルサウは、落ちるてせうか。」と深い憂慮に顔へながら訊ねた。

「勿論ですとも。」と、イワノウキツチは自分ながら、落着き過ぎると思ふほど、落着いて答へた。そして、

「之が我々の最後の晩です。」と附け加へた。が、リザベッタは淋しい微笑を洩したばかりで、直ぐ滅入つてしまつた。

「貴女は、何處かへ逃げないのか？ モスコウか、ペトログラードかへ。」と、イワノウキツチが彼女に對して、深い愛情を表しながら訊いた。

「モスコウ！ ペトログラード！ 私の故郷は、ワルサウの外には何處にもない。」と答へると、彼女は急に深い感傷的な興奮に囚はれながら、イワノウキツチの胸に、彼女の頭を埋めようとした。

その時である。此部屋の扉を、表から軽く叩く音が聞えた。彼女は、氣輕に、

「ローナかい。」と呼びかけた。彼女の召使の老婆は、其日の

452

占せうとする必死な競争の、敵對關係のみが存在して居た。ダシコウは自分の腕力を信じて居た。彼は突然イワノウキツチに躍りかかりながら、その首筋を掴んで、扉の方へ引きずつて行かうとした。怖しい格闘が起つた。力に於いて、劣つたイワノウキツチは、敵の爲に、カ一杯首筋を締め付けられながら、扉にグイ／＼と押へつけられた。ダシコウは、もう自分の完全な勝利を、信じて居た。

「何うだ！ 俺は自分の命令を、完全に遂行する力を持つて居るのだ、本當の力を持つて居るのだ。」彼はやゝ息を切しながら、斯う叫んだ。そして完全にイワノウキツチを、室外に、放逐する爲の最後の努力を、しようとして居た。その瞬間である、偶然自由を得たイワノウキツチの右の手は、自分の腰に釣した、拳銃の革袋を探つて居たのである。

丁度ダシコウが、イワノウキツチを室外に引ずり出した時、奇妙に押し潰されたやうな、拳銃の音が響いたかと思ふと大きいダシコウの身體がよろ／＼と室内に轉げ込んだ。ま、烈しい音をさせながら、其處に、平伏ばつてしまつた。そして直ぐ夫を追ふやうに、之も蹠跟したイワノウキツチの、蒼白な顔が現はれた。イワノウキツチは、暫くは、ダシコウのビク／＼する四肢を、見詰めたが茫然と立つて居た。ダシコウの上服に着いた血のにじみが、見る／＼内に大きく擴がつて行く。蒼白に變つて行く大尉の顔を見て居る

夕方から、外出して居たのであつた。

「いや、ダシコウだよ。」と、かう聲がすると思ふと、鍵の掛つて居なかつた扉は、烈しく押されて、驚駭したイワノウキツチがリザベッタとの眼前に、大尉ダシコウは、其長大な體軀を現したのである。夫を見たリザベッタは、軽い叫聲を擧げながら、蹠跟を後退してソファの上に、倒れてしまつたのである。

イワノウキツチとダシコウの二人は、其處に永久に融和しがたき敵として、睨み合ひながら突つ立つたのである。

「イワノウキツチ！ 俺は、今何も云はない。たゞ、命令する！ お前の兵營に歸れ！ お前の義務が、夫を要求するのだ、歸れ！」とダシコウは唇を顫はしながら呶鳴つた。

イワノウキツチの顔も、忿怒で、はち切れさうに見えた。彼の顔は、見る／＼蒼白に轉じかけた。が彼の心の裡の、此最後の一夜丈、女を競争者から確保しよう云ふ要求が、烈々として火のやうに燃え始めた。彼は、劍櫛を砕けよと、握りしめながら、

「貴君の義務も、矢張り夫を要求するのだ、お歸りなさい。」

「お前こそ」

「貴方こそ」

其處には、もう階級が存在しなかつた。只リザベッタとの、戰場に出づる前の最後の一文字通に最後の會合を、自分が獨

ご、深い悔恨が、段々イワノウキツチの心を蝕んで行つた。イワノウキツチは悔恨の外、何物もないやうな氣持になつて、軽い戦慄を覺え始めたのである。

ふと氣が付くと、リザベッタは先刻からの興奮に、痛められた神経が、最後の銃聲に依つて、止めを刺されたか見え、卒倒したまゝ、蒼白な顔を電氣の光に晒して居るのであつた。イワノウキツチの心には、悔恨の根が愈々深く這入つて行つた。彼は善良な學生であり、愛國的な熱情を湧して居た自分の近い過去が思ひ出された。而もその自分が、戦争に行く前夜に、上級の將校を殺したと云ふ事が彼には、もう恐しい罪惡として心の裡に、ひし／＼と感ぜられ始めて來た。

彼は、稍顫へて居る自分の右の手に、確りと拳銃を掴み直して、自分の咽喉へ擬したのである。

が考へて見ると、此處で命を捨てるのは可なりに、馬鹿らしい事であつた。もう獨軍の重砲弾が盛に、ワルサウの外廓を見舞うて居る。自分は、夜が明ければ、この鏖殺的な砲弾の洗禮を受くべく戰場へ向ふのである。拳銃よりも敵の巨砲の方が、自殺の兇器としては、何れ丈頼もしいものかも知れない。而も、自分で自分を殺す代りに、獨軍の砲弾なり銃劍なりで、死ぬる事は、たゞ、自殺と云ふ見方から云つても、形式を少しく變へると云ふに過ぎなかつた。

彼はかう思ふに、其處に自分の進むべき、濶然たる大道が、開けてあるやうに思はれた。彼は心を取り直した。戦ひなるかな、自分の罪を償ふ爲にも、最初の愛國的な、興奮に副ふ爲にも、たゞ戦があるばかりだと思つた。

彼は、さう決心するに、ソファに倒れて居るリザベッタの傍に近づいて、その冷たい、額に軽い、名残の接吻を與へた。彼女は、今明にダシコウ大尉のものではなかつた。得々とした、勝利の感情を以て、死體と同様なリザベッタを見詰めた。がら立つて居るに、妙な、悪魔的な心が彼の胸に湧いて來た。——如何にも、リザベッタはダシコウ大尉のものではなかつたが、果して彼女は、自分のものであらうか。ダシコウがリザベッタを、引き離されて、強制的に死の世界に送り込まれたやうに自分も強制的に、戰場へ送り込まれやうとして居るのだ。ダシコウの死骸が、リザベッタの所有者でないやうに、彼も、彼女の所有者ではなかつた。彼等が去れば、直ぐ獨軍の將校達がワルサウの歌妓達の歡待を受けるのだ。お前は、獨軍の將校達の手の内にお前の女を今手渡し、ようこそして居るのだ。お前が茲を去つたら、もうお前は、再び歸る事は無い。彼の女を、お前はこゝまゝ、残して置くつもりなのか。お前はダシコウから完全に防禦した獲物を、何うして確保しないのか。お前は彼女をお前の物にする方法を知らないのか。夫は彼女も、序々に茲で、殺してしまふのだ。否殺すの

ではない、あの女の卒倒して居る状態を、たゞ此儘に續けさせて置けばいいのだ。たゞ彼女を永久に覺めさせなければいいのだ。お前は、もう直ぐ死ぬのではないか。その前に、殺した人の数が、單數であるか、複數であるか、夫が如何なる相違を爲すのだ。リザベッタを完全に、お前の物にしてしまへ！ 夫は、リザベッタの卒倒の状態をたゞ何時までも續けて置きさへすればよいのだ。凡てが混亂だ。誰が殺したか、誰が殺されたか、判るものか。今此の街の、外廓では人間が幾萬もなく、殺されかけて居るのだ。

お前は、自分の可愛い女を、お前の後に残して置くのか。此女は、お前に許したやうに、ダシコウにも、許して居たのだ。誰にでも、直ぐ、自分を許す女は、ワルサウへ入る最初の獨軍の將校の持物になるだらう。この女は、獨軍がワルサウを占領してもやはり、アルトを歌つて居るのだ。そして、多くの獨軍の將校が、お前が投げたやうに、花輪を投げるのだ。此女を完全に、お前のものにするのは、たゞ今此の卒倒した、状態をその儘にして置くのだ。此女を再び、意識の世界へ歸さなければいゝのだ、たゞ夫丈だ。

彼の頭は嵐のやうに混亂した。彼は再び拳銃を持ち直して、リザベッタの傍へ寄つたのである。

五

彼が戶外へ出るに、外はもう宵よりも、混亂の度を加へて居た。その上時々、タウベが落す爆彈の炸烈する聲が、烈しい騷擾に更に恐怖と不安を加へた。

大きい、建物が市街の彼方、此方で、盛んに燃えて居た。その焰で赤くたゞれた空に、細かい尖塔や圓いドームが隱見した。

彼は、再び、深い悔恨に浸つて居た。何うしても、此世に身の置き所のないやうな深い、悔恨に浸つて居た。

八月五日の夜に、ワルサウは、陥ちた。イワノウキツチの屬して居た、第五十五師團の第二聯隊もワルサウを、撤退してダイスツラ河の右岸の戦線に就いたのであつた。

大きい混亂であつた。第一聯隊では、副官のダシコウが行方不明になつた事が、誰人の深い注意にも價しなかつた。聯隊長が、一寸首を傾げたまゝ、直ぐ後任を任命したのである。

イワノウキツチは、隊伍の内に加はりながら、大きい、良心の呵責を擔つて居た。彼は勇敢に戦ひ、自分の生命を、出來る丈、高價に賣る事を考へた。

彼の顔はその頃から、稍蒼白な色を帯び、狂犬のやうな眸をして居た。戦友は夫を臆病だに、解しようとしたが、彼は、夫に抗議を申込むでもなかつた。が、戦友の誤解は直ぐ解か

れた。彼の勇敢な、戦ひ振りは僚友の目を、駭かしたのである。戦ふ事に依つて凡てを忘れ、凡てを償はふに彼は思つたのである。

ワルサウからコヅノに、退却する迄に起つた露軍の奇蹟は、勇士イワノウキツチの五つの勳功である。

その頃の、ルスコエスロウ紙は、彼に就てこんな記事を掲げて居た。陸軍士官候補生イワノウキツチは、人間として現し得る極度の勇氣を發揮した。彼は五回斥候として、あらゆる危険を冒し、露軍の重砲が敵手に陥るを防ぎ、五人の負傷せる戦友を援け歸つた。彼は如何なる場合にも死を顧慮せず、否、殆ど死に向かつて突進せんとするが如き行動を現す事屢々なりき。而も、彼は、何等の微傷だに負はず、今も尚勇敢に戦ひつゝあるが、陸軍當局は、彼に對して、サン・ジョルジエ十字勳章を與ふべく進達したる由なり」と在つた。

此新聞の記事は、まだ、彼の勇戦を充分には、盡さなかつた。彼は卒先して凡ての危険を引受けた。味方の斥候隊が敵と味方との陣地の中央に倒れた時、彼は必ず、收容の爲に、身を挺して赴いた。殊に彼がラウカの戦線で、味方の負傷兵と重砲を救つた話は殆ど全軍に知れた話である。

が、彼は幾何奮戦しても、微傷さへも負はなかつた。彼は自殺の短銃を獨軍の砲弾にするつもりであつた。が、その砲

弾は、甚だ頼りのない兇器であつた。彼は、自ら死を追つた。が、死は容易に要求を、許さなかつたのである。

その内に、彼の死場所が、到頭得られたと思つた。獨軍に壓迫された露軍は、グイスツラの戦線を追はれ、彎曲した線を爲しながら、段々露國の内地に退却して行つた。コヅノ要塞にもう甘哩と云ふ地點に接近した時であつた。彼の大隊は、ライ麥の黄色く實つた丘の上に、夜營を張つた。その丘の六百米突ばかり右にも檜の疎に生えて居る、もう一つの丘が在つた。其處には同じ五十五師團の野砲隊が、夜營をして居た。翌朝、廣い平原の上に夜が明けると、白い霧が一杯に、土地を壓して居た。彼の隊へは早朝来る筈の退却命令が何うしても來なかつた。大隊長はや、焦せり氣味で、傳令を續け様に、後方の師團司令部にやつた。

すると、後方の、針葉樹の林に登つた太陽が、濃い霧を透し始めると、右の丘には、やはり砲車の姿がほのかに見えて居た。隊長は安心した。味方の砲兵もまだ退却して居ないと思つた。が安心は直ぐ裏切られた、その砲車の一つが、不意に紅の舌を出したかを見る間に、朝の靜な天地を砲聲が殷々さよもして、五六發の榴彈が、不意に味方の頭上に破裂したのである。味方の砲兵隊は、何時の間にか退却して獨軍の夫が入れ換はつて居たのであつた。

大隊長は暫時、失望に囚はれて居た。が、此の場合退却す

て居る、機關銃のみが反抗の悲鳴を續けて居るのみであつた。砲彈が、續け様に、彼の身邊で破裂した。

が、彼はもう氣が上つた人間のやうに、機關銃の引金を夢中で引いて居た。此の時には上官を殺した悔恨も、國家に對する忠節も、なんにもなかつた。たゞ、熱狂せる戦があつた。たゞ、狂猛なる發作があつた。敵の砲彈が暫く途だえたかと思ふと、烈しい空氣が彼を襲つたと思ふ間もなく、大音響と共に彼は大地に、投げ付けられて昏倒したのである。

がその時、味方の危急を知つて、駆けつけた露の野砲隊が、應戦の砲火を開いた。左の腕を切断され、右の大腿を碎かれ、死人の如く横はつて居るイワノウキツチの上で、露獨の烈しい砲火が交はされたのであつた。

六

野戦病院の寢臺の上で、蘇生をしたイワノウキツチは、烈しい熱病から覺めた人間のやうに、清麗な、靜かな心持を持つて居た。

彼には、何等の悔恨もなかつた。何等の興奮もなかつた。彼が歡樂の瞬間も、罪惡の瞬間も、戦線で奮闘した瞬間も、凡てが何の感情をも伴はずに、單なる事實として思ひ出された。もう凡てが、今から如何ともし難い、前世の出來事のやうに思ひ出された。彼は、その凡てが許され、その凡てが是

る云ふことは、凡ての人間を敵の砲火の犠牲にする事であつた。彼は直ちに、部下の大隊に戦闘隊形を取らした。イワノウキツチは、今こそ、死ぬべき時だと思つた。味方は、ライ麥の畑を踏み荒しながら、散開した。が夫と同時に呻りながら飛んで來た榴彈が、彼等の頭上に續けさまに十二三回破裂して、彼等の三分の一を奪つてしまつた。

大隊に附屬して居る三門の機關銃が、敵に對して、弱いら

ながら緊張した、反抗を始めたのであつた。が、十門に近い敵の野砲は、易々とその塵殺事業をやつて居る。六百米突と云ふ近距離の射程では、地面を葡ふ昆蟲をさへ逃がさなかつた。

榴彈が破裂する毎に、二、三十人の兵卒を碎いた。一町にも足りない散兵線は、十分と立ぬ間に疎になつた。大隊長が先づ倒れた。三人の中隊長の中、一人は戦死し、二人は傷いた。

イワノウキツチは、一番左翼に居て、機關銃隊を指揮して居た。敵の砲彈は一渡り戦列を荒す、機關銃隊を最後の目標とした。操縦者が見る／＼裡に倒れた。イワノウキツチは、敢然として、自ら機關銃の操射に當つたのである。

彼は、今日こそ自分の生命を一番高價に賣らうと考へた。彼は自分で銃弾を運び自分で裝填し、自分で狙つた。見る／＼味方の戦線からは、銃聲が絶えてしまつた。たゞ自分が操つ

認されるやうな伸々とした心持であつた。煉獄を通つて來た後の朗かな心持であつた。

時々、人を殺したと云ふ事が、彼の心を翳らさうとする事があつた。が、そんな時、彼は幾十萬の人間が、豚の如く殺される時、その裡の一人や二人が、何か外の動機から殺されても、何もさう大した事ではないやうに思はれた。恐らく、目の前で、餘り多くの人が殺し、殺されるのを見たので、人殺しに對するイワノウキツチの感覺は鈍つたのかも知れない。而も彼自身、機關銃を操つて、他の多くの人間を殺して居たのである。

快い朝である。

新しい軍服を着たイワノウキツチは、今揚々として病院の廊下を歩いて居る。凡てが巧く行つた。彼は、かうして満足らしい心持しか、心になかつた。

「やつぱり、ダシコウが、俺に勳章を呉れたことになる。」彼はまた、かう繰返した。そして、彼はその皮肉を苦笑した。が、そんな回想は、今日、ニコラス太公からサン・ジョルジエ勳章を貰ふ喜びを、少しでも傷けるものではない。

彼は、病院の廊下を揚々として居る。籠の駒鳥は、又高らかに、二三度鳴き續けた。

ある敵打の話

鈴木八彌は十七歳の春、親の敵を打つ爲に、故郷讃州丸龜を後にした。

つい其年の正月迄は、八彌は自分に敵のある事を知らなかつたのである。自分の生れぬ以前に父を失ふた事は、八彌の少年時代を通じての淡い悲しみではあつたが、其父が人手に掛つて非業の死を遂げた事は、その年の年月に八彌が元服をする迄は知らなかつたのである。

元服の式が終るこゝ、母親は八彌を膝下に呼んで、父の彌門が同藩の前川孫兵衛に打たれた次第を語つて、八彌に復讐を誓はしめたのである。八彌は母の血走る眼を見た。而して自分の身體に重い責任の懸つて居る事を知つた。

九つの歳から、若殿のお傍に召し出されて、足掛十年近くも小姓を勤めて居た八彌は、まだ世間を知らぬ初心な少年であつた。其上一つ年上の若殿の氣に入つて、殆ど友人關係に立つて居た彼は、何の氣兼ねもなく若殿を破魔弓の的を競つたり、雙六の相手をしたり、追鳥狩や遠乗にも、一所に行つた。藩の文學の老儒の講義を若殿と、同席で聽いてしびれを切

らして後で腹をかへて笑ひ合ふ時なさは、其處に主従の關係は全く消滅して居た。八彌は城中に云ふ大家族の中に起臥して彼は割合に幸福であり氣樂であつた。十七になつて元服するに共に初て、ある特定の人間を殺してしまはねばならぬと云ふ、困難な緊張した仕事を與へられたのである。

寛文年號がまだ若いある年の三月に、八彌は馴れぬ草鞋に足を堅めて、只一人復讐の旅に立つたのである。多度津の港に船が、りをりして居た金比羅船は、八彌をその乗客の數に加へて、瀬戸の内海を吹く春風に帆を充分に張つて、大阪表を指して海上を滑るやうに走つた。

彼は船の帆檣を背にしなから、若殿から拜領の天正祐定の一刀を、肩にもたせながら蹲つて居た。陸地から離れるに従つて彼の心の裡の激動が段々靜になつた。嚴しい母の訓戒や、若殿からの激勵の言葉なごさへ、其の効果が夢のやうに薄らいて行つて、彼の心には昂奮の後に來る倦怠と淡い哀愁

こがあつた。彼は自分が少しも關知しない生前の出來事が自分の生涯を支配して居ると云ふ事實を、痛切に感ぜずには居られなかつた。實際彼は今迄父親の事を餘り深く考へなかつたのである。彼は母は父親の無い悲しみを、なるべく彼に味はしめぬやうに、父と云ふ言葉を、彼の聽覺の裡で云ふ事を避けて居たのである。その上彼が若殿のお傍に召し出されてからは、父親に對する要求は殆ど感じなかつた。彼の生活は幸福であると共に、豊満であつたから、夫が今十七になるに一時に今迄は殆ど意識になかつた父親に、子として充分な愛を持ち、今迄少しも知らない前川なにかしに、敵として大なる憎惡を懷かねばならなかつた。が彼の教養を周囲では、彼をして親の敵に對し充分な敵意を持つ事を教へて呉れたのである。

八彌は敵の顔を色々に想像した。何となれば、彼の母は敵の前川をさう深くは知らなかつた。前川と八彌の父とは又こなき親友ではあつたが、結婚して間もない新家庭を、前川は訪問する事をなるべく遠慮して居たのである。

で、八彌は前川を知る誰彼を訪ふて、彼の人相を尋ね、ばならなかつた。親切な人達は十七八年前の記憶を色々に搾り出して八彌に満足を與へやうとした。がその人達の舊い印象をさんなにつき合はしても、八彌は敵の顔を思ひ浮べる事が出來なかつた。で八彌は仕方なく若殿の文庫の中にあつた

藩のお繪師のかいた曾我物語にある工藤の顔を、基本として

夫に二三の修飾を施して、敵の顔を色々に想像するより外はなかつた。彼はなるべく夫を憎々しく想像する事を務めた。憎々しければ殺す張合があると思つたからである。がその人相の確實な唯一の特徴は、右の横顔にほころがあること云ふであつた。

船は暫く、讃岐の海岸に添ふたが、高松の港に寄つてからは一文字に浪華を指して走るのであつた。

敵が何んなに強いか、夫も八彌には分らなかつた。が彼は幼い時から「武藝の修業は何よりも大事ぢや」と云ふ母の教訓を守つて、劍法丈は一心に努めて來た。輕捷にして大膽なる太刀筋は藩の指南番の夙くから認むる所であつた。八彌の母が彼に復讐の仕事を負せたのも、此指南番の保證を得たからである。

彼は復讐と云ふ事に多少の不安が伴つたものゝ、全體としては華やかな前途に、多くの勇ましい事と美しい事があるやうな氣がした。復讐と云ふ事が何んなに困難であるかは知らぬが然し夫は華やかな、人間としてやり甲斐のある仕事である事は確かと思つた。彼の心は自分の仕事に可なり熱狂する事が出來た。

安治川に着くこゝ、彼は船宿に足を止めてから、浪華の町を見て歩いた。凡ての繁華な街々を彼は敵を探すと云ふ心持で

のみ観て歩いた。

一月ばかりの後に京へ出た八彌は、京都の美しい寺々を訪ねた。室町や烏丸通の繁華な町をも通つた。鴨川にかゝる四條、五條、三條の橋を日に／＼幾度も越えて歩いて居た。物真似狂言の笛や太鼓の音を耳にした。が京都の名所古蹟にも敵は居なかつた。敵の居らぬ祇園や鳥原や四條中島は、彼にこつて無味な乾燥な場所であつた。

彼が京を立つたのは初夏の一日であつた。萌えそめた鮮やかな、新緑の朝の裡にある京を捨て、彼は江戸を志したのである。

京から大津を経て瀬田の橋袂に、彼は晝食の爲に茶屋を見附けたのである。まだ正午には少し間があつたが、彼は少しばかり渴を覺えたので休んで行く氣になつたのである。彼は此のあたりの名物の鮎ずしを喰べた。茶屋の女が愛嬌に話しかけるのを外しながら、彼は腕組をして又も如何にして、敵を發見すべきかを考へて居たのである。ふと氣がつくまで自分と同じ讃岐なまりの言葉が何處からともなく耳に附くのである。彼は早くも軽い興奮を覺えて、その聲の方を振り向いた。夫は琵琶湖に面した離れ座敷から聞えて來た。物の云ひ方はまさしく武士である。讃岐訛言の武士、夫は彼が尋ねる敵の一件件であつた。彼は思はず傍に置いてあつた祐定の一刀を引き寄せた。するに其途端に武士は女中を吐り附けなが

ら、荒々しい物音を立て、離れ座敷から店の間に出て來たのである。可なり酩酊をして居たその武士は、泥酔者に特有な妙な歩き振で戸外へ出やうとしながら、ふと八彌の顔を見合せたのである。武士の心に軽い悪意が湧いた。

「見ればまだ、若年の武士、初旅と見えるのうハハハッ……」と彼は八彌を嘲笑するやうに笑つた。八彌はムツとした。そしてその優しい瞳を刮りながらその相手をぢつと見つめたのである。

彼はこの武士を憎悪せぬ譯には行かなかつた。頬骨が恐しく出て居た。其の鼻は中途で猶太人の鼻のやうに鼻梁が飛び出て居た。そして其の悪意のある眼附が八彌に充分な嫌惡の心を呼起したのである。彼は自分の敵もこんな男であつて呉れ、ばい、と思つた。夫よりも此の男が前川孫兵衛であつて疑ひ得た。彼はムツとしたのを冷静な意志で押へた。彼は此武士を探つて見たいと思つたのである。

「左様でムります。初旅ぢやて何かご不自由致します。ご彼はおさなく答へた。肩に木刀を持つて居るのを見れば武者修業と見えるのうハハハ……一通りは使ふかの。」と、彼は弱小の八彌を飽く迄からかつて行かうと云ふ意志が、充分に見え始めた。

が八彌は相手の素生を知らうとして、更に怒を押へた。

「卒爾ながら御身様は讃岐の御方と察しましたが。」と、八彌は夫さなく訊ひかけた。

「いかにも生駒浪人ぢや、人を殺して國を出た。敵を持つ身ぢやがまだ首が胴に附いて居る。親を打たれても當節の武士は安閑と致して居るさ見える。いかにも天下太平の世ぢやテハハ……」と彼は敵を持つ人々を一般に侮辱したやうな嘲笑を洩した。生駒浪人であれば、或は自分の敵が、さうした偽名を名乗つて居るのかも知れぬと八彌は思つた。夫よりも敵を打ちに行く人々に對する侮辱が彼の心を湧かしたのである。手段である冷静を、もつと續けるには八彌はまだ若過ぎた。彼は瞳を輝しながら、ぢつと相手を見つめたのである。

「ハ、ア見れば血相を變へたな、さては其方も敵持ちか、ハッハッハ……その細腕では敵は愚か狗一疋も切れまいで。」と云ひながら、武士は自分自身の思ひ存分の痛罵に、快感を感じた如くカラ／＼と洪笑した。

八彌はもう堪らなかつた。彼は敵を持つ大事な身であること云ふ事も忘れてしまつた。またこの男が自分の敵の孫兵衛でない事は、横顔のほくろのないことで充分に明である事に氣が附いては居たが、まだ若くて感情の節制に乏しい彼は、怒にわな／＼と自分の心を、冷静に處置する事は出来なかつた。彼は刀を左の手に持つて突立ちながら、

「な、何と云はれる！ 狗が斬れるか斬れぬか、ならばお目

にかけやうか。」と叫んだ。彼の聲は稍々顫へを帯びて居た。

武士は八彌の戦慄を、恐怖の夫だと考へて又更に嗤つた。

「面白い！ 見せて貰はう。」と、事もなげに云ひ放ちながら、茶店から、ひよろ／＼と、往還の眞中に出て長い無反りの佩刀を、エイツと掛聲をしながら、抜放つた。

八彌は流石に落着いて居た。肩に背負ふた荷物を縁ばたに下して、草鞋の紐を結び直し、祐定の刀の目くぎを濕すこと、其儘抜き放つて敵に走りかゝつた。

その武士は、最初は微笑を以てあしらつたが、八彌が一太刀斬り込むと同時に武士は明かに狼狽した。彼は此少年の太刀先の餘りに鋭いのに驚いたのである。彼は自分の輕舉を悔い始めた。而もそんな引け目の自覺は、益々此の武士を不利の地に置いた。彼は段々、八彌に斬られて瀬田の橋の欄干に追ひ詰められ、もう後退する餘地がなくなつた。命の危いのが感じた彼は、身を躍して欄干を越え河中に逃れやうとした。が、彼の意志を遂行したのはその首級丈であつた。飛び込まうとする隙を見かけて、八彌は水も堪らず横に拂つたのである。

八彌は此殺人を終つて、自分自身に歸つた時、彼は最初に後悔した。殊に敵が水中に逃げやうとするのを追窮して迄、斬り下げた血氣を後悔した。が、遠くから見て居た人々は皆八彌の成功を祝つて呉れた。そしてその内の好意のある人達

は、八彌の身ごしらへを手傳ひながら、村役人が来て面倒の起らぬ前に、早く立ち退くやうに勸めるのであつた。

瀬田の橋を跡にした八彌が草津にかゝる頃には、もう最初の悔恨は消えて居た。彼は人を殺す事が、如何にも容易な事であるのに驚いたのである。彼は今迄身に餘る重荷として、感じて居た敵打が急にロマンチックな一つの冒険のやうに感ぜられた。山狩に行つて猪を追ひまはすやうな血醒い多少危険の伴つた冒険として感ぜられるやうになつたのである。其上に彼は自分の腕に對する自信を得た。此上にも道中で修業をしたならば、どんな大敵でも物の見事に打ち取らうと云ふ華々しい野心が湧いたのである。彼は以前よりも、もつと復讐に熱狂して東海道を、江戸へま往還の土を強く踏んだのである。

が敵打は八彌が最初思つたほど、華やかなものではなかつた。夫は非常に根氣の入る一の労働であつた。その年の夏の眞盛に江戸へ上つた彼は、年の末迄江戸に滞留して、敵の手がかりを求めたが、夫は空しい努力であつた。次の年は中仙道を大阪に下り故郷の山々を遠く見ながら山陽道を長州へ下つて見た。が、その旅も幻を追ふやうに徒勞であつた。第三年目の春は彼は北陸の驛路に二日三日と旅寝の夢を結んだが、到る處少くも敵らしい疑を起させる人間にさへ逢はなかつた。二十の春を彼は仙臺の青葉城下に迎へたのである。

と十幾番の仕合をして居たので、彼の肩は可なり凝つて居たのである。

「あ、按摩か、よい所へ參つたな、一揉もんで貰はうかな。」と八彌は云つた。盲人は痛々しく憔悴した身體を靜に八彌に近づけて徐々に肩を揉み初めた。指先には餘り力がなかつたが、彼は急所を揉も事を解して居た。其上、此の按摩はよく宿々て見かける夫とは違つて、恐しく沈黙であつた。主客の沈黙の内に盲人は、段々揉み進んで來た。八彌は少しく眠氣を催しかけた。そして其眠氣を拂ふ爲に盲人に話しかけた。

「そちは中年からの盲目で見えるな。」

「御意で三十三で明を失ひました。感が悪い爲、何かにつけて不自由を致します。彼はしわがれた聲で低く答へた。が、八彌は夫を訊く、此の盲人の語勢にふと不審を感じたのである。

「そちの生れ故郷は何處ぢや。」と八彌の聲は稍々凜として居た。

「四國で。」

「四國は孰ちぢや。」

「讃岐でムいます。」

「高松領か丸龜領か。」八彌はやゝせき込んで來たのである。

「丸龜領でございます。」

もう四年目であつた。彼も、故郷を懐しがらむ日が多くなつた。一日も早く敵を討つて、歸國の欣びを得たいと思つた。

彼は、敵打そのものには、もう何んの不安をも感じなかつた。四年の遍歴修行は彼の腕前を殆んど名人の域に持ち上げた。其の冒険的な旅行には、夜盗を斬り、山賊を殺すことなどが多かつた。彼は敵が何んなに強くとも、助太刀が幾十人あらうとも、目指す敵を打つは掌を翻すよりも易いと思つた。願くば、目覺しい働きをして本望を達したいと思つたが、敵を打つ資格の充分な彼にも、たゞ敵との邂逅が唯一の問題であつた。

二十一の春の初であつた。八彌は再び中仙道から信越へ入るつもりで江戸を出た。上州問庭の樋口の道場に四五日滞在した後、彼は前橋の酒井侍従の城下に入つた。敵打の費用は、藩から充分に供給を受けて居た彼は、可なり上等な宿を取るのを常とした。其夜も脇本陣上野屋太兵衛の家に宿つたのである。

夕食がすも、彼は習慣になつた旅日記を記してから、床に入るのが例である。彼が床に入らうとして日記の筆を擱いた時に、廊下に面した障子が靜かにスル／＼と開いた。見ると其處に平伏して居るのは一人の按摩であつた。

「お客様按摩の御用は如何でムりますか。」と云ひながら、彼は再び頭を低く下げた。八彌は其日樋口の道場で、門人達

「百姓か町人が孰れぢや。」

「お恥しながら之でも元は武士でムる。」と、盲人は其言葉の裡に生れながら、持つて居る威嚴を幾分か閃かしたのである。

「武士と云へば京極殿の浪人だな。」と云ひながら、八彌は振り仰いで盲人の顔を、ぢつと見つめたのである。行燈の光ではあつたが、盲人の青ざめた横顔に、敵の唯一の手がかりであるほぐろを、歴々に見出したのである。

八彌は右の手を延ばして盲人の手頸をグツと掴んだ。

「汝は前川孫兵衛とは申さぬか、何うぢや。」と云ひながら強く強く引いた。盲人は何の手答もなく、ひよ／＼と、へたばつてしまつた。

「何うぢや、前川孫兵衛とは申さぬか何うぢや。」と、彼は再びせき込んだ。

盲人は、最初は少しく驚いて居たが、彼は直きに冷靜に返つた。

「お恥しながら、いかにも御意の通りでムる、して其方様は。彼の聲は少しも取り亂しては居なかつた。

「よく白狀致した。其方の爲に、非業な死を遂げた鈴木彌門の一子同苗八彌と申すものぢや、もはや逃れぬところ尋常に覺悟いたせ。」

盲人の驚駭は非常であつた。彼は暫くは茫然とした。その

灰色の見えぬ眼に、強い感情が動いて居るのが看取された。がその驚きは自分の身に、危険が迫つたのを知つての駭きではなかつたらしい。

「なに／＼彌門ごのに、一子がムつたとな、さてはあの時お八重殿が妊娠されて居たさ見えるな……それでは其許は今年二十一でおぢやらう……拙者を敵打の事如何にも承知致した。漂泊の旅に明を失ひ命を持って居た所でも。拙者も之で死花が咲き申すわ。」と、盲人の言葉は途切れ／＼であつて、そしておしまひに淋しく笑つた。彼の全體の言葉は懐舊の情さ、しつこりとした謙虚の感情で濕ふて居るやうに思はれた。

八彌は凡てが意外であつた。彼は自分の敵として瀬田の橋で逢つたやうな剛情我慢の武士を期待して居た。その人間を見れば、憎悪と敵愾心が一杯になるやうな武士を望んで居た。然るに、目前に見出した正真正銘の敵は一個半死の盲である。彼は非常な失望を、感ぜずには居られなかつた。その上此の盲人が八彌の父母の名を呼ぶ聲音には、無限の懐しみを堪へて居る。彼は今迄自分の父の名が之ほどの懐しみを持つて、發音されるのを聞いた事がないのである。八彌は敵と面しながら、今迄に自分が豫期しない感情に襲はれて、餘儀なく沈黙を續けて居た。すると盲人はまた語を次いで、
「彌門殿の遺れ片身の其方に、打たれるとならば、思ひ残す

八彌は先刻から、此盲人に對して敵愾心を持たうと努めても、夫が心の底の方から何時の間にか崩れて行くのを感じた。彼は親の敵に廻り合ひながら不甲斐なく撓ゆんでしまふ自分の心を、幾度か吐責しようとした。が、彼には何うしても此盲人の存在を絶たうとする意志が起らなかつた。彼は今迄自分が色々の場合に、あんなに容易に殺人の出來た事が寧ろ不思議に思はれた。

盲人は河原へ出る迄數町の間、八彌の父の事を何かと語つた。彼は死際に青年時代の回想を懐しんで居るやうであつた。八彌は盲人の口から、初めて父の明かな性格を知つて新しい懐しみが湧くやうに思つた。が亡き父に對して新しい懐しみを懐く事が決して盲人に對する悪意とはならなかつた。そして盲人は最後に八彌を一目見ぬのが残念だと云つた。

やがて此の異様な同伴者の前に、月光に照された利根川の河原が現はれた。すると盲人は彼の杖を捨てながら、
「八彌ごの、近頃卒爾ながらその指添へをお貸しなされい、身共も武士でゐる。たゞ手を拱ねいて犬死は致さぬぞ。」と云ひながら、八彌の指添を借りて身構した。夫が八彌に對する好意の虚勢であることは餘りに見えすいて居た。

八彌は心の内で思つた。その誤ちを後悔し、自分で自分の生存を否定しようとする人間を殺すのが何の復讐であらうかと思つた。

事はない。が、茲では拙者が多年世話をかけた宿屋に迷惑をかける、大儀ながら利根の川原は直ぐ其處でゐる故、夫へ御件を致さう。さあお支度なされい。」

盲人は如何にも落着いて居た。八彌は一種の發作に陥つたやうに茫然と支度をし、茫然として盲人に續いた。宿屋の人は妙な好奇心を以て二人を黙送した。往來へ出るに二人は暫くは無言であつた。が少し歩くと、
「卒爾ながら母上は御丈夫か。」と盲は訊いた。

「息災でゐる。」と八彌は答へたが、もう先のやうな峻しい聲音ではなかつた。

「彌門殿と拙者とは世に云ふ竹馬の友でゐる。何事にも相性は魔がさすものか、其上あの夜は、二人とも酩酊致して居つた。あの誤ちを致した後、其場を去らず割腹とは存じたが、母者人に止められて國遠致したが、拙者一生の不覺でゐる。今迄二十年一夜も彌門殿を殺した悔恨に苦しめられぬ日はムらぬ。彌門殿には一子もない爲、名乗つて打たれるすべもないと存じて居たが、思ひの外そなたに廻り會ふて罪亡しの出來るのは何よりの欣びでゐる……武士たるものが町人共の情に依つて生き延びるのも心外と存じて居たが……もう此の笛も無用ぢや。」と彼は習慣上右に持つて來た笛を地上に捨てた。

「八彌ごの怯されたか、いざおかゝりなされい。」
と盲人は聲を勵まして叫んだが、その聲は夜の河原に物哀しい響を傳へた。八彌は腕組をしたまゝ考へ込んで居たのである。

その翌朝河原に近い人達は、其處に一の死體を見出した。然し夫が盲人孫兵衛の死體である事は後で漸く判つた。何んとなれば其死體には首がなかつたからである。而もその死骸には、腹に一文字の傷があつて、當人の自殺であるやうにも思はれた。

八彌は敵の首を下げて歸郷した。そして百石ばかりの加増さへ得た。が彼は何處で敵を打つたのか、何時敵を打つたのかを明かにしなかつた爲、敵の首は偽首だと云ふ噂さへ立つた。そして敵を得打たぬ臆病者としてそしるものさへあつた。その爲か何うかは知らぬが彼は間もなく浪人した。延寶の頃、江戸四谷坂町に鈴木若狭と云ふ劍客があつて、勇名を府内に轟かして居た。之が八彌の後身であるさある人が云つた。

石橋山 (一幕三場)

人物

兵衛佐頼朝
田代冠者

大庭三郎
股野五郎
梶原平三
源太景季
その他軍兵大勢

時 治承四年八月
所 土肥の杉山

第一場

杉の大木が二三本生えてある谷間。大きい杉の木が一本地面に三十度位の角度で倒れてある。雨上りで木から雫が落ちてある。幕が開くと遠寄の聲が聞える、矢聲が聞える。馬が嘶く。軍兵が二三人舞臺を走り過ぎる、又四五人駈け過ぎる。
やがて大庭、梶原親子を初め騎馬武者が六七人駈け出て来る。
皆馬から下りる。

武者一 さうもこの谷間より他に逃げ場所はないぞ。

武者二 さうだ、たしかにこの見當だ。

武者一 峰にも尾にも姿が見えぬとすることこの谷間より他にない。
武者二 (遙かの軍兵に指圖する如く) オイ、その雑木の下を探して見る。

武者一 あ、茲の茅萱をひさく踏みつけてある。この谷が怪しい。確かにこの谷に違ひない。

大庭 (馬から下り、倒れてある杉の木の上へ上る。弓杖を突いてある) お、確かにこの谷間だ、確かに此方の方角へ逃げて来たんだ。オイその茅の中に籠手が片一方落ちてあるぢやないか。
武者三 (籠手を拾ひ上げる) これですか、成程味方がこんな所へ籠手を棄てる筈がない。

梶原 木に登つてはゐないかな。
大庭 まさか、鎧を着て木には登れまい、若し登つてゐれば屈強の的だ。

(軍兵ども尋ねあぐんで方々から歸つて来る。)
武者一 さうだ、ゐないか。
軍兵一 みません、狐の子を一匹捉へて来ました。

武者二 馬鹿め、俺達は源氏の大将軍を狩立て、ゐるのだ。
大庭 ゐないかな、ゐない筈はないんだが、彼方にある小松の茂みを探したか。
軍兵二 彼處からは兎が三匹ばかり飛出しました。

大庭 馬鹿々々しい、茲まで追ひつめて来たものを、茲で佐殿を首にするかしないかで、俺達の恩賞の桁だつて違つて来るんだ。
軍兵又四五人空しく歸つて来る。

梶原 ゐないのか。
軍兵一 ゐません、彼處の山の窪みて雑兵一人討取りまし

梶原 首を見せい。
軍兵一 六十近いヨボ／＼の爺ですから討棄て、来ました。

大庭 さうも可訝しい、茲にゐないこと云ふ事はない、この谷間にゐないこと云ふ事はない、もう一度みんな探して来い。
(軍兵一寸躊躇する) え、探して来いこと云ふに……。
弓で乗つてゐる杉の木を打つ。
軍兵ども走り出す。

大庭 (首を傾げながら杉の木をもう一度弓で打つ) 可訝しいなアこの杉の木は。(もう一つ打つ) 空洞だ。この木は。(大庭杉の木を根元を見る) おや、茲にこんな大きな穴が開いてゐる。(大庭微笑をする) この木だ、隠れやがったな。(大庭空洞の中へ弓を入れて搔廻す) さうも奥が深い、茲だ、茲だ、確かにこの中に隠れてゐる。それ探せ、おいみんな入つて探せ。

梶原 私が探ませう。

大庭 大丈夫か。

梶原 大丈夫ですとも。
梶原弓を右手に持ち太刀に手をかけて中へ入る、同時に暗轉。

第二場

第一場に於ける杉の木の空洞の中、空洞の截断面を見せる。
空洞は右へ行く程高くなつてゐる。頼朝と田代冠者とが空洞の中にこゝまり合つてゐる。

頼朝（窮屈さうに體を動かしながら）おい田代、もつとお前の右の足をさうにか出来ないか。

田代 もうこれよりさうにもなりません、出来るだけ此方へ寄せてゐるんです。

頼朝 おい、土肥や岡崎はうまく隠れたらうか。

田代 大丈夫でせう、土肥は所の案内をよく知つてゐるから大丈夫逃げ終せたでせう。

頼朝 だつて向うにも大庭ださか曾我ださか生え抜きの相模つ子がゐるんだから。

田代 いや大丈夫です、土肥はうまく逃げるに違ひありません、茲から十國峠へ出て箱根の方へ逃げたでせう。

頼朝 さうか、それださか好いが。

田代 それよりか貴方さか私はさうなるでせう。

頼朝 運だよ、未だ勝負は極つてゐないよ。未だ丁が出たか半が出たかはつきり判らないんだ、だが未だ負けたさかは極つてゐないんだ、俺は負けるまでは安心してゐるよ。

田代 流石は源家の大將軍です、それで私も幾らか落着きました。

頼朝

まア黙つてゐる、まだ判らない。
（外でがや／＼と云ふ聲が聞える、二人は思はず身を縮めて緊張してゐる。

急に杉の木を叩く音が聞える、續いてもう一度聞える。間もなく空洞の下の方から弓の先が出て動き廻る。）

田代 私は蒐げ出して斬死させよう。
まて／＼あれば弓の先だ、まだ運は盡きてゐない。

頼朝 弓が消える。やがて兜の端が見えて来る。

頼朝七首を抜きだん／＼空洞の口の方へ近寄り、七首を擬して待つてゐる。梶原首を出しのんきに見上げると、頼朝七首で梶原の内兜を突き刺さうとする。

梶原（小聲で）まア待つて下さい。

頼朝 待つては卑怯だな。

梶原 いや、え卑怯ぢやありません、そんな亂暴な事をしなくつても話は判ります。

頼朝 ナニ話が判る、さう云う風に判るんだ。

梶原 貴下を助ければ文句はないでせう。

頼朝 それはさうだ。

梶原 ぢや助けませう、その代り貴下が戦に勝つたらお禮はしてくれてせう。

頼朝 それは無論だよ、俺が天下を取れば、日本半國をやるよ。だが俺が誰か他の人間に討たれて死んだ時はそれまで

頼朝 お前が最後の防ぎ矢を射た時の様子はさうだつた。

田代 大庭や股野の軍勢は兎狩か何かするやうに山中を取りまいてゐました。

頼朝 さうか、いよく駄目かな。だがまだ判らない、俺は敵がこの中へ入つて来れば一人だけは刺殺して自害をするつもりだが、自分で七首が俺の脇差へ突刺るまではまだ思ひ切れない。

田代 私が御最期を見るまでは一人だつてこの空洞の中へ入ればしません。

頼朝 さう御最期なご、俺が死ぬのを極まつたやうに云ふなよ、縁起でもない。

その時空洞の上より一羽の鳩飛出して来る。

田代 あ、鳩がゐますよ。

頼朝 捉へて置け、腹が空いたら食つてやらう。

田代 でも可哀さうぢやありませんか、この鳩も隠れてゐた所を捉つた所は何だか私達の境遇に似てゐませんか。

頼朝 馬鹿を云ふな、鳩は鳩、頼朝は頼朝だよ。

田代 鳩を捉へる。

急に空洞の上へ蒐げ上る人の足音がする。頼朝もどきつとする。

頼朝 さう／＼やつて来やがつたな。
田代 来ましたな。

だよ。

梶原 いや、えそれはいけません、貴下が死んだら草葉の蔭ででも私の弓矢の冥加を守つて下さい。

頼朝 慾の深い奴だね君は。俺が死んだ時にまで損をしないつもりだね。

梶原 いやその位の利益がなければこんな大冒険は出来ません、靜かにしてゐて下さい、私はこれから外へ出て嘘を吐くんだから、貴下が茲で騒いで打壊しては困りますよ。

頼朝 大丈夫だよ。

梶原 去らうとする。

頼朝 この鳩をやるよ。

梶原 そんな物は要りません。

頼朝 いや、これを持つて行つて人間のゐない證據にしてくれ。

梶原 成程考へましたね、あゝ私にも工夫がつかしました。

梶原 その側にある蜘蛛の巣を取つて、兜や鎧になすり付ける。

梶原 ぢや何れその内。

頼朝 よろしく頼んだ。
暗転。

第三場

第一場と同じ。
倒れた杉の大木の上に大庭、前のやうに弓杖を突いて待つてゐる。

梶原空洞の口から這ひ出して来る。

大庭 さうだゐたか。

梶原 いや居ませんよ、あゝ骨を折らせやがった、本當にムダ骨だ、鎧を着てこんな中へ這ひ込んで遣り切れぬ。あゝ苦しい。

大庭 ナーニゐない事はあるまい、探し方が足りないんだらう。

梶原 さうして空洞の中を二三度這ひ廻りましたよ。蟻も虻も居ませんよ。蝙蝠は澤山あますよ。あゝ彼處の峰の上を傳つてゐる侍の一行は佐殿ぢやありませんか、さうだくさうに違ひない、みんなあれを追駆けて見ろ。

軍兵に沙汰をする。

大庭 いやあれぢやない、あれぢやない、あれは曾我の連中だよ。いやこの空洞が怪しい、この空洞に違ひない、誰か斧か鉞か持つて来い。

武者一 そんな物が手近にあるもんですか。

大庭 ぢや私が自身で入つて見る。

梶原 大庭殿、そんなことをしてくれぢや困りますね、貴下はこの中に佐殿があるさ云ふんですね、よく考へてごらん

れませんか。

大庭 えゝいま／＼しい、ぢや一蒐け追駆けて見よう。

大庭及び他の武者去る。梶原父子だけ残る。

景季 お父さん、本當にゐないんですか。

梶原 あるよ。

景季 ある。(血相を變へる)ゐるんならさうして見道すんてす。若しそんな事が判つたら平家からそんな咎めに合ふかも判らないでせう、討ちませう、討てば即座に二三ヶ國の恩賞に有りつけるぢやありませんか。

梶原 馬鹿、何を云ふのだ。

景季 何を云ふぢやありません、頼朝がゐるのなら容赦なく討取りませう。お父さんがいやなら僕がやりませう。

梶原 だからお前は出世が出来ないんだ。

景季 頼朝を討てば大した出世ぢやありませんか。

梶原 いやこの中には頼朝なんかゐないよ。

景季 ぢや何がゐるんです。

梶原 (馬に乗りながら)この中には半目はんめがゐるんだよ。

景季 半目はんめとは何ですか。

梶原 無論賽ころの半目だよ。

景季 えゝ、何ですつて。

梶原 あゝ俺が日本半國を賭けてゐる半目を、この杉の木の壺皿で隠してゐるんだよ。

なさい、今は平家の御代ですよ、そして佐殿は戦に負けたんでせう、誰だつて佐殿の首を取つて平家の見參に入れ恩賞の二三ヶ國も貰ひたいぢやありませんか、この空洞に佐殿がゐれば見道す奴があるもんですか、それに捜し方が不審ださ云つてもう一度捜さうさ云ふのは私を疑つてゐるんですか、若し人が先へこの空洞へ入つてゐるさしたら後から入つた兜はこんな蜘蛛の巣がかゝりますか、御覽なさい、こんな山鳩がゐたぢやありませんか、これまで云つても未だ私の云ふ事を信じないで、捜さうさ云ふ人は捜して御覽なさい、私にも覺悟がありますよ。

大庭 さうかなア、さうも私にはゐるやうに思はれるんだがな。

大庭空洞の入口へ歩み寄り弓を取直して中を搔廻す。

梶原 ゐないさ云つたらゐませんよ、それよりもこの鳩を差上げませう、晝飯の菜に炙つてお上んなさい。

大庭 馬鹿々々しい、そんな物は欲しくない、俺は佐殿の首を平家の見參に入れて二三ヶ國も欲しいんだ。

梶原 貴下は何時も慾張つてゐるですね、ぢやこの鳩は放してやりませう。

大庭 何だ馬鹿々々しい、この鳩のやうに兵衛佐も逃げたんだな。

梶原 さうですよ、今頃は眞鶴あたりから船に乗つたかも知

景季 お父さん冗談を。
梶原 お前はお父さんに黙つて尾いて来れば好いんだ、ハ、ハ、。(と笑ふ)
梶原悠然と退場

幕

歌舞伎若衆

玉村 吉 彌(歌舞伎若衆)

水木辰之助(同じく)

玉村 千 彌(吉彌弟子)

都 萬 太 夫(劇場座元)

時 代

若衆と云ふが散文的にわかいしゆと讀まれない頃、エロチックな對象が女とばかりは極まらずわかしゆと云ふ言葉が美しさと懐しさを含んで居た頃。時代で云へば元祿に手のとゞかうとする延寶の末年。

場 所

四條河原中島。

都萬太夫座の吉彌の部屋、吉彌結びの創始者たる吉彌の美しさも年毎に衰へ初めて居る。五年前の東下りに江戸の男や女の魂を悉く奪ひ歸つた孔雀王の誇りは今彼にはもう見出されないほど凋落の悲しさが何處となく纏はつて居る。歌舞伎若衆なればこそ前髪を残して居るものゝ少年時代をとおく過ぎて居ることは輝かぬ眸が語つて居る。開け放たれた障子から見たそがれ初めた蔵園村の火影がチラ／＼と見える、折しも春逝く頃ゆゑなまめか

吉 子供の前に云ふても分るまいけれど、此の頃の私と云ふ者は見る影もない者になつてしまつてなあ、賣出しの辰之助さんの威勢と云ふものは憎らしうなる程ぢや、私の弟子のお前迄が藝も器量もずんぞ劣つた辰之助さんのお弟子の爲に、いゝ役を取られてしまふのだから、自分に役のつかないのは諦めもつくけれど之からのお前が目の目を見ぬやうではほんたうに立つ瀨があらはしない。

千 私はお小姓一役で澤山でムんす。

吉 お前昨夜の辰之助さんのお客は誰だか知つて居るかえ。

千 えゝやつぱり丹波の大盡さんでムんした。

吉 さうかえ、さうせ綺麗で若い者が勝つ世界なんだから、それでも昨日迄あんな事を云つて置きながら大盡さんも大盡さんが辰之助さんもお客を横取りしなくつてもよささうなもんだ。お前も之からたんと磨いて綺麗にならなけりやいけません、茲の世界は美しい者が王様になる世界だから、ごんなに藝がよくても舞が出来ても綺麗で若くなけりや見向きもして呉れないんだから、私が初めてお江戸へ下つた時にはお前も一所に連れて行つて見せたかつた程だよ、八百八町の人達は皆磁石に吸はれる鐵のやうに猿若町へ引きつけられて来た、ある大名のお姫様は私が東へ下つた春から御病氣になつてその年の顔見世月にさう／＼亡くなつておしまひになつたがそのお床の下から出たのは私

しい淋しさがどこともなく漂ふ。吉彌は弟子の千彌と話しながら合せ鏡を使つて椿油にほのめく自分の黒髪をみつめて居る。

吉 お前はもう出る幕はないのだね。

千 えゝ。

吉 ぢや私の事は介意はんで宿へお歸りな、お座敷があつたのぢやないかえ。

千 えゝ、あつても七つからでムんす。

吉 さうかい、それなら待つて居てお呉れ、何んだかお前が居て呉れぬさ淋しいから。

千 あなたはお顔の色が悪うムんすわ。

吉 お前にもさう見えるかえ、私も今度の芝居は氣が進まな

いで、初日から之ではほんたうに困るけれど。

千 何處か工合が悪いのでムんせぬかえ。

吉 いゝえ身體が悪いのではなしに、心が傷んで居るからぢや。

千 お氣に觸つた事でもムんすかえ。

の繪姿であつた、御遺言によつて送られた髪を見た私は見ぬ戀人の死を悲しむ心よりも自分の美しさを誇る心で胸が一杯であつた。その頃の私は孔雀のやうに思ひ上がつて居たし(現在の淋しさをまぎらす爲にしきりに回想に耽るものゝ如く)……あゝさう／＼まあ可笑しい話があるよ、近江の國の狐が道中の私の美しさに見られてお江戸迄慕つて来たさ云ふ噂があつた、こんな話はさりさめもない偽だらうけれど、その頃の私の評判と云ふものはそれは／＼大したものだしそれに自分だつて自分の美しさを疑つたことは夢にもなかつたのだけれど。

千 今でも見られるほご綺麗でムんすのに。

吉 私達は年の行かない内が命さ。若衆の命は短いもので大鑑の中にあるやうに角入るれば風吹きさ、前髪を置いて居るのもこんな稼業なればこそ、それに男や女を數限りもなう迷はせた報もあつて此頃は身體が端から端に腐つて行くやうに手も足も自由でない、所作事の上手な辰之助さんに及ばないのも無理はないけれど。

千 でも太夫さんは二十を超したばかりでムんすのに。

吉 そら普通の人は三十でも若いだらうけど、私のやうに若衆歌舞伎の國に住んで居る者の命はかげろふのやうに短いもの、もう此頃は宮川町を通つたつてあれが吉彌ださ指して呉れる人の數も減つた、私たちは若さの美しい酒を人

が吸つてしまつたらボンと捨てられる麴のやうなものさ。見物が年の寄らぬ藝を見て呉れるのなら、私達の命はもつと長いんだけれど。ほんたうに美しさは藝よりも力強いけれど悲しい事には藝よりも命が短い、世間の人達は皆私達の美しさを弄ばうとするんだもの。ごんなに美しい顔だつて何時迄も續くものか、お年の寄らず綺麗なのは辨財天ばかりさ。辰之助さんの全盛だつてやがて凋む花と同じ事、一刺の花代が銀十枚だ云ふても私は羨しく思ふまい、ごうせごうせ一刻／＼若さを人に吸ひ取られて居るやうなものだからね。今こそあんなに思上つて私を見下したつてあの人の持つて居る麴だつてごうせ底があるんだから。お前は數へて十五だつたな。

千 はいさうてムんす。

吉 お前はふくらみそめた蕾のやうに之からの身體だから、たんと綺麗になつて辰之助さんを見下してお呉れよ。私の追善と思つて。

千 まあ追善なご、仰つて、私が十七になるのもたつた二年しかかゝりませんのに。

吉 私は美しさが無くなつたら死んだご同然だと思つて居るのさ。私達の命は美しさなんだから。美しさに生きて、美しさに苦しんでやがて美しさに死なうと思つて居る私はあれが吉彌のなれの果だご云はれて皺のある楊色の顔を誰にもなれば人に先へ立たれることは死んでも嫌ぢや、去年の秋の顔見世に初めて辰之助さんにいゝ役を取られた時にはよつばご死なうと思つたんだけれどあの丹波の大盡がお前の美しさは年を知らないご云つて下さつたものだからつい私も迷つたんだ、その大盡迄が辰之助さんの爲に私を捨て、しまつたのだもの、此の頃の辰之助さんの威勢ご云ふものは鴨の流をせきごめてしまふ程だから。

千 太夫さんに分れたら……私。

吉 そんな心配はいらぬご、茲は美しければ誰も頼む事はいらぬ、王様の冠は自然ご足下に降つて来る、お前の美しい顔立ては辰之助さんを蹴落すごだつて何でもあるまい。

千 そんな悲しいごは云はずにいづ迄も私の傍に居て下さい、太夫さんはやつぱり座頭ぢやありませんか。

吉 そら、私がかうして居れば座頭には違ひないけれど、なんぼ座頭をしたつてお客から何ごも云はれなければ辛抱の出来るものではない。それだご云うても茲を逃れて山の中へなご逃げ隠れるのも嫌ぢや、舞臺で生れたものはやつぱり舞臺で死にたい。愚痴のやうだけれご今度の芝居は私は嫌で仕方がない、辰之助さんはまうけ役だのに私はにくまれ者の小姓になつて辰之助さんにかゝる呼聲の渦巻の中に一人シヨンボリご立つて居なければならぬ。

千 それで若し聲が少しもかゝらなかつたごきには……。

指さしはしない。私は出世狂言の楊貴妃のやうに美しさと誇りを以て死にたい。私は二十の年も暮れようとする秋に緋縮緬の振袖を着て京の街々を歩いたがあれは私を離れようとする若さを引き止めようとする爲の果敢ない力盡しであつただけれご何も知らない人達は私の心に湧き初めた悲しみを知らないで皆私の美しさを今更のやうに賞め讃へて呉れた、あの時の人達ご今の人達は寸分も變らないけれど私の顔には時が取り返しつかぬ足跡をつけて行つてしまつた。然し中には私達の美しさよりも藝を味つて呉れる人達や昔のひいきは舞臺に出れば言葉も掛けて呉れるのが何よりの慰さ、辰之助さんご並ぶご辰之助さんには嵐のやうに聲がかゝる、でも嵐の中に漂ひながら鳴きしきる千鳥の様に私を賞めて呉れる聲が必ず交る、之が私に與へられる唯一つの命の水さ、一人でも二人でもいゝ私の美しさを認めて呉れる人がある限りは生きて行くつもりなのだけれご、私が舞臺へ出ても一人も私を呼んで呉れる人はいない時はその場で死なうと思つて居る。

千 さうして死ぬなご、云はれるのでムんすか。

吉 私の心はお前には分らぬかも知れぬ、私だつて小さい時から誰かに頭を抑へて居られたらこんな心も起らぬだらうけご之迄はずご歌舞伎の國の王様であつたんだからな、もごから家來なら家來のつもりで居ようけれど一度王様に

吉 それは私の誓の言葉さ、東から歸つた時京の街の男も女も逢坂の麓迄私を迎へに來た、その時の私は自分の美しさを信じ切つて京の人達は何時迄も私の美しさに隨喜するものだご思ひ定め私の美しい身體に降りかゝる讚嘆の言葉は咲く花のやうに年々變らぬものだご思つて居たものだから私は八坂のお堂の下を通る時、吉彌の美しさは未來永劫變るごきはごいません、もし舞臺で吉彌の名を呼ばないごきはその場で直ぐに死にますご私は思ひ上つたまゝに誓ひ捨てた、身の程も知らぬ大それた誇の誓であつたけれど私は今も悔いては居らぬ、假令その誓のために身を亡さうごも私は自分の美しさの若い誇のためなら喜んで死にもしよう。

(部屋の前をカヤ／＼と通り過ぎる一群がある)

吉 辰之助さんの樂屋入りだらう。大したお伴ぢやのう。ああ拍子木が鳴つて居る。話に實が入つて扮装が遅うなつてしまつた。千彌やこの手文庫はお前に預けて置くから大事にしまうて置くのだよ。

(見る目もあてやかなる美しい若衆に扮し終りし吉彌は一人淋びしく部屋を出で、行く、見送つた千彌はやがて歸つて來て紅の行燈に灯を入れると片膝立てながら鏡に顔を映して見る、おぼろな鏡の中に妖艶な少年の貌が現はれる、しばらくして居ると辰之助を喝采する嵐のやう

な聲が舞臺からどよめいて来る。鏡に映つた顔は段々蒼白くなつて来る。鏡を持つ白い可愛い手がふるへて居る、急に見物の驚駭の聲が起る、騷擾の音が響いて来る、千彌は驚きながら立ち上つて舞臺の方へ走つて行く。見物の叫びは大なる喧騒の聲に變つてゆく。暫くすると千彌が先に立つて吉彌が武士に扮した俳優に擔がれながら歸つて来る。吉彌の白い咽喉からひわ色の着付に迄赤い血が流れて居る。座元の都萬太夫、及び水木辰之助も吉彌の後から這入つて来る。

千彌 太夫さんエの……。

吉彌 千彌か、かたきを〜。

(千彌は「はい」と云つたまゝ刀に手をかけて立ち上らうとする)

吉彌 刀てなしにお前の美しさで……。

(と云つたまゝガクリとなつて死んでしまふ。見物の喧騒の聲は嵐のやうに響いて来る。勝利者水木辰之助は傍に坐つて居たが蒼白の顔が段々恢復してやがてさびしくニツコリ笑つた。)

夫

婦

(一幕)

人物

おしん
その夫。重吉
その子。おまち
旅の若き男女
手代風の男
その他

時

明治十五六年頃

所

中仙道の宿に近き峠

峠の頂上に在る茶店。四月の終なれど、山國なれば正に春醴なり。雪をいたゞける連山が見える。茶店の軒

には、桃が咲いてゐる。時々春らしい鳥の聲が、きこえる。茶店には、駄菓子と、ゆで玉子とわらじ、など置いてある。幕開く、おしん店先で絲車を引いてゐる。うららかな朝日が當つてゐる。重吉、田舎の遊び人らしい風をして、ぶらりと歸つて来る。おしん、見えて見ぬ風をする。重吉家の中へは入る。おしん不安さうにその方を見る。百姓空の大八車を曳いて上つて来る。

百姓 お早う。

おしん お早う。もう行つて來なかつたのか。

百姓 お、今朝六つに起きた。

おしん 宿の景氣は、何うぢや。

百姓 不相變、駄目ぢやのう。本陣の龜屋さんも、おつつけ店をたゝんで、東京へ出なさるぢうぞ。

おしん 龜屋さんが……おほ……あんな大きい屋臺骨でも、辛抱が出來んのか。

百姓 何しろ、この冬の間宿り客が、月五六人しかないんぢや。もつとも、徳川様の時だつて、冬の間は道中が少かつたが、それでも一晩に四十人や五十人は、この宿に宿つたものぢや。前田様が、お宿りになつた時などは、五つある脇本陣まで一杯になつて、お人足などは、商人の家にまで宿まつたものぢやが。

おしん 妾の店なんか、お客がいくらあつたつて、知れたものだが、それでも月々に賣上が減るばかりぢや、何か今の中に商賣換てもしないよ、妾達は、頸の下が干上つてしまふ。

百姓 (親指を示し) 居るのかい。

おしん (うなづく) ……。

百姓 この頃、御城下の町には、人力と云ふものが出来さるな。かう、宿がさびれると、他の商賣も上つたりぢやから、いつそ御城下の町か、それとも東京へでも出て人力でも曳いてやらうかと思つてる。

おしん それでも、お前さんなどは、働く氣があるから、おかみさんは仕合せぢや。

百姓 こんな時世になると、ウカ／＼しては居れんわ。昔のやうに呑氣にしてゐると、餓ゑる外はないわ。

おしん 家の人なんか、そんなことは夢中でばくちばかり打つてゐるんだから。

百姓 (その話題を避けるやうに) 此間、異人が二人、龜屋さ

おしん なに、黙つてゐるだ。手前の着物、剥がれて、なに黙つたらう。この人てなし!

重吉 何をうるさい!

おしん おしんを突き倒し着物を取り上げようとす。おしん、着物にしがみついて放さない。

おしん わしが、身の皮を剥ぐ思ひした、おまちに買つてやつた着物だもの、死んだとて持たしてやるものか。

重吉 何をうるさい! (おしんの上に、のしかかゝる)

おしん え、この極道の人てなし。ばくち打つて、勝つと、女郎買つて、金を無くして、女房や子供の物を剥ぎ取る。渡すものか、渡すものか。

重吉 え、何をしやがる。この不貞腐れめ!

重吉、おしんの手から、着物を奪ひ取る。着物一箇所破れる。

おしん え、畜生!

武者振りついて来る。重吉、蹴倒す。

重吉 ざま見ろ!

おしん 口惜しい! 畜生! おまちの……おまちの……。

重吉 何を云ひやがる……おまちの着物も、くそもあるものか。俺が、一山當てたら、こんな着物何枚も買つてやる。

おしん え、何を……その着物を、わしがごな思つてこさへたか……。

んへ来て宿まつたよ云ふが、峠を通らなかつたか。

おしん 通つたよ。縣廳の役人が案内してのう。鼻の高い恐ろしい顔をしてゐたが、それでも氣は、やさしいと見え、家のおまちに、異人さんが喰べる眞黒なお菓子を買れたよ。

百姓 ほ、う、おまちさんは、可愛くなつただらう。

おしん 子供が、大きくなるよ、だん／＼先が案じられるわ。

百姓 まあ、さう愚痴を云ふな。重吉さんも、いつまでもばくちばかり打つて居らんわ。今に、何ぞえ、事があるだらう。……さあ行かう。さよなら、えらいお邪魔しました。

百姓、車を曳きながら去る。重吉、奥から出て来る。

風呂敷包みを持つてゐる。おしん、見とがめる。

おしん もし! お前何持つて行くだ。

重吉黙つて出て行かうとする。

おしん 何持つて行くだ。(おしん、重吉の手から包みをひつたくる。包みとける。中から、おしんの衣類と子供の着物とが出る)

重吉 何しやがる!

おしん お前こそ、何するだ! 俺とおまちの一張羅持つて行つて何するだ。

重吉 うるさい、黙つてくれ!

重吉 何を、くよくよ云ひやがるんだ……。

おしん あ、口惜しい! (起き上らうとして) あ、痛い!

重吉、着物を持ちながら、悠々と去る。

おしん 畜生! 人てなし、極道! ほんとうに、あんな奴!

おしん、漸く身體を起し、店先にぼんやり腰かけたまま涙をぬぐつてゐる。麓から、旅の若い男女上つて来る。二人とも駈落者らしくそわ／＼してゐる。

おしん さうぞ、お休みなさいませ。一休みして、いらつしやいませ。まだ、ずつと上りが續きます。

男女、もじ／＼してゐたが、思ひ切つて床几に腰をかける。おしん、お茶を汲んで出す。

おしん 昨夕は、ごちらてお宿りになりました。

男 追分です。

おしん お、追分で……越後の方から、おいてになりましたか。

男 さうです。越後の方です。

おしん やつぱり東京へ。

男 さう思つて来たのですが、別に目當と云ふのは、ないのです。

おしん お連合は、奥さんでございませうか。

男女、恥しさうにする。

男 さ云つたやうなものです、實は早く云つて見れば、お

互夫婦になりたいのの親達が許さないものですから、かうして駆落して来たのです。

おしん まあ！

男 驚いたでせう。

おしん いゝえ、お羨しうござんす。さうして、お若い方が、手を取り合つて、都をさして、旅をする。それが、本當に一生の花でございますわ。

男 そんなに云つて下さるのは、おかみさん一人ですよ。何處でも、いたづら者か何かのやうに、變な目付で見られましたよ。だが、もう三分の二までは来ました。もう一息です、これも（女を指す）だん／＼歩行になれて来ました。

おしん （女に）貴女は初旅でございませう。
女 はい、初の旅で夢のやうに、引き廻されてゐるのでございませう。

おしん でも、お二人連なら、そんなに心丈夫か分りません。わたしも、これはと思ふ男に連れられて、東京へでも行つて見たうございませう。

男 いや、外目にはそんなに羨しく見えるかも知れませんが、此處まで來るのが、大抵ぢやありませんでした。信濃境までは、追手がかゝると思つてビク／＼してゐました。かうして、拜見したところ、おかみさんなどは、御亭主とお二人で、山の中で、のんきに暮してゐられるのを見るこ

おしん さよなら、御無事に。

おしん、いつまでもその方を見てゐる。女兒のおま

ち、前掛に一杯松ぼつくりを拾つて來る。

おしん まあ、澤山拾つて來たね。

おまち 谷へ行くこ、もつと澤山落ちてるよ。

おしん それ丈あれば、澤山ぢや、五日位は、たきつけにな

るわ。

おまち お父さんは。

おしん 先刻一寸歸つて來たが、直ぐ出て行つてしまつた。

おまち お父さんは、何處へ行つてゐるのだらう。

おしん さあ、何處だか……………おまち、お前お父さんが

居る方がいゝか。

おまち （うなづく）……………。

おしん だが、お母さん丈でもいゝだらう。

おまち （うなづく）……………。

おしん ぢぢらでもいゝのか。

おまち （首を振る）……………。

おしん ぢぢらがいゝんだ。

おまち 二人ある方がいゝ。

おしん さうかのう。あんな極道な親父でもさうかな。だが、おまち、お前お母さんが外へ行くここにすれば、お前も一緒に行くだらう。

本當に、羨しう思ひます。この家を見ても、この家を見ても、夫婦揃つて、仲よく暮されてゐるのを見るこ、羨しくなります。私達も、早くあゝして落着いて暮せるやうになりたいて、そればかりを祈つて居ります。

おしん まあ、さうですかね。妾の暮しまてが、羨しく見えませう。見て極樂、住んで地獄は、妾のことでございませう。ホンに人様に知れない……………（口をつぐむ）

男 え、さうですかね……………。

おしん 本當に此處から、幾度逃げようか……………おほ、初めてお目にかゝつて愚痴はよませう、おほ、おほ、

男 ほ、ほ、此方もつい旅の空の人なつかしさに、入らぬ内證事をきかせて、すみませんでした。さあポツ／＼行かうかな。……………あ、さう／＼お願ひして置くことがあつた。もう追手は、かゝるまいとは思ひますが、もし人が來て、私達のことを何か訊いても、知らぬと云つて下さいませ。

おしん 承知しましたとも。陰ながら、お二人の幸福を祈つて居ります。さうぞ道中お氣をつけて行つて下さい。峠を降りて、三里さ少しおいてになるこ、昔の御城下です。

男 さうも、ありがたう。おねがひします。
女 さよなら、御機嫌よう。
二人見返りがちに行く。

おまち （うなづく）……………。さつかへ、お母さん行つてしまふの。

おしん さうだね。お前のお父さんと一緒に居るこ、お前も

お母さんも一生苦勞すると思ふから、今の中に何處かへ行かうと思ふの。麓の宿や御城下の町なんかだ直ぐ、お父

様に分るから、一層遠方へ行かうかと思つてゐる。

おまち 此處にゐたいな……………。

おしん お前には、まだお父さんのしてゐるこが分らない

けれども、大きくなればお父さんが、そんなに悪い人だつ

たか分るよ。

おまち、不思議らしく母の顔を見詰めてゐる。手代風の男が、上つて來るのが見える。おしん、出かゝつて

ゐた涙を拭ふ。

おしん あ、お客さまだ。……………一服しておいてなさいませ。まださう上りてございませう。

手代風の男 ぢや、一休みさせて貰ひませうか。

おしん さあ、さうぞ。

手代風の男 腰をかける。おしん、お茶を汲んで出す。

おしん 景色は、ようございませう。

手代風の男 此の土地は、丁度今が春ですな。

おしん このやうな山國では、桃や櫻が、一度に咲きます。

手代風の男 なるほごね。向うの谷間に咲いてゐるのは、櫻ですわね。

おしん さうです。櫻です。

手代風の男 向うに見える山は、駒ヶ嶽ですか。

おしん いゝえ、駒ヶ嶽は見えません。

手代風の男、おしんの顔容を注意する。

手代風の男 (おまちを見ながら) 可愛いお子さんですね。いくつです。

おまち 七つ。

手代風の男。七つにしては、大變ませてゐますわね。小父さんは、九つ位かと思つた。

おしん 皆さん、さう仰しやるのですが、柄ばかり大きくても、するところはまるで、ねんねえて困ります。

手代風の男 おかみさんは、失禮ですが、たいへん若く見えますわね。七つになるお子さんがあるとは、思へない程ですね。

おしん こんでもない、もうお婆さんでございませよ。

手代風の男 冗談でせう。おいくつです。

おしん 二十六でございませよ。

手代風の男 ほゝゝゝ、そんなになりますかね。私は、まだ三か四かと思つた。器量のいゝ方は、徳ですな。

おしん 御冗談はつかし。

おまち (先刻から、少し退屈して居る) お母さん。わらび少し取つて来ようか。
おしん あゝ取つておいて、あまり遠くへ行つてはいけませんよ。
おまち あゝいゝよ。
おまち 去る。

手代風の男 こんな山の中で暮して居れば、御亭主だけが杖柱でせう。その御亭主が頼りにならないとすな。

おしん ほんごに、こんな心細いことはございません。もう馴れてゐますし、この半町ばかり上にも、家が二三軒ありますので、さう淋しいとは思ひませんが、それでも夜なごは、子供ご二人きりで………歸つて来る晩は、十日に二

手代風の男 なるほごな。それぢや堪りませんな。女房が悪いのは、一生の不作さ云ひますが、亭主の悪いのは、不作さころか一生の飢饉ですな。

おしん ほんごうに、何うしてかう苦しめられるのかと思ひますよ。

手代風の男 こんな事を云つちや、夫婦仲へ水をさすやうて悪いけれごも、貴女なんか取返しつかない云ふ年でもありませんな。貴女の心掛一つでは………。

手代風の男 さう云つちや、何だけれごも、おかみさんほどの器量よしを、かうして田舎へ埋もれさせて置くのは、全く以て惜しいですわね。

おしん まあ、お世辭がお上手で………。

手代風の男 さうして、お世辭ぢやありませんよ。何うてす、御亭主は、何の御商賣か知らないが、一つ御亭主を説きつけて、東京へ出て来られちや。おかみさんの器量と愛嬌を看板に、東京で茶店でも開いたら、こんな山の中でやつてゐるのとは、よつばさ譯がちがひますよ。

おしん ほんごに、東京へても一緒に居つてくれるやうな、そんな亭主ださういゝのでございませよ。

手代風の男 おゝ、ぢや御亭主が頼りにならないと云ふのですか。

おしん 頼りにならない位なら、いゝんですがね。………。

手代風の男 ほゝゝゝ。一體御商賣は何ですか。

おしん 職業なんて云ふものが、あればいゝんですがね。

手代風の男 職業がない！ ぢやつまり遊び人………いやなるほご。それぢや、お困りてせう。

おしん 困るの、なんのつて。

手代風の男 初めて會つた私に、おつれ合の讒訴をなさる所を見るご、よつばさお困りてせう。お察しませよ。

おしん 先刻も………つくづく嫌になつてしまつたのでございませよ。

手代風の男 人間は見切りが大切ですな。私達の商賣の方でも、さうですがね。私達でも、この品物は持つて居て先の見込があるかさうかを、見切るのが大事ですよ。さうになるだらう、さうにかなるだらうて待つて居るご、しまひにはその品物ご心中しなければならぬ羽目になつてしまひますよ。夫婦仲なんでも、さうてせうな、先の見込があるかないかを見極めて、あがきの付く裡にさうかしなご、それこそ、一生の飢饉になるぢやありませんかね。ご云つて私がいやに夫婦仲のことは、精しいやうだが、これて實は獨身ですよ。はゝゝゝ。

おしん ……。

手代風の男 東京日本橋の村松ご云ふ唐物屋の番頭です。この頃は、田舎の方でもシャツと帽子さか、いろ／＼な唐物を使ふやうになりましたのでな。今度は越後から、越前、加賀、信濃ご小賣店の掛金を、蒐めて歩いてゐるので、すよ。始終得意先を廻つて、旅から旅を歩いてゐるので、ついまだ女房を持たないてゐるのです。だから、本當の夫婦の間のことは分らないかも知れませんが。

おしん ……。

手代風の男 子供もありませんし………。

手代風の男 子供さんだつて、あれだけになれば、足手まとひごころか、もう直ぐ手助けになりますよ。

おしん ……。

手代風の男 人間は見切りが大切ですな。私達の商賣の方でも、さうですがね。私達でも、この品物は持つて居て先の見込があるかさうかを、見切るのが大事ですよ。さうになるだらう、さうにかなるだらうて待つて居るご、しまひにはその品物ご心中しなければならぬ羽目になつてしまひますよ。夫婦仲なんでも、さうてせうな、先の見込があるかないかを見極めて、あがきの付く裡にさうかしなご、それこそ、一生の飢饉になるぢやありませんかね。ご云つて私がいやに夫婦仲のことは、精しいやうだが、これて實は獨身ですよ。はゝゝゝ。

おしん ……。

手代風の男 東京日本橋の村松ご云ふ唐物屋の番頭です。この頃は、田舎の方でもシャツと帽子さか、いろ／＼な唐物を使ふやうになりましたのでな。今度は越後から、越前、加賀、信濃ご小賣店の掛金を、蒐めて歩いてゐるので、すよ。始終得意先を廻つて、旅から旅を歩いてゐるので、ついまだ女房を持たないてゐるのです。だから、本當の夫婦の間のことは分らないかも知れませんが。

おしん ……。

手代風の男 子供もありませんし………。

手代風の男 子供さんだつて、あれだけになれば、足手まとひごころか、もう直ぐ手助けになりますよ。

おしん ……。

手代風の男 人間は見切りが大切ですな。私達の商賣の方でも、さうですがね。私達でも、この品物は持つて居て先の見込があるかさうかを、見切るのが大事ですよ。さうになるだらう、さうにかなるだらうて待つて居るご、しまひにはその品物ご心中しなければならぬ羽目になつてしまひますよ。夫婦仲なんでも、さうてせうな、先の見込があるかないかを見極めて、あがきの付く裡にさうかしなご、それこそ、一生の飢饉になるぢやありませんかね。ご云つて私がいやに夫婦仲のことは、精しいやうだが、これて實は獨身ですよ。はゝゝゝ。

おしん ……。

手代風の男 東京日本橋の村松ご云ふ唐物屋の番頭です。この頃は、田舎の方でもシャツと帽子さか、いろ／＼な唐物を使ふやうになりましたのでな。今度は越後から、越前、加賀、信濃ご小賣店の掛金を、蒐めて歩いてゐるので、すよ。始終得意先を廻つて、旅から旅を歩いてゐるので、ついまだ女房を持たないてゐるのです。だから、本當の夫婦の間のことは分らないかも知れませんが。

おしん ……。

手代風の男 子供もありませんし………。

手代風の男 子供さんだつて、あれだけになれば、足手まとひごころか、もう直ぐ手助けになりますよ。

おしん ……。

手代風の男 人間は見切りが大切ですな。私達の商賣の方でも、さうですがね。私達でも、この品物は持つて居て先の見込があるかさうかを、見切るのが大事ですよ。さうになるだらう、さうにかなるだらうて待つて居るご、しまひにはその品物ご心中しなければならぬ羽目になつてしまひますよ。夫婦仲なんでも、さうてせうな、先の見込があるかないかを見極めて、あがきの付く裡にさうかしなご、それこそ、一生の飢饉になるぢやありませんかね。ご云つて私がいやに夫婦仲のことは、精しいやうだが、これて實は獨身ですよ。はゝゝゝ。

おしん ……。

手代風の男 東京日本橋の村松ご云ふ唐物屋の番頭です。この頃は、田舎の方でもシャツと帽子さか、いろ／＼な唐物を使ふやうになりましたのでな。今度は越後から、越前、加賀、信濃ご小賣店の掛金を、蒐めて歩いてゐるので、すよ。始終得意先を廻つて、旅から旅を歩いてゐるので、ついまだ女房を持たないてゐるのです。だから、本當の夫婦の間のことは分らないかも知れませんが。

おしん ……。

手代風の男 子供もありませんし………。

手代風の男 子供さんだつて、あれだけになれば、足手まとひごころか、もう直ぐ手助けになりますよ。

おしん ……。

手代風の男 人間は見切りが大切ですな。私達の商賣の方でも、さうですがね。私達でも、この品物は持つて居て先の見込があるかさうかを、見切るのが大事ですよ。さうになるだらう、さうにかなるだらうて待つて居るご、しまひにはその品物ご心中しなければならぬ羽目になつてしまひますよ。夫婦仲なんでも、さうてせうな、先の見込があるかないかを見極めて、あがきの付く裡にさうかしなご、それこそ、一生の飢饉になるぢやありませんかね。ご云つて私がいやに夫婦仲のことは、精しいやうだが、これて實は獨身ですよ。はゝゝゝ。

おしん ……。

手代風の男 東京日本橋の村松ご云ふ唐物屋の番頭です。この頃は、田舎の方でもシャツと帽子さか、いろ／＼な唐物を使ふやうになりましたのでな。今度は越後から、越前、加賀、信濃ご小賣店の掛金を、蒐めて歩いてゐるので、すよ。始終得意先を廻つて、旅から旅を歩いてゐるので、ついまだ女房を持たないてゐるのです。だから、本當の夫婦の間のことは分らないかも知れませんが。

おしん ……。

手代風の男 子供もありませんし………。

手代風の男 子供さんだつて、あれだけになれば、足手まとひごころか、もう直ぐ手助けになりますよ。

おしん ……。

手代風の男 人間は見切りが大切ですな。私達の商賣の方でも、さうですがね。私達でも、この品物は持つて居て先の見込があるかさうかを、見切るのが大事ですよ。さうになるだらう、さうにかなるだらうて待つて居るご、しまひにはその品物ご心中しなければならぬ羽目になつてしまひますよ。夫婦仲なんでも、さうてせうな、先の見込があるかないかを見極めて、あがきの付く裡にさうかしなご、それこそ、一生の飢饉になるぢやありませんかね。ご云つて私がいやに夫婦仲のことは、精しいやうだが、これて實は獨身ですよ。はゝゝゝ。

おしん ……。

手代風の男 東京日本橋の村松ご云ふ唐物屋の番頭です。この頃は、田舎の方でもシャツと帽子さか、いろ／＼な唐物を使ふやうになりましたのでな。今度は越後から、越前、加賀、信濃ご小賣店の掛金を、蒐めて歩いてゐるので、すよ。始終得意先を廻つて、旅から旅を歩いてゐるので、ついまだ女房を持たないてゐるのです。だから、本當の夫婦の間のことは分らないかも知れませんが。

おしん ……。

手代風の男 子供もありませんし………。

手代風の男 子供さんだつて、あれだけになれば、足手まとひごころか、もう直ぐ手助けになりますよ。

おしん ……。

手代風の男 人間は見切りが大切ですな。私達の商賣の方でも、さうですがね。私達でも、この品物は持つて居て先の見込があるかさうかを、見切るのが大事ですよ。さうになるだらう、さうにかなるだらうて待つて居るご、しまひにはその品物ご心中しなければならぬ羽目になつてしまひますよ。夫婦仲なんでも、さうてせうな、先の見込があるかないかを見極めて、あがきの付く裡にさうかしなご、それこそ、一生の飢饉になるぢやありませんかね。ご云つて私がいやに夫婦仲のことは、精しいやうだが、これて實は獨身ですよ。はゝゝゝ。

おしん ……これで、私のやうな者が、東京へぼんやり
出て行つても、路頭に迷ふことはないでせうか。

手代風の男 ……さんでもない。貴女位の器量を持つて居れば、
東京の方で手を出して待つてゐるでせう。女を捨てる數は
ない云ひますがね。貴女なんか、さうですわね。私が、貴
女であれば東京へ出て、お茶屋か船宿………この頃、船
宿がだん／＼待合云ふものになりませう。貴女は、いくら山
の中からお出た云つて、その器量だし、客あしらは馴れ
てゐる。それに愛嬌がある。何處だつて欣んで置いてくれ
ますよ。この女中さんといふのがいゝ商賣ですよ。給金は
少い代りに、貰ひ云ふのがありましてね。これが、さん
なに低くつもつても、月に二三十兩。下手な官員さんの月
給なんか追ひつきませぬよ。

おしん ……でも子供があれば奉公の邪魔でせう。

手代風の男 ……ところが、もうあれだけになれば、何處だつ
て、貴女と一諸に置いてくれますよ。一寸した用事は出來
るし、世話は焼けるでなし………それこそ、思ひ切つて
藝妓家の下地つ兒にしてもいゝですな。あれだけの子柄な
ら、きつこい、藝妓になりますよ。この頃の大政參議の奥
さんは、大抵藝妓上りですよ。

おしん ……でも、東京へ行く金はないし、行つてから何處に頼
目ですな。貴女が、私と一諸に行くか行かないか、大き
い岐れ道ですな。尤もごちらへ行つた方がいゝかは分りま
せんがね。そこが貴女の見切ですよ。此處に居るより悪く
なりつこはありませぬよ。だが、私はあまりおすゝめしま
せんよ。他人様の女房を、そゝのかすやうになるこいけな
いから。

おしん ……でも、妾は今直ぐ云ふわけには………

手代風の男 ……御尤もです。私はこの峠を降りるこゝ、あの御城
下の街でも、少し用事がありますから、今日一晩宿まりま
すが、貴女が決心が着いて後から來る云ふことが定まれ
ば宿屋で待つてゐますよ。

おしん ……
手代風の男 ……貴女は、私云ふものが、何んな人間だか分ら
ないで、心配してゐるのでせう。御覽なさい！ 茲にちや
んと、掛取帳を持つてゐますよ。(大きい鞆の中から、掛取
帳を出して見せる) この鞆なんかも、私の店の品物です
よ。東京では、鞆云ふものが大流行ですよ。それ、ちや
んと日本橋本町村松かいてあるでせう。

おしん ……そのお宿云ふのは………
手代風の男 ……住吉町の角屋です。
おしん ……角屋さんですか。昔の本陣ですわね。
手代風の男 ……何うです。來ますかね。

つて行く所はなし………
手代風の男 ……そいつは、一寸困りますな………。(一寸決心
したやうに) だが、おかみさん、貴女の言つてゐることは本
氣ですか。

おしん ……(寂しく笑つて) まあ本氣のつもりなんですがね。
手代風の男 ……若し本氣なら………さうですな。袖すれ合ふ
も、他生の縁さやうで、私が一つ骨折つて上げませうか
な。

おしん ……え、つ。(低く)

手代風の男 ……貴女が、本氣ならですよ。貴女が本氣なら、私
が一肌脱がう云ふのですよ。

おしん ……

手代風の男 ……東京へ一緒に連れて行つて上げて、奉公するま
で、面倒を見よう云ふのですよ。

おしん ……

手代風の男 ……貴女の御亭主には、少し悪いが、貴女を救ひ出
して上げよう云ふのですよ。

おしん ……御親切は有がたうございます。

手代風の男 ……さうです。思ひ切つて行きますかな。

おしん ……え、(まだいづれともなく)

手代風の男 ……先刻も、云つたやうに思ひ切りが大切ですよ、
人間は。私が此處へ休んだことが、貴女の一生の運の岐れ

おしん ……(決心したらしく) え、参りますわ。

手代風の男 ……さうですか。それはよく決心がつかしましたな。

私がお引受しましたからには、悪くは許ひませぬよ。だ
が、おかみさん、こんなことは、私が一緒に連れて行
つたなご、云ふことは誰にも氣取られないやうにね。之で
氣持がいゝ。おかみさんが、私の云ふことをよく聞きわけ
てくれた譯だから。

おしん ……足弱ばかりで、道中お邪魔ぢやありませんか。

手代風の男 ……いや、私も、大抵用事も片づいたから、ぶらぶ
ら歩いて五月の二三日頃までに、東京へ歸ればいゝので
す。おかみさんも、直ぐ絹物が着られますよ。直ぐです
よ。

おしん ……一度でもいゝから、柔かいものに手を通して見たう
ございますわねえ。

物質、天秤棒で、籠を擔いで上つて來る。

おしん ……お、吉さん、まあ一服しておいでなさい。

物質 ……寄つては居られない。今日は、いそぎぢや。あ、お
かみさん。お前の家の重吉さんに頼まれたぜ、これを家へ
届けてくれつて。

紙包みをおしんに渡す。

おしん ……あけて見る。中から、先刻重吉が奪ひ去つた
おまちの衣物出て來る。

おしん (駭く)……………。
物質 ほ、う、おまち坊の着物を買ったんぢやな。重吉も親
ぢや、時には感心なことをするのう。ぢや行つて来るわ。
歸りに寄るわ。

おしん さうも吉さん、ありがたう。たしかに。

物質去る。おしん、着物をちつと見詰めてゐる。

手代風の男 此處に長く居るこ人目についていけない。ぢや
宿屋で待つてゐますよ。きつと約束しましたよ。

男、鞆を提げて歩き去らうとする。

おしん あの大抵は行くつもりですが、若し行きませんしてし
たら、妾におかまひなく……………。

手代風の男 (立ち止つて)おや、早や決心が變つたのです
か。御亭主が、子供に着物を一枚買つて呉れた丈で、もう
そんなに變つたのですか。

おしん いゝえ、買つて呉れたなんて……………。

手代風の男 一生涯の事ですよ。思ひ切つておいて下さい！
待つてゐますから、其處が見切りですよ。

男去る。おまち、先刻から歸つて來てゐる。手代風の
男の最後の言葉を聴く。おしん考へ込んでゐる。

おまち お母さん、何處かへ行くの。

おしん ……………いゝえ、もう決して何處へも行きません。
おまち ぢや、お父ちゃんも三人であるの？

妻

(一幕)

おしん あ、三人でいつまでも居るので……………お、わ
らびが、そんなに大きくなつたの。煮て、お父さんが歸る
まで、置いておいて上げませう。

—幕—

人 物

川瀬。三十三の男。

女。丸鬚に結つてゐるが、藝妓であることが直ぐ判る

女。二十一。

旅館の女中

所

東京に近き海岸

時

ある年の冬

情 景

旅館の一室。可なり立派。卓上電話などある。人氣なく
やゝ荒寥たる感じ、雨戸なども閉められてゐる。幕開く
と男と女、女中に案内せられて登場。

男 なるほご、お客はありませんね。

女中 今が一番ひさうございますよ。戸なんかも、かうして
幾日も開けないでござりますよ。

(女中急いで雨戸を二三枚開ける。夕暮の海が見える。)

男 でも、夏場ウンと儲けてあるからいゝてせう。

女中 さうでも、ござりませんわ。夏場と申しても、ホンの
丸二月でございますからね。(座蒲團を押し入れより出し)

さうぞお敷き下さいます。

女 (立つたまゝで)ねえ、ちよいと。妾暮れない内に、鈴龍
さんの所へ行つて來るわ。

男 うむ、早く行つて、早く歸つておいて。

女 (女中に)ちよいと、此の家を出て右へ行くこ、山部と云
ふ煙草屋さんがありますわねえ。

女中 えゝ、ござります。

女 あすこまで、茲から二丁もありますかしら。

女中 いゝえ。そんなにござりません。橋をお渡りになる
こ、直ぐでござりますよ。

女 (取つたシヨールをまた首に、まとひながら) ぢや、わたし一寸行つて来るわ。
男 直ぐ歸つておいてよ。向ふてお茶なんか飲んぢやいけないよ。

女 え、でも妾肺病なんか恐くないわ。

男 恐くなくつたつて、傳染つちや困まるぢやないか。

女 傳染つたら死んでしまふわ。なんて……ぢや妾行つて来るわ。

(女、女中と連れ立つて去る。男縁側へ出て、しばらく海を眺めてゐる。女中火を持つて来て火鉢に入れる。直ぐ去つてお茶を持つて来る。)

女中 ごうぞお茶を。

男 富士が、かすかに見えてゐるね。

女中 冬は、毎日のやうに見えてゐます。

男 冬は、全く淋しい土地だねえ。

女中 これでも、春先きになると、お客様がポツ／＼お見えになります。

男 落着くことは落着くがね。

女中 でも、あまり落着き過ぎますわねえ。

男 本當だ。心中をでもするのには、いゝ土地だな。

女中 まあ。御冗談を。でも去年もございましたのよ。丁度今頃。

女中 この二三日寒いんでございますよ。……あの、晩のお支度は? 何かお好みがございますか。

男 なに、別に。

女中 ぢや、奥さんがお歸りになつてから、御一緒に。

男 あゝさうしてくれ。

女中 畏りました。(去らんとする)

男 風呂は湧いてゐるか。

女中 申し兼ねますが、一日隔きに立てゝゐるものですから、

今日は……

男 (苦笑して) さうか、そいつは……

(女中去る。男、持つて来た小さいトランクを開ける。中から、二三冊の本を取り出す。つゞいて、革袋にはいつたピストルを取り出す。微笑して、革袋からピストルを取り出す。右手を伸して人を射つ眞似をする。今度は自分の、こめかみに擬す。微笑。ピストルを革袋に収める。本もつゞいて収め、立つて壁にかけてある外套のポケットから、折り疊んだ夕刊を取り出し、卓子の上に擴げて讀む。硝子戸越しに見える海、全く暗くなる。……) 間……やゝけたたましい足音がして、女歸つて来る。女 お、苦しい、駈け出したものだから胸が苦しくつて。お、苦しい!

男 何うした。鈴龍さんは。

男 此の家でかい!

女中 いゝえ、此の向ふの海岸で。

男 身を投げたのだねえ。

女中 え抱合心中でした。

男 いゝ女だつたかい!

女中 まだ二十前の女學生らしい女でした。

男 男は?

女中 男は、三十三の立派な方でしたよ。何だか奥さんが

お任りになるやうな話でしたよ。

男 (一寸いやな顔をしながら) 叶はぬ戀と云ふ奴だねえ。

女中 奥さんが、お可哀さうですわねえ。

男 うむ、まあさう云つたわけだね。

女中 (ふと氣が付き話題を易へる) 山部さんは、御存じなん

ですか。

男 いやさう云ふ譯ぢやないんだがねえ。あれの朋輩が、あ

の家へ來てゐるんだよ。亭主が肺病で、その看病で來てゐ

るんだよ。

女中 あゝなるほど。

男 肺病患者は、澤山來てゐるのだらう。

女中 お見えになつてゐるやうでございます。

男 冬は、暖かなんだねえ。もつとも、今日あたりは東京と變らないが。

女 まあ。いやになつちまつたわ。俊ちゃん、こんな顔を

してゐるのよ。(げつそりと死にかゝつてゐるやうな顔をして

見せる。) 山部のお女房さんが、二階へ上つてくれと云ふ

んでせう。妾、例の調子で「お邦さん! さうして」つて

な事を云ひながら、駈け上つて行つたでせう。すると、俊

ちゃん、頬つべたがこんなになつて、(頬をこさげて見せ

る) 死にかゝつてゐるぢやないの。もう、今日か昨日か

云ふ顔をしてゐるのよ。お邦さんは、お邦さんで、眞赤に

目を泣きはらしてゐるぢやあないの。妾、あんなにれた

ことはなかつたわ。引込みがつかないのよ。だから、妾一

寸坐つた限りで「お大事に」つてなことを云つて、逃げて

來たわ。でも、お邦さんは、下まで送つて來てくれたの

よ。しく／＼泣いてゐるので、妾、可哀さうになつた

わ。

男 お前が、遠出氣分か何かで、飛び込んで行くから、引込

みがつかなくなるんだよ。向ふは、遊んでゐるんぢやない

んだもの。生死の境だよ。

女 でも、お邦さんは感心だわねえ。あんな浮氣者が、よく

俊ちゃんの看病をしてゐるわねえ。

男 やつぱり、人情があるんだね。

女 お邦さんにも病氣が、きつと傳染つてゐるわねえ。

男 傳染つてゐるだらう。接吻なんかするだらうからねえ。

女 そりやすくてせう。でも、俊ちゃんの肺病が、傳染つて死ねば、心中ですわねえ。

男 先づ心中と同じだね。

女 肺病心中ですわねえ。

男 お前は、さうだ、俺が、肺病になつたら看病してくれらかね。

女 え、しますとも。看病だつて、何だつてするわ。でも、貴君は肺病になりさうはないわねえ。

男 肺病になるならないが、問題ぢやないんだ。俺と一所に死ねるかいと云ふんだい。

女 え、死にますとも、何時だつて、死ぬわ。

男 (やゝ眞面目に)本當かい。

女 嘘なんか、云はないわ。

男 ぢや、今一緒に死なうと云つたら、死ぬか。

女 え、死ぬわ。いつだつて死ぬわ。

男 冗談ぢやないんだけ。

女 え、冗談ぢやないわ。

男 ぢや、いよ／＼となつて駭くな。

女 (少し不安になり)まあ、さうするの。

男 俺は、ピストルを持つて来てゐるんだよ。

女 まあ、ほんとう。

(男ピストルを取り出して、卓子の上に置く)

女 だつて、死ぬにしても、遺書を書かなきゃいけないわ。

男 お書きよ。遠慮なく。

女 あなた嘘でせう、そんなに冗談のやうに云つてさ。

男 嘘なもんか。俺は、ちやんと遺書を書いてゐる。御覽!

(男、トランクの中から白い封筒を取り出して見せる)

女 まあ。

男 さうだ。俺は嘘は云つてないだらう。

女 一寸、これ読んでいゝてせう。

男 いやだよ。

女 讀ましてよ。

男 駄目だ。馬鹿!

女 よましてよ。わたし、あなたがこんな事書いてあるか讀みたいのよ。

男 駄目だ、いけない。

女 よましてよ。わたし、こんな事があつてもよももの。

(二人、烈しく手紙を争ふ。女、必死になり、到頭男の手から、手紙をもぎとる。)

男 馬鹿! 讀んで目を廻すなよ。

女 え、目は廻さないわよ。(女、恐々封を切る。)

男 (笑ひ出す)は、は、は、は、馬鹿。

女 (女封筒の中から、紙片を取り出しぢろ／＼見る)まあ、あなたこれ白紙ぢやないの。

女 まあ。ピストル! あなた何時か持つてゐると云つたわねえ。(恐々取り上げて見る)彈丸がこめてあるの。

男 あるとも、五發ともは入つてゐる。

女 まあ、恐いわねえ。死んでもいゝわ。でも、死な／＼つてもいゝぢやないの。

男 お前の心が、確でないから死にたいんだ。

女 まあ、あんなに云ひわけをしても、信じて呉れないの。

男 おれは信じられないんだよ。

女 まあ、口惜しいわねえ。鶴沼へ行つたなんか、何でもないんてすもの。妾、芝勇さんの取巻きて行つたんですもの。安島さん、變だなんて、随分人を馬鹿にしてゐるわねえ。あなたが、そんなに疑ぐり深いのなら、妾死んでしまふわ。

男 さうか、ほんとうに死ぬか。

女 え、死ぬわ。

男 本當に死ぬか。

女 でも、そんな事疑はれて死ぬのは、いやだわねえ。

男 やつぱり、死にたくないんだね。

女 でも、妾一月位待つて貰ひたいわ。せめて長唄會が済むまで待つて貰ひたいの。妾が、死ぬと「傾城」タテを歌ふ人がないんてすもの。

男 馬鹿! そんなことを考へてゐて、死ねるか。

男 さうさ。いけないか。

女 まあ、ひざいわ。あなた!

男 だつて、ほんとうの遺書が出たら、お前困つただらう。

女 だつて、ひざいわ。……(女急に笑ひ出す)ほ、は、は、白紙はよかつたわねえ。

男 まだ心中なんかしてたまるか。

女 ぢや妾をためして見たの。

男 さうだ。

女 卑怯だわねえ。男のくせに。

男 何が卑怯なものか。お前のやうな浮氣者は、時々試さなきゃ。

女 ぢや、今日試めた結果は、さうだつたの。

男 あまり、いゝ成績でもないね。

女 落第!

男 落第でもないがね。

女 ぢや、わたしが、もつと死ぬ／＼と云へばよかつたのね。

男 まづさうだね。

女 だつて、あまり死ぬ／＼と云つたらあなた困まつたてせう。

男 困まりやしないさ。心底見えた、兄は東の件を許すさ云ふところだよ。

女 だつてあなたの狂言の底が見えてゐたんですもの。由良之助より芝居が下手よ。

男 由良之助ほご、肚が出来てゐないんだねえ。

女中 (女中、食事の支度をととのへ、まづ酒盃を持って来る。さうも、たいへん遅くなりました。)

女中 (料理を、次ぎく膳の上に並べる。女、男に酒をつぐ。)

女中 ちや、御用がありましたら、さうぞ鈴をお鳴らしになつて下さいませ。

女 お銚子のお代りをね。

女中 畏りました。(去る)

女 でも妾少しはビツクリしたわ。でも、ピストルなんか生れて始めてせう。

男 ピストルを見せるこ逃げ出すかと思つたら、逃げ出さなかつた丈、感心だねえ。

女 そんなに、薄情ぢやないわよ。妾の實意だつて、少しは分つたてせう。

男 いやな奴、お前は直ぐそれだからね。だから、此間の話の長襦袢を買へよ云ふのかい。

女 そんなことは云はないわよ。

女 (卓上電話のベル、けたましくなる。女、あわて、受話器を手にする。)

女 はい、はい。はい。え、さうです。

女 何うしたんでせう。

男 まさか、家内が自殺するわけはあるまいし。

女 そんなに、奥さんヒステリイ?

男 だから、自殺するわけはないよ云つてゐるぢやないか。

女 ぢや、そんな心配しなくつたつていゝわ。

男 子供が急病かな。だつて、今朝出て来るときは、ピンピンしてゐたんだからね。

女 妾と遠出をした事を知つて、騒ぎ立てゝゐるのぢやないの。

男 馬鹿云へ。お前さ、箱根へ一週間も行つてゐたさきだつて、何とも云はなかつたぢやないか。

女 さうね。今になつて騒ぎ立てるなんて、可笑しいわねえ。

男 心配だねえ。

女 あなたがお宅のことでそんなに心配すると、わたしいやになるわねえ。

(電話の鈴なる。)

男 (受話器を取り上げて)、はい。はい。あゝ小石川の五千八百十五番かい。お前は、よしかい。俺だよ。奥さんはゐる。うも。……

女 奥さんは、ピン／＼してゐるのでせう。

男 うも、俺だよ。……何を……馬鹿なこと……何でもないよ。うも、うも、馬鹿だねえ、お前は。ち

男 さうしたんだい。

女 (受話器から口を放し)東京から電話らしいのよ。

男 茲へ来るよ云ふこと話したのかい。

女 梶村丈へは、さう云つて置いたのよ。……(受話器へ)え、さうです。妾です。お八重さんですか。あゝさうです

か。へえーさうですか。へえ、まあ。……何か起つたのでせうか、へえ、さうですか。え、一寸待つて下さい。

男 何うしたんだい。

女 あなた大變よ。あなたのお宅で、何か事件が起つたのですつて。

男 何だつて。

女 お宅から、梶村や妾の家へ幾度も、電話がかゝつて來たんですつて。

男 (着くなる。さう、一寸お貸し。)(受話器を受取る)お八重さんか、僕だよ。うも、うも。……何が起つたか分らないかい。……うも、うも……困つたな、人を先方へ寄越すつて、……うも。……ぢや、兎に角此方から電話をかけるから。……

女 (受話器を置く)心配だな。さうしたんだらう。

女 それ御覽なさい。お宅の事ださ、随分心配するのね。

男 (だまつて受話器を取りあげる)もしもし記録ねがひます。小石川の五千八百十五番です。はい。至急で。

えつ……そんな馬鹿なこと。馬鹿! 馬鹿! え、しよりのない奴だね。……横山や、南に頼んだつて、馬鹿! 何うしてそんな……いたづら書ぢやないか。ピストル……馬鹿だね、そんな、軽々しいことをする奴があるものか、……

女 あなた何うしたの。……

男 (無言で女を、押しつけながら)。困まるな、南は出發したんだつて、俺の耻を曝すのだな。馬鹿! え、仕様のない奴だ! 歸るさも。馬鹿なつ、そんな、馬鹿!

(受話器を荒々しく置く。)

女 何うしたのさ、あなた。

男 え、仕様のない奴だ。家内の奴!

女 何うしたのさ。

男 泣きたくなるね。あゝ何、うせう。

女 あなた、何うしたの、一寸あなた。

男 あゝ仕様がな。あいつ、俺達が心中すると思つてゐるんだよ。

女 何うして。

男 俺が、この遺言状をかいた封筒を、一枚かき損じた奴を、机の上に忘れて來たんだよ。

女 それを、奥さんが、御覽になつたの。それぢや心配する

のが當り前だわ。

男 それで、駭いてピストルのは入つてゐる戸棚を見たんだ
 さ。するさ、ピストルがないだらう。家内の奴すつかり
 信じ切つて、今もオロ／＼聲で電話へかゝつてゐるんだ。
 女 まあ！ 奥さんの方が、スツカリ狂言にのつちやつたの
 ね。あなた、つまらないことをするからよ。
 男 いやだな、それに、南や、横山へ知らせたんだつて。南
 の奴、此方へ来るさ云つて、もう東京驛を發つた時分だら
 うつて。あゝいやだ。／＼。
 女 まあ、ほんごうに大變なこゝになつたわねえ。あなた
 が、そんな書き損じなんか捨て、置くからよ。
 男 家内の奴が、それを見ようこは、夢にも思つてゐなかつ
 たんだからね。
 女 奥さまも、そゝつかしやねえ。そんなに、人を騒がす前
 に、もつとごお考へになればいゝのよ。
 (男) しばらく無言。
 男 仕方がない。南が來れば、よく事情を話すんだ。だが、
 あんまり馬鹿々々しくつて人に話せないことだからな。狂
 言に遺書をかいたことも云へないしね。
 女 人に笑はれちやうわね。
 男 仕様のない奴だ。家内の奴。
 女 奥さんなんて云うものは、もつと落着いてゐるものよ。
 (男、しばらく無言、考へ込む。…間…。)

乳

人物
 おくら 漁夫の妻。四十に近し。
 おます その子供達
 小幡 ある富豪の召使の女、年三十位。
 伊作 同じ富豪の別荘番。三十五六。
 近藤 村の醫師。
 時 代
 今日
 場所 湘南のある漁村。
 情景 六疊と三疊の貧しき漁夫の家、表から一番奥にある便
 所までが一日に見られる。左側は土間、延繩の籠、その
 他漁具が並べてある。軒近く、蝦網が乾してある。六疊
 の真中に、生れて三四ヶ月の赤兒を寝かしてある。九つ

女 でも、そんなに本氣に騒がれたら、うれしくてせう。や
 つぱり、奥さんの方が、實意があると思ふてせう。
 男 馬鹿な。
 女 奥さんの方は、たしかに及第だわね。
 男 馬鹿を云へ／＼。
 女 さうだわ。たしかに。
 (男立ち上つて女を離れ縁側に出て海を眺める。)
 女 オロ／＼聲で、電話にかゝつた奥さんが、いさしかつた
 てせう。やつぱり、さうよ。本當にあなたの事を思つてあ
 るのは、奥さんよ。妾は、さうせ藝妓ですもの。南さん
 が、來ない中に、歸りませうよ。こんな所にあて、心中を
 するさても思はれたら、馬鹿々々しいわ。
 (男無言、ぢつと海を眺めてゐる。女中、お銚子を持つ
 て上つて來る。)
 女中 はい！ お銚子。
 (不思議さうに、二人を見る。)
 女 (や、險しく) 其處へ置いて下さい……
 女中 はい。
 (匆々として去る。)
 女 ねえ、あなた歸りませうよ。奥さんのことを思つてゐる
 人と一緒にゐたつてつまらないわ。
 (男。欄干にもたれて無言。)

と十二三の男の子が、守をして居る。おくら、銚と水眼
 鏡と魚籠とを持って歸つて來る。
 おくら おつかあ、歸つて來たからな、わりや達山へ行つて、
 枯木を拾つて來い。道草せいで、さつさつと歸つて來るだ
 ぞ。
 子供達 ちつたあ、されたかのう。
 (母の持つて來た魚籠をのぞかんとする)
 おくら 何を生意氣云ふだ。こんな水の悪い日には、何がこ
 れるか。早う、山へ行つて來い。
 (子供不承無承に出て行く。寝てゐる赤兒、急に泣き出
 す。急いで、抱き上げて乳を飲ませる)
 おくら なになくだ。おつか、歸つて來たぞ。ほう、おつば
 いやるだ。
 (近所の女、おますは入つて來る。五十近き背の高き女)
 おます ごうだ。ちつたあ、あんばいがえ、かのう。
 おくら よくねえだ。昨日よりも、頭がカツカツしてゐる。

おます お医者さまに見せたかのう。
 おくら 見せたゞよ。四五日したら、よくなるか〜と思ふて放つて置いたが、癒らんからのう。

おます 山野さんにかい。

おくら いゝえ。さうぢやねえ、山野さんは、一にも二にも金ぢやから、おら達のやうな貧乏人には齒が立たねえだ。秋谷様の傍の近藤さんぢや。

おます うむ。あの書生さんのやうな若い医者か。

おくら おら達には、あれて結構だ。親切てな。毎日来てくれるだ。

おます よう出るお乳だの。

おくら お乳丈は上等飛切だよ。お医者が云はつしやるだ。部屋を締切つて、湯氣を立て、やれさな。そんなこと、おら達に出来るものか。第一締切るやうな部屋がありやしない。

おます な、おくらさ。古いことを訊くだが、おぬしな、新坊やおきん坊がな、小さい時にも、乳母に行つたことがあるだな。

おくら うむ。あるだ。横濱へも出たゞよ、鎌倉の出田さんへも行つただよ。

おます そのごき子供は、何うしたゞ。

おくら 子供かい、子供は、米の粉で育てたよ。

乳母が見つかるまで、行つておくれでないか。

おくら 行きたくねえことねえだが、何分、赤があんばいご悪いてな。

おます そりや分つてるだ。だがな、伊作の云ふにはな、お嬢さまのお命にかゝる事だから、金に絲目はつけん云ふてるだ。来てさへくれ、ば、前金で百兩でも二百兩でも出す云ふころぞ。

おくら (眼の色がかわる)百兩でも二百兩でも出す云ふんかい。

おます そんなに、驚かんでもえゝだ。別荘の人達の百兩二百兩は、おら達の一兩二兩にも當らねえだ。

おくら (決然として)百五十兩前金で呉れ、ば、おら行てやるだ。

おます (相恰を崩して)そら、本當かい。

おくら 本當だとも。百兩百五十兩と云ふと、おら咽喉から手が出るだ。おら家新田の忠右衛門から、舟や網を抵當に去年の暮八十兩借りてるだ。それで、家の夫は、海へ出られねえて、道普請の土工へ出てゐるだ。百五十兩なら行つてやるだとも。

おます それやおらも来た甲斐があつたゞ、伊作もさんなに歡ぶか知らねえだ。ぢや、歸つて伊作と相談するからな。そして一刻するご一緒に来るから。

おます な、おくらさん。物は、相談だがな、ほら、正兵衛

さん所の伊作さんが、鎌倉へ出て別荘番してゐるだらう。

おくら うむ。うす〜聞いてらあ。

おます 梅澤さんと云ふて、それは偉いお金持だぞナ、その梅澤さんの若奥様がな、この春から赤ちやんを連れて、来てゐたんだがな。その赤ちやんが、えいりりようこか云ふ病氣で、もう今日明日も分らんてな。

おくら (氣がな〜)うむ、さうか。

おます その病氣の因と云ふのが、若奥様のおつばいが出なくなつたんだよ。それでな、お金に委して、乳母を探してゐるんだが、乳母が拂底で、東京にもねえと云ふんだよ。

おくら うむさうかな。

おます それてな。お嬢さまの命を助けるには、何うしても乳母を見つけにやらねえと云ふだよ。

おくら なるほごな。

おます それてな、長い事と云はん、一月でもえゝから、他に人が見つかるまで、来てくれる人はないか云ふて、伊作が村へ来てゐるだがな。この村で、今おつばいの出てゐるのは、お前と作次郎の女房とたつた二人だよ。だが、作次郎の女房はな、作次郎に悪い病があるよつて、はなから駄目だ云ふだ。残る所は、お前一人なんだがな。さうだ、お前赤は、おらが育て、やるからな、十日か二十日か、後の

おくら うん、待つてゐるだ。

(おます去る。おくら、乳を飲まして、赤ん坊を下へ置き、臺所へ行き、仕事を始める。醫師近藤来る。背廣を着たまだ三十に手のとまかない青年)

近藤 さうだい、あんばいは何うだい。

おくら 何だか知らねえが、今日はちつたあカツ〜してゐるやうだ。

近藤 わしが云つた手當はしてやつたかな。湯氣を立て、もつこ部屋を温くしてやらなければ、いけないぢやないか。

おくら (笑つて)そんな事、おら達の家ぢや出来ねえだ。こんな吹きさらしの家ぢや、温くなりつこはねえだ。それに、火を起す炭なんかありやしない。御飯は、みんな山の枯木で焚いてるからな。

近藤 (赤ん坊に、近寄つて診断しながら)おい〜、あんなに云つたのに、濕布を何うしてしないんだ。困るな、一寸手當が悪いと直ぐ肺炎になつてしまふんだ。こんな小さい裡に、肺炎になるご、助りつこはないからな。一生懸命に看病してやらなきや。

おくら おらだつて、附ききりに附いてゐてやりたいが、海へ行つて蛸の二貫目もは、突いて來ないご、明日のお米が出來ないんだ。おらの亭主が、グツてな。亭主の働き丈ぢや、親子五人が喰つて行かれねえだ。

近藤 (聴診器を赤ん坊の胸に當てながら半ば獨白のやうに) ふうも、いけないな。昨日よりも、ズツと廣がつてゐる。毛細氣管支が、すつかりやられてゐる。……もつと、氣をつけてやらないと助からないよ。

おくら てもな、おらが子は、この子で四人だが一人として死んだものはねえ。少し、あんばいが悪くても、直ぐピンピンしてしまふだ。

近藤 そら、輕症の場合は、さうかも知れないが、こうごちらしちやねえ。濕布位してやることは出来ないかナ、こにかく、芥子を一度帖つて見よう。この家に、芥子があるかね。

おくら 芥子！ 芥子位はあるだ。

(おくら、芥子をとりいだす。赤ん坊、先刻から時々思ひ出したやうに泣く)

近藤 あれば、水と交せて茶碗でこかす。

(おくら、その通りにする)

近藤 それを延べる紙はないかな。

(おくら、黄色くなつた紙片を取りいだす)

近藤 汚い紙だな。まあいゝ。

(近藤手際よく、芥子を紙に延べ、赤ん坊の身體に貼つてやる。赤ん坊、しきりに泣く)

近藤 だん／＼ビリ／＼して來るが、辛抱するんだぞ。

も手柄だな。これは、梅澤さんの女中頭の小幡さんぢや。これから、お世話になるんだから、よく御挨拶して置けよ。

おくら おらはな、お乳が出る丈が取柄で、外の事は、何も知らねえだから。

小幡 それで、結構ですよ。此方の赤さんも、お悪いやうです。いけませんね。何時生れたのです。

おくら 去年の十一月ですよ。

小幡 ぢやお嬢さまご丁度同じ月だわね。それで、貴女が來てくれた後は何うするんです。

おくら は……おら達の子は、米の粉や重湯で結構育つだよ。

(近藤、芥子を剥してゐたが、駭いて皆の方を見る)

小幡 やつぱり、生れつきが、丈夫だからですわね。それで、いつから來て下さるてせうかね。三十分でも一時間でも早い方がいゝんですがね。

おくら これの姉が、今磯へ行つてゐるから、歸つたら直ぐ一緒にいきます。明日にでも一度歸らせて貰へるだんべいな。

小幡 お乳の間にさへ合つてくれ、ば、毎日歸つてもいいですよ。わづか一里か一里半の路ですもの。

おくら ぢや、おら一寸家の中を片付けて置くべえ。

近藤 おい／＼おくらさん。お前さん何うするご云ふんだい。

(赤ん坊しきりに泣きつゞける。おくら、乳を飲ませんとす)

近藤 いつ乳を飲ました。

おくら 先刻。

近藤 それぢや、いくら泣いたつて乳を飲ましちや駄目だ。昨日よく云つたぢやないか、四時間隔きに飲ませろご云つて。

おくら だつて時計があるぢやなし、あれからこれへご仕事をしてゐるご、時間のこごなんか分りやしねえだ。

近藤 さうだらう。だが、醫者の指圖も少しは聽いてくれな

いご病氣は癒らないよ。時計がなくなつて、大抵見當が付きさうなものだ。

おくら (口先丈で) あい分つただよ。

(以前のおますが、別荘番の伊作と三十近い女とを連れて來る)

おます おくらさん、伊作さん連れて來たよ。

伊作 お、おくらさん、お久しう。

おくら お、伊作さんか、お久しう。

伊作 おますさんから、聽いたが、お前本當に行つてくれるかね。

おくら あ、行くださも。

伊作 それで、おら大助かりだ。お前を連れて行けば、おら

おくら 乳母に出るだよ。

近藤 乳母に。馬鹿な、自分の子があるぢやないか。

おくら 自分の子に、お乳をやつたんぢや金にならねえだよ。

近藤 金になる、金ならんの問題ぢやない。此の子の命の問題ぢやないか。今お前の乳から離して見たまへ。この子は、二三日も生きてゐないよ。

おくら 先生様、何を云ふだ。長男の新的時だつて、おきんの時だつて、おら自分の子は、重湯で育て、乳母に出た。

近藤 乳母に出れば、その時だつて月二十兩になつたからな。

おくら そらお前、子供が無事に育つてゐる時の事だよ。この子は、肺炎になりかゝつてゐるんだよ。こんなごきに、母親の乳に別れて見る、一たまりもないぢやないか。

おくら だが、先生！ おら百五十兩ご云ふ金が、ほしいだ。その金があれば、綱が質から出せるだよ。一家六人が浮び上るだよ。俺は、この子も可愛いだ。だが、百五十兩あれば、一家が浮び上るだ。おら達の子は、丈夫に生れついてゐるから、風邪位では死なしないだ。重湯飲ませたつて死なしないよ。

近藤 (暗然として言葉なく、赤ん坊の衣服を合せてやる)

(小幡、おますに何か書く)

おます (近藤に)先生、あの方は鎌倉の梅澤さんから、おい

てになつたのです。

近藤 (冷然と)あゝさうですか。

小幡 初めまして。あの鎌倉の梅澤、御存じてございますか、

あの梅澤良一の別荘が、鎌倉にございます。

近藤 あゝさうですか。ホンの此間、開業したばかりで、鎌

倉の容子などは、ちつとも知りません。

小幡 御尤で、それで、一寸お願ひがあるのて、ございます

が、乳母の候補者がございましたら、一度所のお医者様に

診断をしていただくやうに、申しつかつて参つたのでござ

います。こんな、お出先でお願ひするのは、大變失禮でござ

いますが、一寸診断していただく譯には参りますまいか。

(おくらは、家中をあれやこれと片づけゐた後、着物を

着かへてゐる)

近藤 (暫く考へた後)お断りいたしませう。

小幡 (一寸駭いて)まあ。何か、お氣にさわつたことがある

のございますか。

近藤 いや、別に貴女方の態度が氣に觸つたとか觸らないと

か云ふのではありません。たゞ、僕はこんな、むごたらし

い仕事の手傳ひはしたくないんです。

小幡 まあ、むごたらしい、何がむごたらしいのでございま

す。

近藤 僕は、むごたらしいと云ひますね。こゝに寝てゐる赤

ん坊のお乳を、貴女方は、掠つて行くぢやありませんか。

小幡 掠つて行くなんて、人聞がわるい！ ちゃんこ、百五

十圓と云ふ前金で、雇つて行くのでございますよ。

近藤 同じことです。百五十圓と云ふ大金を貧乏人に見せる

るのは、白刃を突きつけるのと同じです。貧乏人は、それ

に目が眩んでごんな怖しいことでもするのです。

伊作 でも、先生別荘のお嬢さんも今日明日と云ふ御病氣で

す。人乳があれば、さうにか持ち直すかも知れないと、博

士が仰しやるのでございますよ。

小幡 ほんごうに、お嬢さまは大旦那さまには、初てのお孫さ

んですよ。ごんな事をして、お命丈は取りさめたいと。

近藤 それだからと云つて、人の子の大事なお乳を取つても

いゝと云ふ譯はない。ごんな金持の娘さんの命だつて、こ

の赤ん坊の命だつて、同じですよ。醫者の眼から見たら同

じですよ。いや誰の目から見ても、同じでなければならな

い筈です。親は、貧乏の苦しさと、承諾はするにしても、

神さまが、——そんなものは無いにして、物の道理が許し

ませんよ。

おくら (片付けを了つて)先生、何云つてゐるだ。おら、よろ

こんで行くだ。

小幡 ありがたう。本當に有がたいわ。お嬢様のお命は、替

るのだ。それもいゝだらう。

(娘の、おきんは入つて来る。小さい鉗と桶とを持つて

ゐる)

おきん お母、こんなでかい蛸取つたぞ。

おくら そんなでかいのが磯に居たのか。

おきん 浅いところにゐたんぢや。

おくら あゝおきん。おつ母は、これから鎌倉へ行つて、明

日歸つてくるからな、赤ん坊を見てゐるんだぞ。

おます おらがな、重湯と牛乳を持って来てやるからな。

そのお金も、ちゃんさいたゞいて置くからな。

おくら さうかい。そりや、ありがたう。そんなにして貰ら

つちや冥利に盡きるだ。

伊作 ぢや、直ぐ行つて貰ひませうか。下らない邪魔が入る

ぞいけないから。

おくら はあ。お伴しますだ。

(みんな立ちかけようとする。近藤先刻から、庭へ下り

てゐる)

おくら あゝさうだ。この兒には、當分お乳がやれないか知

んねえから、お名残りにやつてちよつくら置くだ。なあ、

先生、まだ四時間経たねえが、飲ませてもえゝかな。

近藤 (暗然として)あゝいゝごも。いゝごも。

(おくら、乳を吸はせる。子供泣き止んで吸ふ)

慇がないんだからね。

近藤 今、この子のお乳を持つて行くのは、この子の命を持

つて行つて飲むやうなものだ。そんなことをして、育つて

行つたつて、そのお嬢さんさやらも行末、いゝことは決し

てありませんよ。罪もないこの子を、人身御供にするんだ

から。

伊作 (憤然として)傍から、彼は云はんやうにして下さい。

傍から、ケチを付けるのは、よして下さい。散々尋ねあぐ

ねて、やつと探したんだよ。當人が納得して行くと云ふの

に、大きなお世話ぢやないか。

近藤 君こそ何を云ふ、傍で黙つてゐたのに、君の方で診断

を頼むから、口を出したくなるんだ。こんなひさい不人情

な仕事を僕に手傳へよ云ふから、つい口を出したくなるん

だ。

伊作 ぢや、診断をおねがひすることは、よしませう。その

代り黙つてゐて下さい。鎌倉へ歸れば、博士だつて學士だ

つて思ふまゝに、来て下さるんだ、田舎の……。

近藤 戴醫者か、あはゝゝだがね、この子には、この母親

のお乳の外には、何も持つて生れた物はないんだ。そいつ

を取つて行くんだから、罪は怖しいと云ひたいんだ。まあ、

僕には彼は云ふ權利はないんだ。勝手にしたまへ。そして、

金持の薄弱なヒヨロ／＼した子供丈が、金の力で生き延び

たいね。

第三の聲 そりや怪しいと白眼んだとか、餘程愛校的な理由を付けて居るさ。

第一の聲 こも角吉田と云ふ奴は災難さ、運が悪いんだよ、でもいゝや、俺達はお蔭で此の學校の名物が見られるのだからね。

第二の聲 さうだ。まだ這入つてから一度も見ないんだもの。

第一の聲 何だか胸がドキ／＼するね、幕の開く前に脚光が點いた時のやうな氣持だぜ。

第三の聲 おい呑氣な事を云ふない、人間が一人擲られるんだぜ。

第一の聲 さうかも知れぬが、俺は闘牛を見るやうな氣がする。紂王が虐殺をやつたのは一種の快感があつたからだ。織母が織子を虐めたりするのもさう云ふ興味があるからなんだ。人間が肉體的にある人間を自由にすると云ふ事は一の快感だ。サヂズムと云ふ病的性慾があるのも無理はない。鐵拳制裁もやつぱりさうだよ。

第二の聲 そんな生はよせ／＼、そんな事が聞えやうものなら貴様から先きへ擲られるぜ。

第一の聲 ……………

第二の聲 おや提灯が来るぞ、もう始まるのか知らん。
(五つ六つ提灯が見える、夫を圍んで無数の人がドヤドヤ)

(馬鹿云へ)と云ふ言葉やそれに似た言葉が所々から起つた。すると又一人が前へ出た。)

第二の男 私は殴る事に絶対に賛成します、矢田部君は我々に迄もキリスト教的の罪の觀念を強ひる事は出来ません。私たちが目して罪とするものは本校の精神に對する反逆です、校風に對する汚辱です。此意味に於て私は絶対に罪なしと斷言する事が出来ます、従つて吉田君に對して第一の石を投げる者は私であつてもいゝです、殊に矢田部君に申し上げます。キリストの教の中にも片手が腐つたならば全身を救はんが爲めに切つて捨てること云ふ言葉があるぢやありませんか。吉田君は正に此の腐つた片手です。

(「ヒヤ／＼」と叫ぶものが頗る多い。)

提灯を持った男 矢田部君と村田君とに申し上げますが殴る殴らないは、今論じて居る所ではありません。あゝ云ふ行爲のあつた者を殴るのは本校の内規ですから、たゞその方法丈を伺ひたいのです。

ある聲 我々は各自で殴りたいと思ひます。

提灯を持った男 各自で殴りたい方は手を上げて見て下さい……ハアよろしい……ぢや委員に委せやうと云ふ方は……委員に委せやうと云ふ方が多いと認めます、然し殴りたいと思ふ有志の方は無論殴つてもよろしい。八時になつたらやります、その時は金を鳴らして知らせますから。

ヤとやつて来る。提灯が少し小高い所へ上ると提灯を持つた一人の男が話し出す、第一の聲も第二の聲も第三の聲も黙つてしまふ。提灯の光で人の姿が臙に分る。)

提灯を持った男 今度吉田君に對してかう云ふ制裁に出なければならなくなつたのは、非常に遺憾に思ひますが今こなつては仕方ありません。それで制裁を下す方法及び程度に就て御相談致したいと思ひます。殴るのは我々委員に委せて下さいますか、また寮生全體で殴る事にしませうか。(皆黙つ居る、暫くすると「委員に委せる」と云ふ聲がする。すると群集の裡から前へ進み出た男がある。)

その男 私は殴る事に就て絶対に賛成です(その聲によつて此の男がクリスチャンで首席で雄辯家だと云ふ事が分つたので皆黙つて聞く)キリストは姦通をした女を罰せんとする人々に向つて誰か第一の石を敢て投げ得るぞと曰はれた。私は此の言葉を諸君に考へて貰ひたいと思ふ。元より罪に輕重こそあれ我々の裡に絶対に罪なしと叫び得る者が一人でもありませうか(「アーメン」はよせ／＼と云ふが男ある)私は白狀しますが吉田君に第一の石を投ぐるに堪へません。私は愛と云ふ言葉を考へて戴きたい、人を罪すると云ふ事が愛と云ふ心から出て居なければそれは惡魔的な快感を充たさんとするのではないでせうか。こもかく自分が自分が悪いと思へない心は夫は惡魔の心です。

(提灯を持った男たちが向ふへ去つてしまふと集つた人達もバラ／＼になつてしまふ、するとまた以前の三人の聲が明に聞えて来る。)

第一の聲 矢田部君や村田君と云ふ男は喋る機會を狙つて居るやうだね、何か事が起れば喋らなけりや損だ云つたやうにして喋べるぢやないか。

第二の聲 それに何時だつて慣習的な事ばかり云つて居るぢやないか。

第三の聲 殊に俺はあの矢田部なんかのクリスチャン臭氣が大嫌だ。彼等は何も感激があつて云ふんぢやないんだぜ。彼等は自分が如何にもクリスチャンらしいと云ふ事を何時も廣告して居るぢやないか。彼奴が吉田を助けやうとするのは吉田の爲でなくして、彼奴自身の爲なんだ。人を愛するのは自分を愛せんが爲なんだ。それにも拘はらず人を愛するのを誇つて居るぢやないか。

第三の聲 然し矢田部と云ふ男は眞面目なんだらう。

第一の聲 さうかも知れん。然し眞面目を威張つて居る奴や、他人の眞面目を尊敬して居る奴が嫌なんだ。眞面目と云ふのは、自己を防禦する最良の手段なんだ。眞面目は利己をやる美しい手段なんだ。俺は道德そのものがさうだと思ふのだ。道德ほど最良の利己的手段はないぢやないか、そりや道德は個人にとつては一の徳だらうがその恩

恵を受けもしない他人が之を尊敬するには當らないんだ。不真面目な奴や、不道德家には却つて自己を守つて居ない無邪氣な奴が多いんだ。道德家ほど利己的な人間はないんだ。

第二の聲 馬鹿に憤慨するぢやないか。まあそんな獨斷はよせ。然し鐘を鳴らして知らずなんて全て見世物か何ぞのやうだね。

第三の聲 矢田部の軟論も嫌だが、殴るのに賛成する奴も自分が鐵拳制裁を見たいからだよ。

第一の聲 それに各自で殴りたいと云ふ奴の氣が知れない。吉田に私怨でもあればとも角、てなけりや矢張り人間を一人自由にするに云ふ快感を食りたいからだ。

第三の聲 然し委員委せにするに云ふ奴も冷淡だよ。奴等手を下さないで面白い見せ物を見ようとして居るのだ。

第二の聲 ぢや誰が一番エライのだい。

第一の聲 俺は部屋に残つて勉強して居る山口が一番エライと思ふんだ。彼奴の利己主義は徹底して居るよ。自分以外の事はちつとも考へないんだ。その代り他人の事には絶対に侵^{イソル}入しないからね。俺は他人の生活迄も支配しようとするほど利己的の事はないと思ふんだ。此の意味ぢや山口の利己主義は罪がないよ。自分の生活の規範を他人に迄強ひる奴が一番利己的なんだ。クリスチャンとか勢力家など

奮を感じる奴は居るかね。

第三の聲 なにそりや自分に禁ぜられて居るものを、他人が喰つたから、つまり妬けたのさ。

第一の聲 俺は例へば嫌悪を感じて居る奴が居るとしても、夫は趣味の問題だと思ふんだ。實際に怒つて居る奴は居ないかも知れない。

第二の聲 一體どうして殴るんだらう。

第三の聲 やつぱり内規だからさ。

第一の聲 記念祭を祝ふやうに年中行事の一さ。

第三の聲 然し俺はとも角反對しないさ、面白いもの、こんな事は一寸では見られないよ。

第一の聲 然し俺が吉田であつたら殴られないよ、殴られるよりか寧ろ學校を出るさ。

第二の聲 殴られて居る方が得だよ。

第三の聲 おや鳴つて居るぜ！ 鐘が。何だか悲劇的な氣分だね。

第二の聲 何だか壓迫されるやうだね、ゾク／＼すらあ。
第三の聲 貴様も犯した罪があるんだな。
第二の聲 馬鹿云へ、貴様のやうに銘酒屋を素見して居て、一高のミスターなんて呼ばれやしないぜ。
（鐘が時ならぬ時になるんで皆の心に不安な氣分を湛へる。三人の聲も段々低くなつて聞えなくなつてしまふ。

云ふ奴は大抵さうだよ。

第三の聲 とも角可哀想なのは吉田だよ。みんなから色々に利用されて居るんだね、全て大勢の猫が一疋の鼠を捕へて各自自分が最も利益を得るやうに喰はうとして居るんだからね。實際刑罰と云ふのは夫自身罪惡だね。

第一の聲 殊に死刑なんか特にさうだよ。人間が最も怖れるのは死そのものでなくて死の豫感なんだらう。一年も前から殺されるのが分つて居て見ろ！ たまりやしないぜ。それに比べれば強盗に殺されるのは一番快い死に方だよ。死に云ふことを豫想せずして死に得る位幸福な事はないぢやないか。非業の死を遂げた者によく同情する奴があるが、あれは生者の心を以て死者の心を忖度するのだ、根本に於て間違つて居る。

第二の聲 奴等はよく學校の名譽を汚すなんて云ふが、たゞ吉田が吉原へ通つたと云ふ絶對的の事實よりも、鐵拳制裁をやつて廣告する方がよつぽ名譽を汚す譯だね。

第三の聲 いやその絶對的の事實によつて汚される絶對的名譽と云つたやうなものが、學校にあるんだらうキツト。

第一の聲 ぢやそいつはよつぽ汚されて居るぜ。然しそんな絶對な事は分らないと來るんだ、なんだか變なロジックだね。

第二の聲 然し吉原へ通つたと云ふ事實そのものによつて興

また五、六の提灯が此方へ來る。提灯の光は提灯に取り

捲かれた瘦せた青白い顔を浮び出させる。）

提灯を持った男 之から決議文を讀みますから……（決議文の言葉）舉世滔々文弱に流れ泰西の惡風に感染し學生の徳義地を拂ひたるに當り我が校の先輩相議し寄宿寮を創立してより茲に二十年常に豪健の氣風を誇りに今吉田秀二君の北廓に入るあり我徒は泣いて馬糞を切らんさす。

提灯を持った一人がツカ／＼と進んで行つて「委員太田一郎」と云ひながらボカ／＼と殴る。同じく岡崎仁三郎「またボカ／＼と殴る、その度に瘦せた身體が左右に搖れて居る、八人ばかり殴つたので鼻血がダラダラ流れる、髯の生えた背の高い巨漢が出て來る、永井だ／＼と云ふ聲がする。その男 目醒める／＼。

此男に殴られたので犯人はヒョロ／＼となつて倒れさうになる、吉田はやつと立ち直つて

吉田 僕はいくらでも殴られますがその代りに諸君は一體性慾をどう解決して居られるのです。それを聞きたいのです……。

「何だ生意氣な」と云ふ怒聲に連れて殴り倒されてしまふ。暫くすると吉田を擔いで向ふへ行く。するとまた以前の三人の聲が聞えて來る。

第二の聲 俺は見て居られなかつた。

第三の聲 俺もだ。殊に永井なんて無自覺な奴が目醒めろな
 振つて居る、擧世滔々はいゝね。
 第一の聲 然し吉田と云ふ男も少し芝居氣があるな。
 第二の聲 こも角可哀さうだよ。
 第三の聲 然し一番エライのは吉田かも知れないぜ。
 第一の聲 然しごにかく面白かつたな。
 とうとう三人の聲もきこえなくなつてしまふ。あたりに
 は何も見えなくなり、何も聞えなくなつた。

彼等の希望

(ラヂオドラマ—東京放送局放送用)
 但し舞臺上演を辭せず

い男。かすりの單衣を着てゐる。

鶴田 お早う。

ふじ子 いらつしやい。

鶴田 今日は富士が見えますね。

ふじ子 いゝお天氣ですわ。

鶴田 もうすつかり、もこの静けさに歸つてしまひましたね。

ふじ子 えゝさうよ。五月頃と同じよ。夏來てゐた人は、一人残らず歸つてしまひましたわ。

鶴田 後に残つてゐるのは僕と、二葉屋の二階を借りてゐる娘さんの二人だけですね。

ふじ子 あの娘さんは、日本橋あたりの藝者屋の娘ですつてね。

鶴田 さうだらう、一昨日も藝者らしいイキな女が、二人づれて來てゐた。

ふじ子 あの娘さんも、やはり胸がわるいんてせうか。

村岡
 その妻 ふじ子
 鶴田
 村岡の姉
 刑事

情 景

湖南のある避暑地。九月の中頃。村岡の住宅。海岸に近
 き、平家建の家。はるかに海が見える八疊の間。庭には
 すがれかけた、月見草が雜草にまじつてゐる。ときどき
 浪の音がきこえる。村岡の妻ふじ子、二十四五の女。美
 しけれど色青く淋しさうな顔立。縁側近く出てほとき物
 をしてゐる。

鶴田、庭からはいつて來る。三十を越した會社員らし

鶴田 何だか、そんな容子ですね。……村岡君は、覚えて
らね。どうしました。……

ふじ子 一寸佐竹さんまで行きましたの。

鶴田 佐竹さん云ふのは、あの湯の隣りのお医者ですか。

ふじ子 え。

鶴田 少し、足のわるい人ですね。

ふじ子 え、軍醫で日露戦争のとき、負傷したのです
て。

鶴田 ふん、軍醫でも負傷するところがあるのですか。

ふじ子 さうらしいわね。

鶴田 村岡君はさうです。

ふじ子 このごろ一寸熱が、出ませんの。でも、ちつとも
はかばかしいことはございません。

(ふじ子。立つて臺所へ行き、お茶を淹れて出て来る)

ふじ子 お茶を一つ召し上れ!

鶴田 いやさうも。かう、町全體が、さびしくなつてくる
さ、いよ／＼足しげく此方へお伺ひしたくなりますね。

ふじ子 え、さうぞ。村岡も、あなたが来て下さるので、さ
んなに退屈がまぎれるか分らないと云つてありますの。

鶴田 東京のお姉さんは、まだあつしやるのですか。

ふじ子 今日歸る筈だつたのですが、また一二日延びました
の。

ふじ子 ……………。

鶴田 いや、うそでなく、僕は初からあなたをおなつかしく
思つてゐたのです。

ふじ子 まあ、そんな事をおつしやるさ、わたし何だか耻し
いわ。

鶴田 それで、あれの水色の綿紗の羽織やお召のかすが、
失禮ですがあなたに、びつたり似合ひはしないかと思ふの
です。

ふじ子 まあ!

鶴田 ほんさうに、こんなことを申すのは失禮です。でも、
僕が持つてゐると、全く持ちぐされですからね。ヘヤピン
なんかもべつ／＼に翡翠の玉が、は入つてゐて、さう大し
たものぢやありませんが、奥さまのお氣に入りはしないか
と思つてゐるのです。

ふじ子 氣に入るのに入らないのぢやございませんわ。お耻し
いのですが、着物なんか二三枚持つてゐたものも、大抵賣
拂つてしまつたものですからね。

鶴田 それならなほけつこうですな。有無相通するですよ。
貰つていたゞけるさ、ほんさうにうれいのですがねえ。

ふじ子 ても村岡が、何と申すか分りませんわ。

鶴田 村岡君には、僕が話をつけませう。それとも、村岡君
には内密にして置いてもいゝぢやありませんか。

鶴田 今は、臺所?

ふじ子 え、臺所で洗濯をしてゐますわ。

鶴田 奥さん。この間、一寸申し上げましたがねえ。僕の女
房は、二年前に死んだのですが、女房が残して行つた頭の
物や着物が、まだ少しばかりあるのですがねえ、さうも賣
り拂ふのは何だかすまないやうな氣がするし、それか云
つて持つて廻るのは、邪魔つ氣だし、もし奥さんが何にも
こだはらずに取つて下さるさ、ほんさうに始末がいゝんて
すがねえ。廢れ物が生きるさ云ふわけですがねえ。

ふじ子 まあ。こんでもないことを。

鶴田 いや、さう仰しやられるさ、それぎりですがね。僕の
女房も、丁度あなたと、同じ年頃でしたよ。

ふじ子 まあ。さうでしたか。

鶴田 それに、かう云つちや失禮ですがねえ。背格好も同じ
だし、器量はあなたより、もちろんずつと落ちてゐました
が。

ふじ子 鶴田さんは、お世辭が上手だわ。それだけは、御冗
談でせう。

鶴田 いや全く、器量は比べものになりませんがねえ、顔の
感じだけ、あなたにさかか似て居るのですよ。だから、海
岸であなたを初めて、見かけたとき、つひあんなに馴々し
くお話し、かけたのですよ。

ふじ子 あら、それぢや一生着られませんわ。

鶴田 なるほど、は、は、は。

(二人しばらく)

ふじ子 妾も、着物の一枚もほしいと思つたこともありまし
たわ。でも、今はすつかりあきらめてありますの。

鶴田 いや、お氣の毒です。僕なんか、つひこの間お知り合
になつたばかりですが、てもあなたの立場には、心から同
情してゐますよ。村岡君は、もう二年以上ブラ／＼してゐ
るさ云ふぢやありませんか。

ふじ子 え、二年と云ふより、まる三年に近い位ですわ。

鶴田 ぢや、大抵ぢやございませんね。

ふじ子 この土地へ來ましてからも、もう一年以上になりま
すの。こんな、ジメ／＼した生活は、つく／＼いやになる
ところが、ございますわ。

鶴田 全くです／＼。でも、病氣の良人に、あなたのやうな
美しい女房がなりふりもかまはずにまめ／＼しく仕へてあ
るさ云ふのは、ほんさうにいゝものですな。

ふじ子 ても、みんな運命ですわ。

鶴田 さうばかりも云へませんわ。人間は、自分の考一つ
で、生活を展開することだつて、出來ないことはありませ
んわ。

ふじ子 さうでせうかしら。

ふじ子 ……………。

鶴田 いや、うそでなく、僕は初からあなたをおなつかしく
思つてゐたのです。

ふじ子 まあ、そんな事をおつしやるさ、わたし何だか耻し
いわ。

鶴田 それで、あれの水色の綿紗の羽織やお召のかすが、
失禮ですがあなたに、びつたり似合ひはしないかと思ふの
です。

ふじ子 まあ!

鶴田 ほんさうに、こんなことを申すのは失禮です。でも、
僕が持つてゐると、全く持ちぐされですからね。ヘヤピン
なんかもべつ／＼に翡翠の玉が、は入つてゐて、さう大し
たものぢやありませんが、奥さまのお氣に入りはしないか
と思つてゐるのです。

ふじ子 氣に入るのに入らないのぢやございませんわ。お耻し
いのですが、着物なんか二三枚持つてゐたものも、大抵賣
拂つてしまつたものですからね。

鶴田 それならなほけつこうですな。有無相通するですよ。
貰つていたゞけるさ、ほんさうにうれいのですがねえ。

ふじ子 ても村岡が、何と申すか分りませんわ。

鶴田 村岡君には、僕が話をつけませう。それとも、村岡君
には内密にして置いてもいゝぢやありませんか。

鶴田 まして奥さんなんか、そんなにお美しいのですからね。

ふじ子 すぐそんなことをおつしやるのね。妾鶴田さんきらひだわ。

鶴田 いやあなたが、そんな風に、一寸すねられるときの顔付が、僕の亡くなった女房にそっくりです。

ふじ子 そんなに顔を御覧になるものぢやありませんわ。

鶴田 ねえ、ふじ子さん、僕が手相を一つ見て上げませう。手をお出しなさい。

ふじ子 右の手？ 左の手？

鶴田 女は、右の手です。

ふじ子 汚い手でせう。

鶴田 馴れぬ世帯の水仕事つて、白い美しい手が、あれてゐるのはいいものです。

ふじ子 そんなにお握りになると、いたいわ。

鶴田 いゝぢやありませんか。

ふじ子 早く見て下さい。

鶴田 いや、手相を見るに云ふのは、うそですよ。かうあなたの手を握つて置いて、これを入れてさしあげたかつたのです。

ふじ子 まあ、指輪ですの。いけませんわ。いけませんわ。そんなもの、いたゞくことは出来ませんわ。

鶴田 いゝぢやありませんか。取つてお置きなさい。ダイヤ

だご云つて、ホンのまじないのやうに小さいのですからね。さつてお置きなさい。

ふじ子 ダイヤの指輪なんて、妾まあ。

鶴田 早く。姉さんが来るやうぢやありませんか。

ふじ子 ても。

鶴田 さあ、早く。入れるのがいやなら、しまつてお置きなさい。

ふじ子 (鶴田、無理にふじ子の手に握らせる。)

ふじ子 まあ。(奥の襖があく。村岡の姉、三十五の肥つた女。そこら顔を出す。鶴田を見て目禮する。)

鶴田 またお邪魔してゐます。度々お邪魔します。

村岡の姉 いゝえ。(やゝ皮肉に)

鶴田 村岡君は病院ださうですね。

村岡の姉 えゝ、ふじ子さん、書のおかずは、何か出来てゐるのかしら。

ふじ子 いゝえ。何にも、何か考へますわ。

村岡の姉 もう十一時すぎですよ。

ふじ子 まあ、そんなになりますの。

ふじ子 (遠くの方から地引網を曳くかけ聲が、きこえ始める。)

鶴田 先刻から曳いてゐますよ。もう上る頃かも知れませ

ん。

ふじ子 ぢや、行つて地引の魚を買つて來ますわ。お姉さま、一寸ザルを取つて下さらない。

(村岡の姉ザルを取つて渡す。)

ふじ子 鶴田さん、一寸失禮しますわ。

鶴田 僕も、一しよに行つて買つてあげませう。僕は、あの

漁師達とは、すつかり懇意になつてゐるのですよ。

ふじ子 さうですか。でも、お氣の毒ですわ。

鶴田 なに僕なんか、ブラ／＼遊んでゐるのですもの。

(二人、連れ立つて裏の木戸を出る。村岡玄關の方から歸つて來て、座敷へ出る。縁側につるしてゐる鳥籠をのぞき込む)

村岡 ふじ子、ふじ子。あないのか、姉さん、姉さん。

村岡の姉 (奥から出て來る。お歸りなさい。)

村岡 十姉妹の餌がなくなつてゐますよ。

村岡の姉 まあ、今朝いつばい入れてやつたんだがね。

村岡 ふじ子は、さうしました。

村岡の姉 今地引網の魚を買ふと云つて行きましたよ。

村岡 地引をやつてゐるのですか。なるほど。

(地引網を曳く聲きこえる。)

村岡の姉 ねえ、一寸。

村岡 何です。

村岡の姉 お前はよく夫婦間のことはだまつてゐてくれ、だまつてゐてくれと云ふけれど、今日と云ふ今日は妾はだまつてゐられませんか。

村岡 何がです。

村岡の姉 あの鶴田と云ふ男のことです、それからふじ子の事です。

村岡 ぢや、さうでしたか。

村岡の姉 今も、二人づれて濱へ行つてゐるのですよ。

村岡 だつて、それは地引網の魚を買ふためてせう。

村岡の姉 それは、さうだけぢや、何も二人づれて行くことは

ありませんよ。ひる日中。

村岡 ひる日中だから、いゝのですよ。よる夜中行かれる

さ、一寸困りますがね。

村岡の姉 お前、そんなのんきな事を云うてゐるけれど、妾

はけふたいへんなところを見たのですよ。

村岡 (あまり駭かず) たいへんなところつて、どんな所で

す。

村岡の姉 お前、鶴田と云ふ男が、ふじ子の手を握つて、指

輪を入れてやつてゐるぢやありませんか。

村岡 ぢや、つまり指輪を呉れよう云ふんですな。

村岡の姉 あなたは、何にてもそんなに落ちつき拂つてゐる

から、いやになつてしまふ。かりそめにも、人の女房にそんな高價なものを、くれるなんて、それをまた女の方で、貰ふなんて、それが正しいことせうかしら。

村岡 ……。

村岡の姉 わたし、あの男のことが氣になるので、安心して東京へも歸られないですよ。あなたは、ふじ子にさう云つて断然あの男の出入を、差し止めなければなりませんよ。あなたが、云へない云ふのなら、妾から断つてやりませう。

村岡 でも、姉さん。あの男は、この土地でやつと出来たわれ／＼の唯一人の友達ですからな。

村岡の姉 友達だ、友達だご安心してゐるご、大切な女房まで取られてしまふのですよ。妾は、あの男が、はなから嫌ひです。あの男は、ふじ子がみぢめな生活をしてゐるのに、つけ込んで、物質で誘惑しようとしてゐるのですよ。

村岡 さうせうか。そんな男でせうか。

村岡の姉 てなければ、主人に内緒に指輪なんかくれるもんですか。

村岡 でもあの男はい、家の息子らしいですよ。

村岡の姉 まあ、あなたはごまでおめてたく出来てゐるのせうか。

村岡 は、は、は、は。

村岡の姉 は、は、は、は、やありませんよ。

村岡 でもね、姉さん。ふじ子の身にもなつて考へてやつて下さい。あれは、私のために三年近くひさい苦勞をしてゐますよ。

村岡の姉 そんなことは、女房として當り前です。

村岡 いや、當り前ではありませんよ。二十一の時から、三年近く、よく辛抱してくれたご思ふのですよ。新婚生活の楽しみ云つたら、タツタ三月で、すぐ僕がわづらひ出したのでせう。それ以來はあれにごつて、苦勞ばかりの生活です。何の慰めがありますか、見る物も聞く物も食べる物もない、こんな土地で、よく飽きずに辛抱してくれたご思ふのですよ。あれが、元カフエなんかにあたゞけに、僕は一層あれに感謝してゐるのですよ。

村岡の姉 さう云つて、外の男ご……

村岡 いや、一寸待つて下さい。私は、そんな意味で、藥代でも何でも節約してあれに着物の一枚も買つてやりたいんです。何うかして、少しのよろこびか望みかを與へてやりたいんです。それが、逆立しても自分には出来ないごするご、あれにそんなものを呉れる外の男に、僕は感謝したい位です。

村岡の姉 だつて、お前、それはあの人をたらし込まふごする恐しい悪魔の手です……

村岡 いや、僕はさうは考へないです。ふじ子だつて、自分に親切にしてくれる男があつて、たごひ少しは無理筋でも、品物をくれたりなんかするご、うれしに違ひないんです。この世の中が、少しはあかるくなるに違ひないんです。僕は自分で、あれをこんな暗い、生活の中に入れてゐるのです。外から、はいつて来る光を妨げる権利はありません。

村岡の姉 ぢやお前は、自分の女房が外の男ご親しくなつてもい、ご云ふんですか。

村岡 いや、僕はその點は、ふじ子を信じてゐます。あれは氣の弱い女です。だから、相手が指輪なんかを無理にくれれば、拒めない女です。だが、氣の弱いだけに、僕をさしおいて、外の男ご深入りするやうなごは、絶対に出来ない女です。僕の病氣がわるくなればなるほど、僕を見ずてるごは出来ない女です。

村岡の姉 でも、鶴田ご云ふ男は、何だか油断の出来ない氣がしてね。

村岡 さうせうか。僕はあの男が、い、男であるごを望んでゐるのです。僕が、萬一のごでもあつたら、ふじ子を引き受けてくれるやうな頼もしい男であつてほしいのです。村岡の姉 (感動して) まあ、お前そんなごを考へておるでかね。

村岡 三年近く、ブラ／＼してゐるご、いろ／＼なごを考へます。殊に、ふじ子は身寄のない女ですからね、僕が萬一のごがあつたごき、またカフエなんかを渡り歩かすごを考へると、たまりませんからね。そんな意味であれを愛してくれ、僕の生きてゐる中では、あれのい、お友達であつてくれ、僕が死んだら、あれを引き受けてくれる男がほしいのです。あれは、鶴田君をさう云う男ご思つてゐるかも知れません。だから、この頃元氣が、い、のです。僕も、さう思つてもい、のです。その意味で、鶴田君が、善良な紳士であるごを望んでゐるのです。僕はこの冬は、さうもむづかしさうだからな。

(かるく咳をつゞける)

村岡の姉 佐竹さんが、何かお云ひかね。

村岡 佐竹さんなんかでなく、自分の身體は自分によく分りますよ。

村岡の姉 ……。

村岡 (ふと立ち上りながら) おや、濱邊に何かあつたのかしら。あんなに、人が走しつて行くな。

村岡の姉 地引が上つたのぢやない。

村岡 地引ぢやない。地引なら、あんなに走らない。

(二人しばらく、無口で見つてゐる。ふじ子蒼白になつて、裏木戸から、かけ込んで来て、縁の柱に顔をあて、)

相 似 (A Farce)

人 物

蕎麥屋の主人
 その妻
 出前持の男
 電話を借りに来る老婆
 電話を借りに来る女
 その他数人

舞 臺

郊外のやゝ繁華なる町にある蕎麥屋の内部。右手は床を上げて疊を敷いてある。左手は土間から板の間になり、直ぐ二階へ上る階段がある。階段の右側に電話がある。電話の右側の壁には、幾段もの棚が取り付けてあり、棚には出前の箱、ビール瓶、正宗の小瓶、等が這入つてゐる。疊敷の壁には、「東京蕎麥餛飩商組合」の木札がかけてあり、その左右に、色々なポスター、もりかけ八錢」

の札などが貼りつけてある。奥の方は、側に格子があり眞ん中に暖簾がかけてある。奥で、主人や女房、小女達の働いてゐるのが見える。幕開く。夕暮れ近き頃。客が三人、銘々の位置で蕎麥を喰つてゐる。電話が消魂しく鳴る。少女が電話に掛る。

少女 あ、もしく、いゝえ、違ひます。こちらは七十五番です。(受話器をかける)また大塚の見番と間違つて来た。
 客一 (身づくろひをして襟巻をしながら) おい、勘定。
 主人 どうも有り難う御座います。お銚子は三本でしたね。
 客一 あ、さうだ。
 主人 一圓十錢頂きます。
 客一 ぢやあ、これで取つてくれなにか。(五圓札を出す)
 小女 どうも有り難う御座います。(小女五圓札を受取り、奥へ行つて釣銭を持つて来る)へい、どうも有り難う御座います。
 (客一、去る。間。……小僧が這入つて来る)

小僧 鈴木メリンス店です。親子を二つ大急ぎで。

主人 はい、有り難う御座います。

(小僧去る)

主人 (小女に出前の箱を示しながら) おい出来たよ。

小女 お菓子屋さんですね。

主人 さうだ。

(小女、出前の箱を持つて出て行く。奥から女房が出て来る。二十四五の粹な水々した女。客一の去つた跡を取片附ける)

客二 おかみさん、お幾らです。

女房 三十錢頂きます。

客二 ぢやあこれでお釣を下さいな。

女房 はい、有り難う御座います。五十錢で三十錢のいたゞき。

(主人二十錢を奥から持つて出る。女房それを客に渡す)
 女房 どうも有り難う御座います。

(客二去る。小女歸つて来る。……間……電話けたゞましく鳴る。小女電話に掛る)

小女 あ、もしく、あ、さうです。はいく、ゐらつしやいます。(奥へ向ひ) おかみさん、日本橋のお宅から電話です。

女房 あ、さうかい。(そゞくさと電話へ掛る) あゝ、さう

ですか。あ、さう、あさうですか。えゝ、えゝ、でも……えゝえゝ、さうですね……(奥の主人の方へ向ひ) ねえ、ちよいと。

主人 何だい。

女房 (やゝ云ひ難くさうに) あの、日本橋の家から電話ですがねえ、今大森の姉が来るんですがねえ、久しぶりだから、ちよいとでもいゝから来いといふのですが、行つてはいけないでせうか。

主人 何、大森の姉さんが来てゐる。

女房 えゝ、私もちよいと會ひたいのです。去年の十月から會はないんですもの。

主人 ぢやあ、ちよつとだけなら行つて来てもらい。

女房 さう、うれしいわ、あたし。(生々として電話に向ひ) ぢやあ、あたし行くわ。さうだね、どうしても四十分位はかゝるわ。えゝく、なるべく早く行きますから。ぢやあ後ほど。

(女房電話口を離れて奥へ行く)

客三 ぢやあこゝへ置いて行きますよ。十六錢ですね。

主人 左様で御座います。どうも有り難う御座います。

(客三去る。電話が掛つて来る。小女電話に掛る)

小女 あ、もしく、はいさうです。はい左様で御座いますはい分つてゐます。鴨なんばんを五つと、かけを十一で御

座いますね。え、分りました。鴨なんばんの中で二つがうどん臺ですね。はい、畏まりました。どうも有り難う御座います。(電話口を離れながら) 荒神裏の大森さんで鴨なんばんを五つ、二つがうどん臺、かけが十一。主人 かけは蕎麥かけだね。小女 え。

(女房奥から拵らへをして出て来る。黒縞子の襟のかつた銘仙の着物に對の羽織)

女房 ぢや行つて参ります。

主人 早く歸つて來なきやいけないぜ。

女房 え。

主人 八時頃までには歸つて來られるだらう。

女房 え。

主人 日本橋の姉さんによろしく云つてくれ。

女房 え、ぢや行つて参ります。(いそぐと出かける)

(女房と入れ違ひに、出前持の男歸つて來る。すぐ後から六十位の老婆が遣入つて來る)

老婆 横丁の吉澤ですが、電話をちよつと貸して下さいな。

主人 はい、どうぞお使い下さい。

(老婆電話へかゝる)

老婆 あ、もし、浪花の二千八百三十五番。あ、さうで

す、三十五番ですよ。……(間)……あ、もし、立花屋

さんですか。あ、さうですか、こちらは向島の岡田ですがねえ、あ、さうですよ。おかみさんをちよつと電話口までお呼びになつて下さい。はい、……あ、奥さんですか私です。吉澤ですよ。しばらく御座います。お變り御座いませんか。ねえ奥さん、今ねえ、あちらがいらしつてゐるんですよ。ちよつとでもいからお目にかゝりたいと云つてみらつしやるんですがねえ。何とか御都合していらつしやいませんか。ぜひ、お會ひになりたいとおつしやつてゐるのですよ。はい、……(老婆、店内の容子をザロザロ見る)はい、さうですか。いらつしやいますか。ぢや、お待ち申して居ります。なるべくお早くね。(電話口をはなれる)どうも、ありがたうございます。(去る)

主人 何ういたしまして。

出前持の男 お婆さん、また電話賃を置かないんだね。

主人 あひよきの打ち合せなんかしやがるくせに、電話賃を置きやがらねえ。

出前持の男 そのくせ、註文だつて、十日目に、かけを三つ位ですからね。

主人 全くひき合やしない。……(ふとある不安に囚はれる)

小女 おい、およし

小女 (奥から) はい。

小女 あ、もし、はい、左様でございます。はい、はい、畏りました。(電話を離れる) 杉野さんのお邸で、かけを九つ大急ぎ。

主人 おい、もう何時だ。

小女 八時少し前です。

主人 遅いな、おけいの奴。

(二人連れの學生、遣入つて來る)

小女 いらつしやいませ。

學生一 君。そば?

學生二 おれはうどんだ。

學生一 うどんかけを一つとそばかけを一つ。

小女 はい、かしこまりました。

學生一 三日頃に發表になつて、十五日までに終るかしら。

學生二 もつとかゝるだらう。

學生一 二十日頃になるかな。

(先刻の老婆遣入つて來る)

老婆 すみませんが、もう一度電話を貸して下さいな。

主人 (不承々に) はいどうぞ。

老婆 (戸外へ向ひ) さあ、どうぞ、御遠慮なく、いつも貸して貰つてゐるのですよ。

(二十四五の女、奥さま風、丸鬚に結び、黒襟のかつたお召の着物を着た、いきな女が遣入つて來る)

主人 さつき、日本橋から電話がかゝつて來たときねえ。小女 え。

主人 どんな聲の人が出た?

小女 男だつたかい?

主人 男だつたかい。女だつたかい。

小女 女でした。

主人 うん日本橋の姉さんの聲、お前知つてゐるか。

小女 知りません。

主人 さうか。

(主人ある不安に囚はれる)

主人 おい、吉藏! 日本橋の家は電話の呼び出しは、利か

なかつたかね。

出前持の男 何とか云ふ洋食屋へかければ呼び出してくれる

んですがね。おかみさん丈御存じなんですよ。

主人 うん。(黯然とする)

(……(間)……)

出前持の男 旦那、さつきの電話は、よその奥さんか何んか

をひつぱり出すものですね。

主人 (いよゝ、不安になつて) ふてえことをしてゐやがる。

(此間、一時間ばかりの時間の経過を示すため、舞臺を一

寸暗くする。明るくなると、すっかり夜に入つてゐる。

電話のベルけた、ましく鳴る。小女電話にかゝる)

女 御免下さい。

主人 いらつしやいませ。

女 毎度どうも電話を。こゝへ電話賃を置きます。(五十銭銀貨を冷蔵庫の上へ置く。電話へかゝる) もしもし浪花の二千八百三十五番。さうです、さうです。……もし立花屋ですか。あゝお前は辰吉かい。わたしですよ、あゝさうです。旦那さま、あつしやる。一寸、電話口まで、およびしてくれない。はい／＼：あゝもし、旦那ですか。わたしです。今里へ来てゐるのですよ。姉が久し振りだから一緒に浅草へも行つて御飯を喰べないかと云ふのですよ。えゝ。えゝ。あのう、少しおそくなりましてもいゝでせうか。えゝ九時までにはきつと、かへれますわ。ぢや左様なら。

(主人、電話をきいてゐて、全く不快な表情になつてしまふ)

女 どうも、失禮しました。

主人 (冷蔵庫の上の五十銭を取り上げながら) 一寸お待ち下さい。これをどうぞ、お持ちかへりになつて下さい。

女 いゝえ、どうぞ。受取つて下さい。電話をお借りしたお禮ですが。

主人 いゝえ、私の方は、そばやが商賣ですが、電話をお貸して餘分なお金をいたゞくのは商賣ぢやありませんから。

思へ！ えゝ、ぐづ／＼云はずと直ぐかへれ！ 歸るか！よし。

(受話器を投げつけるやうに置く)

出前持の男 旦那、何うしてさうガミ／＼云ふのです。

主人 何うしたつていゝ、だまつてゐる。

(先刻の老婆、のこ／＼這入て来る)

老婆 上等の天どんを二つ。

主人 なに二つ？

老婆 なるべく上等をね。

主人 お生憎さま、天どんは種切れだよ。

老婆 もう、種切れかい。だから、場末の喰物屋は……

主人 (するどく呪む)

老婆 ぢや、ほかへ行つて、頼みませう。ほんたうに此の家

は商賣を知らない家だ。

主人 勝手にしやがれ！

老婆 えゝ勝手にしますよ。

出前持の男 旦那、海老はありますよ。

主人 うるさい、だまつてゐる！

(出前持の男駭いて、だまつてしまふ。主人のやるせなき焦躁と不安の裡に暮)

學生一 茲へ金を置いておくよ。(學生去る)

女 (主人の劍幕の荒いのに辟易しながら) ぢや五錢丈でも置いて置きますわ。

主人 ぢや二錢、おつりをさしあげませう。

(二錢つりを渡す)

老婆 いやに、堅くるしいことを云ふ人だね。奥さん、今度から向うの自働電話へ行くことにしませうか。

(老婆と女、匆々として去る)

主人 (二人の後を見送りながら) ふてくされ女め……

出前持の男 だが、旦那いゝ女ですわ。

主人 いくら女がよくつたつて、あんな者を女房に持つちや、やり切れない。

出前持の男 だが、全くいゝ女だ。

(電話けたましましくかゝる。小女、電話に出る)

小女 あゝもし／＼、さうです。あゝ、おかみさんですか。

一寸お待ち下さい。(電話をばなれ) 旦那、おかみさんから電話ですよ。

主人 なに！ (血相が少し變る) おい／＼おけいかい。なに、久し振りだから、一緒に御飯をたべるんだつて！

今何處にゐる？ なに、なに、はつきり云へ！ いけない！ 直ぐ歸つて來い。歸らなきや、俺が連れに行くから、さう

地獄のドン・ファン

(Don Juan in Hell)

ドン・ファンは、西班牙の傳説的人物にして、日本の在原業平・世之介の如く女性獵人として知らる。誘惑せんとせし、一女性の父と決闘して、之を斃す。後、その墓像を嘲弄して、却つてその墓像のために斃され、地獄に墮されしと傳へらる。

人物

- ドン・ファン・ド・テノリオ
- 第一の女
- 第二の女
- 第三の女
- 第四の女
- 第五の女
- その他多勢の女

情景

地獄、ほの暗し。しかし、人の姿をおぼるげに認めるこ

とが出来る。往きかふ人影が見える。ドン・ファン、中世の騎士の姿にて、一人の老人と争ひながら出て来る。ドン・ファン劍を抜いて老人に擬す。老人悲鳴をあげて逃げる。

ドン・ファン 地獄へ来ても、顔見知りの奴が多くて困る。

あの老人め、なぜ娘をかどはかしたかと云つて、俺に喰つてかゝりやがつた！ ラヴダンのモレオ伯爵だとか云つたが、あいつの娘は一體どんな女だつたらう。背の馬鹿に高い脚女だつたかしら。どうも、一々覚えておられねえや。

(ドン・ファン、道端の石に腰をおろす。と、一人の小娘息を切らしながら出て来る)

第一の女 まあ、ドン・ファン様。ドン・ファン様。

ドン・ファン どなたです。

第一の女 まあ、お見忘れになりました？ わたし、モレオ伯爵の娘のアンナですわ。

ドン・ファン (見忘れてゐるのを、ごまかすやうに) やあ貴女でしたか。僕は、もつと背がお高いやうに記憶してゐ

ました。

第一の女 まあ、わたし貴君にお目にかゝつたのは、十七ですもの。それから、直ぐ此方へ参りましたのですから、背が高くなる筈はありませんわ。

ドン・ファン なるほど、さうでした。たしかにさうでした。

第一の女 今、父がたいへん御無禮をいたしましたさうで。

ドン・ファン お父さまは、誤解してゐらつしやるのです。

第一の女 ほんたうに、さうですわ。妾が、ほんたうに貴君を、お慕ひ申してゐると云ふことを信じてないのです。また貴君がほんたうに妾を愛して下さつたと云ふことを知らないのです。

ドン・ファン さうですか。さうですか。とかく僕はいろいろの人から誤解を受けるのです。

第一の女 ほんたうですわ。貴君のやうなおやさしい方を。ドン・ファン (少しれて) あまり、さうでもありませんが、でも決して貴婦人に對して不實なことなどをした覚えはありませんよ。

第一の女 ほんたうに、さうですわ。貴君はたしかに妾を愛して下さいましたわ。

ドン・ファン 愛しましたとも。愛しましたとも。

第一の女 だから、妾貴君がいらつしやるのを十年もお待ちしてゐたのですわ。

ドン・ファン それはまたなぜですか。

第一の女 それは、この地獄から脱け出す道があるのです。

それは、本當に愛し合つた男女が、手を取り合つて行けばいつだつて、天國の門は開かれるのです。でも、それは本當に愛し合つた男女でなければいけないのです。生涯一番深く愛し合つた人同志でなければいけないのです。妾は、あなたを誰よりも一番深く愛しましたわ。誰よりも、と云つて妾、貴君以外の誰をも愛したことはないのです。それに、貴君もきつと妾を一番深く愛して下さつたに違ひありませんわねえ。ドン・ファンさま、あなたはあの時、たしかさう仰しやいましたわねえ『貴女は僕の最初の戀人で、しかも最後の戀人になるに違ひない』と、ねえ、たしかさう仰しやいましたわねえ。妾それを信じてゐます。だから、貴君がいらつしやれば、地獄から解放されると思つて、長く長く楽しみにしてお待ちしましたわ。

ドン・ファン (當惑してしまつて) なるほどさうでしたかなるほど。たしかに、僕はあのときは、(口ごもつてしまふ) たしかにさうでしたわ。

第一の女 あゝいけませんわ。父が、またあんな恐い顔をして、こちらへ來ますわ。あなたに御迷惑をかけるといけな

いから、一寸遠のいてゐますわ。すぐ來ますことよ。

ドン・ファン どうぞ。

ドン・ファン マルセラ？ どうも思ひ出せないな。なるほど、さう云へば黒シヨールを大事にしてゐる女がゐるが、あれはカミラと云ふ男爵夫人ぢやなかつたかな。……あゝさう、やつと思ひ出した。俺はあの頃、マルセラと云ふ犬を飼つてゐた。してみると、その名前はあの女を記念するために、付けたかも知れないな。ぢや、俺はあの女を相當愛してゐたかも知れないぞ。

(十五六の白いエプロンをかけた田舎の少女駆け出して来る)

第三の女 あゝ貴君！

(いきなりドン・ファンにすがりつく)

ドン・ファン よして下さい。人違ひぢやありませんか。

第三の女 いゝえ、貴君に違ひないわ。わたしの凡てを捧げ

た方ですもの。貴君を見忘れるわけはないわ。

ドン・ファン (不安な色を浮べながら) ぢや、一體貴女は誰に話しかけてゐるおつもりですか。

第三の女 わたし、お名前なんか知らないわ。だつて、わたしは牛飼ひの娘ですもの。

ドン・ファン 私は、そんな方にお近付はないつもりですが。

第三の女 あら、あんなことをおつしやつて。ほら、あなたがモレナの山の麓のお城にゐらしたことがございませう。

ムつてゐて……。
ドン・ファン はね橋と云つても、太平の御世だもの、夜も晝もかゝりきりだつたな。
第三の女 あの朝は、ほんたうに霧のふかい朝だつたわ。わたし、よく覚えてゐるわ。モレナ連山にはすつかり、霧がかゝつてゐたわ。うちの牧場の牛が、朝ぎりの中からほこり／＼と出て来たわ。
ドン・ファン どの朝の事だ。
第三の女 まあ、お忘れっぽい方。……あなたが、わたしにいきなり接吻をなすつた朝のことよ。
ドン・ファン (少しあわてながら) あゝなるほど、あの朝のことか。
第三の女 あなたは、あのはね橋によりかゝつてゐらしたのだわ。黒い長い／＼上衣を着てゐらしたわ。今よりももつと／＼お目が青かつたわ。そして、お顔が白かつたわ。お髻なんか一本だつて生きてゐなかつたわ。
(ドン・ファン、無精髻の生えた頬を撫でる)

第三の女 妾は、あなたのお姿を見ると、立ちすくんでしまつたわ。だつて、だつて、あんまり嬉しかつたんですもの。
ドン・ファン (女の顔を探ぐるやうに見ながら) だつて、あのときが初めて會つたと云ふわけではなかつたぢやないか。

ドン・ファン (やつと思ひ出したやうに) あゝありました。彼處で、一夏過したことがある。もう、七八年昔のことだ。

第三の女 あのとき、毎朝お城へ牛乳を運んだのは、わたしですわ。大きい牛乳の罐を力一杯右の手に抱へて……。

ドン・ファン そんなことがあつたかな。

第三の女 まあ、あんなことを云つてゐらつしやるわ。わたしは、牛乳を運ぶついでに、御逗留になつてゐる若い騎士

さまにと云つて、牧場に咲いたスウキトピイだの、パンジ

イだの、石竹だの、いろ／＼な花を、毎朝お届けしてあげ

たわ。

ドン・ファン あゝ、思ひ出した。あのモレナの楡の木の下

山ある城だ……。

第三の女 思ひ出して下さつたの、うれしいわ。ほら。お城

の北の隅に聖母さまの御堂があつて……。

ドン・ファン 御堂の前に噴水があつたつて……。

第三の女 (夢みるやうな物なつかしげな眸をしながら) え

え、さうなの。そこから、鈴かけの樹の並木がつゞいて

……。

ドン・ファン その並木を行くと、城の裏門へ出るのだつた

が……。

第三の女 えゝさうなの。すると、お城の濠に、はね橋がか

第三の女 えゝさう。でも、初めて會つたと云つても、同じだわ。だつて、あの前はあなたは、お城の高い窓から二三度

聲をかけて下さつただけですもの。

ドン・ファン なるほど、さうだつた。

第三の女 あなたは、あのとき妾が近づくとそれは／＼おや

さしい目でみて下さつたわ。そして、『お嬢さまお早う』と

云つて下さつたわ。わたし、あなたにお嬢さまと呼ばれた

嬉しんで、心臓が破裂し／＼に躍つたのよ。

ドン・ファン すると、お前も『お早う、殿さま』と云つて

くれたね。

第三の女 あら、わたしそんなこと申しませんわ。妾、はづ

かしくて、顔をかくしてしまつたんですもの。すると、あ

なたのお手がいきなり、わたしの両肩にかゝつて、私の顔

をムリに仰向けさせると、あなたはいきなり妾に接吻をな

すつたんだわ。

ドン・ファン わたしは、いきなりそんな亂暴な接吻なんか

しやしない！

第三の女 あら、なすつたわ。そして、お前の唇はお前の牛

乳のやうにあまい味がすると、おつしやつたわ。

(娘耻しがつて顔をかくしてしまふ。ドン・ファン苦笑する)

第三の女 あなたは、それから三日ばかり、毎朝あの橋のと

ころにゐらしたわ。六時前で、あのプラタヌスの並木に

は、きつと朝露がかゝつてゐたのよ。
ドン・ファン さうだつたか。お前は一々そんなによく覚えてゐるのか。

第三の女 覚えてゐますとも。わたしにとつては、一生忘れられないことですよ。

ドン・ファン (憂鬱な顔をして、だまつてしまふ)：。

第三の女 丁度、三日目だつたわ。あなたは、わたしに接吻なすつた後で、かうおつしやつたわ。俺は、セビラに許嫁の娘があるんだよ。伯爵の娘で、ミコミモナと云ふんだよ。だが、そんな貴族の馬鹿娘よりか、お前の方が十倍位可愛だよ、とおつしやつたわ。

ドン・ファン ミコミモナか、あいつは馬鹿娘に違ひない。おれはあいつの下品な二段鼻がどうしても氣に入らなかつたんだ。

第三の女 さうでせう。さうでせう。貴君は、嘘なんかおつしやる方でないわ。だからわたし、わたしの凡てを捧げる氣になつてしまつたの。

ドン・ファン たいていの若い娘は、そんなに意志薄弱なのだ。そして何か事が起きると、それをみんな俺のせゐにしてしまふんだからな。

第三の女 あら、わたし浮氣ものぢやないわ。わたしのたつた十八の短い生涯で、愛した方はあなたお一人だわ。

第三の女 でも、わたし後悔しなかつたわ。あなたさへ、あつしやれば、茲を連れ出してくれるに違ひないと思つてゐたの。だつて本當に愛した二人が手をとつて行けばいっだつて、天國の門が開かれるのですもの。わたしあなたの顔をさつき、見つけたとき、胸が張りさけるやうにうれしかつたわ。だつて、丁度八年目ですもの。

ドン・ファン そんなにこの地獄は苦しいのか。

第三の女 だつて、日に一度宛は、責苦の劫火に焼かれるんですもの、苦しいツたらないわ。

ドン・ファン さうか、そいつはいけない。ぢや、俺も早速逃げ出さなくつちや。

第三の女 貴君なんか、わけはないことよ。わたしと、手を引き合つてさへあつしやれば、それでいゝのですものね。ね、さうなのよ。あなたは、あれからだつて、わたし以上に愛した方なんて、一人もないでせう。ねえ、ねえ!

(ドン・ファンの手を取らうとする)

ドン・ファン まあ一寸待つてくれ。さうは、簡單には行かないんだ。

第三の女 なぜ。だつて貴君はミコミモナ姫よりわたしの方を十倍位愛して下さつたんですもの。あなたが一番愛した女は、わたしにきまつてゐるわ。

第三の女 だつて、わたし身體が小さかつたので、赤ちやんを生むときに、それは／＼ひどい難産をしたの。

ドン・ファン 誰の赤ん坊だ?

第三の女 まあ、あんな涼しい顔をして。もちろんあなたのだわ。

ドン・ファン 俺は、そんなへまな事をした覚えはないんだ。

第三の女 まあ、いやな方! でも、わたしそんなこと、悔んでゐやしないのよ。あなたは、一月ばかりして、ひよいと、いらつしやらなくなつたでせう。それから三月ばかりすると、わたしお腹が大きくなつたことが分つたの。お父さんが、たいへんな立腹だつたの。でも、わたしうれしかつたわ。あなたの赤ちやんですもの。わたし、お父さんにどんなにいちめられても、あなたに似た赤ちやんを立派に生んで、あなたの處へ『まあ、御覽なさいよ。あなたにそつくりよ』と、云つて見せに行きたかつたの。でも、いけなかつたわ。ひどい難産ですもの、わたし一晝夜ばかり苦しんで、こちらへ來ちやつたの。(涙ぐむ)

ドン・ファン (さすがに憐憫の情を催したらしく) それはいけなかつたね。可哀想に。

ドン・ファン 何だ! お前は、そんなに早く此方へ來たのか。

第三の女 だつて、わたし身體が小さかつたので、赤ちやんを生むときに、それは／＼ひどい難産をしたの。

ドン・ファン 誰の赤ん坊だ?

第三の女 まあ、あんな涼しい顔をして。もちろんあなたのだわ。

ドン・ファン 俺は、そんなへまな事をした覚えはないんだ。

第三の女 まあ、いやな方! でも、わたしそんなこと、悔んでゐやしないのよ。あなたは、一月ばかりして、ひよいと、いらつしやらなくなつたでせう。それから三月ばかりすると、わたしお腹が大きくなつたことが分つたの。お父さんが、たいへんな立腹だつたの。でも、わたしうれしかつたわ。あなたの赤ちやんですもの。わたし、お父さんにどんなにいちめられても、あなたに似た赤ちやんを立派に生んで、あなたの處へ『まあ、御覽なさいよ。あなたにそつくりよ』と、云つて見せに行きたかつたの。でも、いけなかつたわ。ひどい難産ですもの、わたし一晝夜ばかり苦しんで、こちらへ來ちやつたの。(涙ぐむ)

ドン・ファン (さすがに憐憫の情を催したらしく) それはいけなかつたね。可哀想に。

ドン・ファン うむ、お前に最初の接吻をしたとき、そんな風に思つたかもしれないが、でも俺はそのあと、何十人と云ふ女性と：。

第三の女 だつて、わたしとは初恋なのでせう?

ドン・ファン 待つてくれ! お前より先にだつて二三人は：。

第三の女 だつて、それはみんな偽りの戀でせう。

ドン・ファン 待つてくれ! 待つてくれ! さう簡単に。第三の女 じれつたいわ。あゝ、いけない! お父さんがこちらへやつて來るわ、貴君が父無し子の父だと分つたら、あなたをどんなひどい目に合はせるか分らないわ。わたし一寸かくれるわ。すぐ來てよ。

(少女小走りに去る)

ドン・ファン こまつちまつたな。俺が戀をした女は、こゝにみんな蒐まつてゐるのかな。一時に、何十人と言ふ奴にとりまかれちやどんな俺だつて、やりきれないぞ。俺は生きてゐたときは、一時に一人の女を扱つてゐればよかつたんだ。多くても、三人より多いときはなかつたぞ。だがこの地獄で、俺が一生に戀をした女が、みんな一時に落ち合つてしまつてゐるなんて困つたな。俺も、早速一番愛してゐた女を、見つけ出して、手際よく茲を逃げ出さなくつちや。

第四の女の聲 ドン・ファン・ド・テノリオ。
ドン・ファン どなたです。

第四の女 (現はれて来る) わたしよ。

ドン・ファン あゝロシナンテ侯爵夫人ですか。

第四の女 丁度、あなたを七年半待つたわ。

ドン・ファン お別れしてそんなになりますかね。

第四の女 だつて、妾の主人が死んでからもう十年よ。

ドン・ファン さうく。わたしが、初てお目にかゝつたとき、貴女は喪服をつけてゐらつしやいましたね。

第四の女 だつて、わたしの喪服姿を、あなたはさんざんほめたぢやないの。この性悪男め！ うまく、おだてるなど思つてゐる内に、わたしは到頭あなたの口車に載せられてあなたを本當に戀するやうになつたのよ。

ドン・ファン 恐れ入ります。

第四の女 でも、わたしあるとき、一寸いやな事があつたの。

ドン・ファン ド・テノリオが、ロシナンテ侯爵家へ出入りするの、あれは侯爵夫人を愛してゐるからではない。ほんたうは娘のドロテア姫を愛してゐるんだつて。侯爵夫人は、うまくだしに使はれてゐるんだつて。わたしの仲のわるいサルドー伯夫人なんて、もつぱら宣傳して歩くのでせう。わたし口惜しかつたわ。

ドン・ファン ドロテア姫！ なるほど、あの方は星のやう

ない！

第四の女 そんなことないわ。わたし、やつぱり、貴君の方を愛してゐたのよ。

ドン・ファン どうですか。

第四の女 あら、ほんたうだわ。

第五の女 (いきなり走り込んで来る) あゝ、ドン・ファン、待つてゐたわ。

ドン・ファン おゝ！ ドロテア姫。

(第四の女、第五の女、お互に顔を見合す)

第四の女 まあ、ドロテアなの。

第五の女 お母さまなの。わたし、ドン・ファンが来るのを待つてゐたのよ。

第四の女 (色を變へ) お前！

第五の女 お母さま、わたしお母さまにすまないと思ふの。でも、大事なことから、白状してしまふわ。ドン・ファンはほんたうは、わたしを愛してゐたのよ。家へ、あんなにせつせと通つて来たのは、わたしを愛してゐたからなのよ。ドン・ファンはいつも、さう云つてゐたのよ。ねえ、ドン・ファン！

第四の女 さう？ ドン・ファン！

第五の女 ねえ、ドン・ファン。ほんたうだわねえ。だから、わたしドン・ファンと一しよに、天國へ行くの。

な美しい眸をしてゐらつしやいましたねえ。

第四の女 そんなに、今でも思つてゐるの。

ドン・ファン 御冗談でせう。たゞ、あなたの御嬢さまだつたので、敬意を持つてゐたのに過ぎないのです。あの方もたしか三年前に……

第四の女 えゝ、さうなの。こちらへ来て居るの。でも、わたし貴君が来るのを楽しみにしてゐたのよ。貴君が来ればこの地獄を脱出することが出来るだらうと思つて。

ドン・ファン だつて、侯爵夫人！ 貴女は、なぜ貴女をお待ちになつてゐたに違ない御主人と手を取り合つて、天國へいらつしやらなかつたのですか。

第四の女 ところが、口惜しいぢやないの。主人は、妾より一足先きに来た女優のベラドンナと、手をとり合つてサツサと、向ふへ行つちやつたのですつて。わたし、口惜しいつたらないのよ。だから、わたし一生懸命に貴君を待つてゐたのよ。

ドン・ファン ぢや、ベラドンナとの噂はほんたうだつたのですか。

第四の女 さうなのよ。口惜しいぢやないの。だから、わたし貴君と一しよに天國へ行つて、主人に見せつけてやらうと思ふの。

ドン・ファン つまり、その御主人の身代りですか、つまら

(ドン・ファンの手をとる)

第四の女 いけない、およしつたら。ドン・ファン、さうなの？ 貴君は、あんなにわたしに誓つたぢやないの。

ドン・ファン (狼狽して) 一寸待つて下さい！ 侯爵夫人わたしは、たしかに貴女を愛してゐました。だがドロテア姫も……

第五の女 わたしの方を、十倍位愛してゐたでせう。

ドン・ファン 一寸、待つて下さい。わたしは、今それを考へてゐるのです。わたしも、誰を一番愛してゐたかを考へ出して、わたしも早く天國へ行きたいのです。でないと、今にとんだ事になりさうです。

第五の女 そんなこと、考へるまでもないぢやないの。わたしに、きまつてゐるわ。おれつたい！

ドン・ファン 一寸、待つて下さい。さう簡単には行かないのです。わたしは、確かに侯爵夫人を……

第四の女 わたしの方を、ほんたうに思つてゐたのでせう。ドン・ファン それが、その——かうつと……

(ドン・ファン考へ込む。この間、第一、第二、第三の女たち、近寄つて問答をきいてゐるうちに、めい／＼しやべり出す)

第一の女 それは妾よ。

第二の女 いゝえ、わたしだわ。

第三の女 いゝえ、それは断然わたしだわ。
 第四の女 ドン・ファンが本當に愛したのはお前さん達のやうな、身分のないものではない。わたしだわ、ロシナンテ侯爵夫人だわ。

第五の女 お母さま、それは違つてよ。わたしだわ。

(多勢の女、いつの間にか寄り集つてある)

第六の女 いゝえ、妾だわねえ。ミコモモナよ。

ドン・ファン おゝ、ミコモモナ姫!

第七の女 いゝえ、わたしだわ。ロザリンド。ほらマドリツ

ドのコーチ家のロザリンドよ。

ドン・ファン おゝ、ロザリンド。あなたの髪の毛は、いつも

金色の光を放つてゐた。

第八の女 いゝえ、わたしだわ。マリアノよ。あなたは、わ

たしのために、わたしの許婚の男と決闘したぢやないの。

ドン・ファン おゝ、マリアノ。わたしは、あなたを愛してゐ

たに違ない。

第八の女 それごらんさい! わたしを一番愛したのだわ

さあ、わたしと手を取り合ひませう。

ドン・ファン 一寸、待つて下さい! その點になると……

第五の女 一番愛したのは、わたしに定まつてゐるわ。

第三の女 いゝえ、それはわたしだわ。わたしは、ドン・ファ

ンの赤ちやんを生んだのですもの。

原 敬

第一幕

人 物

原 健次郎	後の原敬
細 淵重教	塾 生
新 納才介	同
川 邊	同
吉 岡	同
江 刺先生	マリノ塾教師
マ リン 師	

時

明治七年

所

東京麴町區一番町マリノ塾

第九の女 そんなことはめづらしくないわ。

第十の女 ドン・ファン。早くおきめなさい。わたしだと。わ

たし、カミラ。ほら、わたしカミラよ。

ドン・ファン おゝ、カミラ。

第四の女 ドン・ファン。早くわたしだと、おつしやい! て

ないと、今日の苦しい劫火の責苦が始まりさうだ。

ドン・ファン (激しい苦悶の情を表しながら) いけない!

わたしは、貴女方をみんな愛した。あなた方に最初の接吻

をするときは、誰よりもその人を愛してゐたに違ない!

しかし、一生で誰を一番愛したかと云ふことになる……

第一より第十までの女 わたしに、きまつてゐるわ。

更に多勢の女の聲 わたしに、きまつてゐるわ。

ドン・ファン あゝ、いけない……かなしいけれど、一生に

ほんとうに誰を愛したか、永劫の生活にあるたつた一人の

魂の相手を選ぶとなると……あゝかなしい、わたしはそれ

が誰だつたか、わたし自身にも眞實に分らない。

女達 (悲鳴をあげる) あゝ……

(突如、ドン・ファンの背後に凄じい劫火のほのぼが、燃

え上つて来る。ドン・ファンその劫火の中に自ら倒れる

やうに伏す)

——幕——

情 景

舊い旗本屋敷を借りて天主教の塾にしたもの。八疊敷位の座敷に机が二つある。右の方の隅と左の方の隅に。健次郎右の方の隅の机に對して勉強して居る。隣の部屋は六疊、新納才介が机によつて本を讀んでゐる。

原 Je suis le vent du Nord. 私は北の風であら。 J'habite les pays froids, pres du pole. 私は極地の近くの寒い國に住んでゐる。

新納 (原の聲が邪魔になるらしく) えへん。えへん。

原 Dans mon royaume, tout est blanc, 私の王國では凡

て白です。 On ne voit pas d'homme.

新納 えへん、ちえつ!

原 人は人間を見ませぬ。 On voit seulement de durs bl-

and. 人は唯、白熊を見ます。

新納 ちえつ! うるやう!

原 Il n'ya pas d'arbres, il n'ya pas de forets. 木ありま

せん。林ありません。

新納 うるさいな！

原 Il n'ya a pas de plants dans mon royaume,

新納 うるさいな！ 原君、聲を出さなくて讀むことは出来ないのか。

原 君も聲を出して、讀めばいゝぢやないか。

新納 我輩は、聲を出さなくて讀まないと頭には入らないのだ。

原 我輩は、聲を出して讀まないと頭には入らないのだ。

新納 ぢやよし、我輩も聲を出してやる。

(急に大聲で) 起初上帝創造天地。地是空虚混沌淵面黑暗。上帝的靈運行在水面上。上帝說、要有光、就有了光。上帝看光是好的、就把光暗分開了。上帝稱光爲晝、稱暗爲夜。晚上、有早晨、這最頭一日。

原 (前と同じ位大聲で) Il ya de la neige et de la grace partout. Aujourd'hui je reste chez moi. Mais demain je traverserai l'océan. Je voyagerai sur la mer. La neige tombera, tout sera blanc,....

(新納三分ばかり大聲を出しつゝけた後、漸く疲れる)

新納 おい！ お互に馬鹿なことをよして、黙らうぢやないか。

原 君は馬鹿なことと氣がついたら、よし給へ！ 我輩は我

輩の勝手にする。

新納 やい！ 南部の鮭の鼻まがりめ！

原 (冷静に) うふ、薩摩芋の尻尾何を云ふ！

新納 何だ！ 尻尾だと！

原 君なんか芋づるの一人ぢやないか。ヤソの塾になどは入らないで、せめて芋づるでかためた警察の羅卒にでもなつて、棍棒でも振り廻せよ！ 最も君なんか日向だと云ふから芋づるとまでは行くまい。芋づるにくつついてゐる泥か。

新納 何だ！ 朝敵の片われめ！ 貴様なんか御維新のときに、首が飛んでゐて然るべき奴ぢや。今まで首がつかつてゐるのは、薩長政府の慈悲だと知らないか。

原 南部藩がなぜ朝敵か。

新納 朝敵ぢやないか。御維新のとき、東北二十の列藩が、同盟して錦旗に弓を引いたのを忘れたか。貴様は、家老の小悴だと云ふから、親は梟首、貴様だつて、打首は免かれなうぞ。

原 (あくまで冷静に) 奥羽の諸藩が同盟したのは、朝廷に反逆を企てたのぢやないぞ。將軍家は、進んで大政を奉還したのぢやないか。然るに薩長の奸賊は、故なきに陥奔を設けて、戊辰の戦争を挑發したのぢやないか。皇徳は日月の如し、日本國中及ばぬ限はない筈ぢや。それなのに、薩

長の私黨妄りに錦旗を擁して、謹慎を表してゐる奥羽諸藩におしかゝつて來たのぢやないか。これ即ち五條の御誓文にもとり、維新の精神が没却するものぢやないか。奥羽列藩が義に依つて、白川に盟約し會津征伐の御中止を朝廷に嘆願したのが、何の罪になるか。何の反逆になるか。

新納 何だ！ 貴様、薩長の奸賊と云つたな。勤王の大義を振りかざし、一意王事に邁進した薩長がなぜ奸賊だ。

原 さう單純に、物を見るな。勤王の美名にかくれ、あはよくば將軍家に取つてかはらうとしたのは薩長の野心ぢやないか。

新納 (議論に壓倒された形で) 何だこの野郎！
(新納掴みかゝる。原、これに應ずる。先刻から部屋へは入つて來てゐて、議論の後半を立ち聞きしてゐた細淵飛び込んで止める)

細淵 よしたまへ！ 腕力に訴へるのは、よし給へ。

新納 この野郎、その根性まがりの癒るほどぶちのめしてやりたいな。

原 (冷笑して無言) ……

新納 南部の鮭め、今にその頸に繩を通して、荒物屋の店先につり下げてやるぞ。あゝ、ムシヤクシヤする、散歩に行つて來よう。
(新納出かける)

細淵 先刻から、聞いてゐて痛快だつたよ。

原 あはゝゝゝ。

細淵 原君、今まで實はかくしてゐたが、我輩は舊幕臣なのだ。

原 なるほど。さうか。

細淵 わが輩は、君以上薩長の奴に反感を持つてゐるよ。

原 無論さうだらう。

細淵 以前、わが輩は、横須賀造船所附屬の學校には入つたことを話しただらう。

原 うむ、きいた。

細淵 その學校をなぜ退學したかと云ふ話はしなかつただらう。

原 なぜ、官費の學校をよしたのか、不審に思つてゐたのだ。

細淵 ところが、あの學校の生徒は殆ど薩長の子弟で、徳川方の出身は僕達三人だけなのだ。

原 うむ。

細淵 ある日、同級の奴等が、僕達の方を見て「賊が來た。賊が來た」と云ふんだ。僕等は、泥棒でも來たのかと思つて、後を振り返ると、さうぢやないんだ。彼等は、今尙僕達を賊軍扱ひにしてゐるのだつた。あんまり、心外だつたものだから、三人連袂して、その日限りよして來たんだ。

原 (感動して) さうか、わが輩も同じやうな話があるんだ。わが輩は實は茲へ来るまでに、海軍兵學校の試験を受けたのだ。わが將來の日本に取つて、一番大切な仕事をしたと思つたのだ。それには、この島國日本は海軍に依つて國を守らなければならぬし、海軍に依つて國を擴めなければならぬと思つて、海軍兵學校に志願したのだ。

細淵 なるほど。
原 すると、入學試験は四書と史記から出たのだ。それに簡單な四則の算術だ。わが輩は數學が得意で、五問題とも、みんな出來たんだ。漢文だつて、わが輩は自慢でないが、お手のものなのだ。兩方とも九十五點は取れたつもりなのだ。

細淵 それぢや、第一席で及第したぢやう。
原 ところが、さうぢやないんだ。落第なのだ。
細淵 けしからん。

原 後で、入學者の族籍氏名を見たら、薩人が十六人、長州人七人、佐賀三人、藝州が二人、土佐が二人、東北は一人もゐないんだ。わが輩は、こんなに心外に思つたことはない。

細淵 けしからん。言語道斷だ。

原 入學試験は形式だけで、東北人などは一切受けつけないのだ。また、は入つて見たところで、君のやうに賊軍呼ばな。我輩は我輩個人として、力を蓄へることが必要だ。さう思つて、このマリン塾には入つて來たが、豫期に反してフランス語を教へてくれないのは、困つたな。天主實義だの、聖教明徴だの、ヤソの本ばかり讀まされぢや、やり切れないな。

細淵 僕は、牧師になつてもいいと思つてゐるが、君は不満だらう。

原 フランス語を一人で始めたが、どうもうまく行かん。(そのとき、塾内に鈴のひびききこえて、小便が鈴を振りながら歩く)

細淵 あゝ集りだな。
原 また誰か、失策したので、訓戒かな。

(江刺先生出て来る)

原 先生、何の集りです。また、何かお小言ですか。

江刺 いや、さうぢやない。安心してゐてよろしい。原君、いつものやうに、そのの襖を取はらつて呉れないか。

原 はい。

(原立つて、兩方の室の襖を取のぞく、塾生川邊、吉岡、その他ゾロ／＼出て来る)

川邊 江刺先生、またマリン先生が、何か御腹立ですか。

江刺 そんなにいつも、小言ばかり云ひやしない。みんな集つたかな、新納君がゐないぢやないか。

はりをせられて居たゞまねなかつたらう。

細淵 國家の公器を私し、私權私利を計るけしからぬ奴だよ。

原 おかげで、兵學校はダメとなる、國から學費は絶える。仕方がなく心にもない天主教の塾には入つたが、御覽なさい。この寒空に、單衣を三枚重ねてゐる次第ぢや、あは、は、は、は。

細淵 僕は、かう薩長の奴が威張りくさると、ときどき徳川の御世が戀しくなる。

原 さう云ふ考は、極端だ。王政復古はありがたいことなのだ。たゞ、この國民と皇室との間に介在し、私利私慾を計つてゐる藩閥政府を倒しさへすればいいのだ。

細淵 同感!

原 僕は兵學校の入學試験に落第して、初て日本に海軍よりも大事な仕事があることに氣がついたのぢや。

細淵 うむ。

原 それは、國家の公器を、つまり政權をだな、薩長の手からわれわれ人民の手にとり返すことなんだ。これは、海軍の仕事より、二倍も三倍も大事なことだ。

細淵 うむ、うむ。

原 それには、力を養ふことが大事だ。薩長は力を以て、幕府を倒した。われわれ、人民も力を蓄へることが、大事だ。

細淵 先刻散歩に出たやうですよ。

江刺 こんな時間に、散歩に行つちや困るな。皆集つたらマリン師をお呼びして來よう。

(江刺先生走つて行く。塾生達一方の方に集つて行儀よく並ぶ。マリン師出て来る。頸を掩ふ白髯を貯へた白哲の老宣教師。塾生達禮をする)

マリン 皆さんを蒐めたのは別なことでない。私、友達エブラル新瀉で宣教師して傳導してゐます。今度手紙來ましたあちら、佛教盛んです。誰も未だエブラルさんの世話して呉れる人ありません。エブラル大變困ります。私に手紙よこしました。一人學僕欲しい云ひます。いろ／＼な仕事して貰ひたいのです。その代り、フランス語充分教へると云ひます。あなた方の内、誰か行くありませんか。誰か行つて呉れる人ありませんか。私、この相談したいのです。(皆、顔を見合はす)

吉岡 學僕と云ふと、つまり雜役をやるのですな。

マリン 雜役?

吉岡 煮炊、拭掃除、そんなこともやるのですな。

マリン それはさうです。

(塾生達、顔を見合せて言葉なし)

マリン 誰か行つて呉れる人ありませんか。エブラル助ります。私も喜びます。誰か行つてくれる人ありませんか。

(塾生、又顔を見合はせて言葉なし)

吉岡 雑役なんていやだな。

二三人 さうだとも。(マリン、その方を注視する)

原 先生、フランス語は、充分教へていただけでせうか。

マリン それは充分教へてくれます。それに毎日エブラルさんと會話する。きつと、フランス語上手になります。

原 それなら、私、エブラル師の所へ参ります。

(塾生の中に非難のつぶやき起る)

マリン それはありがたう。私欣びます。私祝福して上げます。こちらへお出てなさい。

(原健次郎前へ進み出て、マリン師の前にうづくまる)

吉岡 馬鹿だな。

川邊 恥知らずだな。

他の一人 いやしくも士族たるものが何だ。

マリン (胸で十字を切りながら) 天にましますわれらの主おん身の忠實なる僕、原健次郎は、エブラル師の聖き勤の手傳ひとして、遠い新潟まで行つてくれます。健次郎の健氣な立派な志と決心の上に、われらの主よ、み恵みを垂れたまへ！ アーメン。

原 ありがたうございます。

マリン 皆さんも、原さんを祝福して上げて下さい。

(皆冷然として一語なし。マリン師一同を見廻した後)

きこえると、お母さんや兄さんの恭さんが、何とお考へになるだらうか。

(健次郎、さすがに暗然とする)

原 先生、先生の御好意はよくわかります。が、僕はもう決心して居ります。

江刺 さうですか。

細淵 今なら、取り消せないことはないぞ。

原 いや、細淵君僕の思ひ通りにさせて呉れ給へ。

細淵 さうか。

吉岡 馬鹿！

川邊 恥知らず。

他の一人 君のやうな奴は早く出て行つてしまつた方がいい。

原 善は、いそげと云ふことがあるから、明朝すぐ出立するつもりだ。

川邊 そんな事が善か。

原 自分の正しいと思ふことは常に善だ。

一同 馬鹿野郎！

江刺先生 まあいゝぢやないか。原君には原君の志があるだ。

原君の思ふ通りにさせた方がいい。

吉岡 だつて士族のつらよごしですもの。

細淵 まあ、いゝぢやないか。半年も一しよにゐた原君が、

マリン 皆さん集り大儀でした。

(マリン師去る。マリン師の去ると共に一同健次郎を取圍む)

吉岡 馬鹿！ 恥知らず。

川邊 いやしくも、武士の家に生れた者が、異人の小使になる奴があるか。

細淵 原君、僕も賛成しないな。君が、フランス語をやりた

い氣持はよくわかるが、まさかその月謝として雑役までやる事は入らんぢやないか。

吉岡 便所の拭掃除までやるつもりか。

川邊 學僕と云へば、つまり奴隷ぢやないか。

原 いや、奴隷ではない。

川邊 いや、奴隷だ。毛唐の命令に唯々諾々として、賤役に

服する者が、奴隷でなくして何だ。

原 いや、奉公人であるかも知れないが、奴隷ではない。

川邊 いやしい奉公人を奴隷と云ふのだ。

一同 さうださうだ。

江刺先生 原さん私は君と同郷で、君の家が南部藩の家老で

近江の浅井長政の血筋を引く名門だと云ふことをよく知つ

てゐる。わたしは君がフランス語を勉強したいと云ふ氣持

はよく分るが、そのために西洋人の書生にまで身を落とす

と云ふことは考へものではないか。さう云ふ事が、御郷里に

今夜ざりて去らうと云ふのぢやないか。まあさう云つたものぢやない。

吉岡 だつて、あんまりシヤクにさはるからな。

川邊 あんまり根性が、いやしいからな。

(そへ新納が散歩から歸つて来る)

新納 何だ！ 何だ！ 諸君、どうしたんだ！

吉岡 お、新納君か。あのね、今原健次郎が、毛唐の奴隷に

なつて、新潟へ行かうと云ふのだ。

新納 ふむ、奴隷にか。あはゝゝゝ(嘲笑する)

川邊 奴隷同様の賤役なんだ。つまり便所の拭掃除までやら

うと云ふのだ。

吉岡 僕等は、こぞつて非難して居るんだ。君も、大にやつ

つけてくれたまへ！

新納 いや。僕は大に賛成だ！

吉岡 なに、君が賛成か？

新納 いや、かう云ふ鼻まがりはね、異人の奴隷にでもなつ

て、うんとどやしつけられるといゝんだよ。俺は大賛成

だ。適材適所だよ。あはゝゝゝ。

一同 あはゝゝ。

吉岡 さう云ふ考へ方もあるな。

新納 根性のいやしい奴は、奴隷になるのが、一番似合つて

ゐるのだ。

原 何とでも云へ！ 名義は、何でもいゝ。奴隷と君達が思ふのなら、思つてもよろしい。僕は何と云はれてもいゝ。フランス語を、一語でもいゝ多く知りたいのだ。自分の身體に力をつけたいのだ。凡てのことは、自分に力をつけてからだだからな。さあ、新潟行のこしらへをしよう。

新納 それよりか、便所の拭掃除の練習に一つ熟の便所も掃除して行つてくれんか。

原 (一寸氣色ばんで新納をにらむ)……

(鐘の音がきこえる)……

新納 口惜しければ、飛びかゝつて来い。

吉岡 よしたまへ。まあ、こんな奴は今宵限り出てくれればせい／＼するのだ。さあ夜の祈禱が始まるから會堂へ行かう。

(皆、何か非難の言葉をつぶやき乍ら去る。細淵一人のこる)

細淵 原君、くやしかつたゞらう。お察しする。

原 有難う。しかし、男子が何か事をやらうとすれば、衆人の非難はかまつてゐられんよ。

細淵 それもさうだ。しかし、君は何となく人の非難を不要に挑發するところがあるよ。そこを氣を付けないと、つまらない災禍に逢ふことがあるかも知れないな。

原 ありがたう。(鐘の音なほつゞく)

細淵 この會堂での最後の夜の祈禱だ。行かうぢやないか。それとも君は、あの連中とまた顔を合はせるのが、いやか。

原 いやな事があるものか。悪いことをしてゐるではなし……

細淵 ぢや行かう。

原 行かう。(二人しづかに歩み去るところで幕)

第二幕

人物

原 敬

五十歳位既に頭髮は雪の如く白く童顔は一種の光澤を持つて輝いてゐる。

山崎 國助

政友會の總務、氣品ある老年の紳士

小崎 幸雄

同じく政友會の總務、眼つぶらに鼻下に美髯を貯へてゐる

高梨 光雄

原敬秘書

野村 老人

政友會院外團

所

政友會本部

時

大正二年二月

情景

大正元年、敬は第二次西園寺内閣の内務大臣だった。大正二年の豫算に陸相上原大將は二個師團増設を計畫し、山縣元帥を初め長閑一派之を支持す。時の藏相山本達雄之に反對す。敬も無論反對である。遂に内閣不統一に陥り、西園寺内閣辭職す。然るに先きに宮中に入りたる桂内大臣は優詔を拜して、妄りに宮中を出で第三次桂内閣を組織した。政友會は憤然之に反對し、國論また之を支持したから桂内閣は遂に瓦解した。所謂大正の大政變である。政友會の小崎幸雄、陣頭に立つて専ら活躍し、山崎國助熱心に小崎を督勵す。敬、元より最高幹部として彼等の活動を督勵した。桂内閣倒れて、元老は山本權兵衛を推薦した。今山本伯は組閣最中である。政友會の總務室である。幕開くと、敬肱がけ椅子に寄り新聞を讀んでゐる。敬の秘書高梨光雄は入つて来る。

高梨 今日はお早いですな。

原敬 うむ。

高梨 新聞の論調は、随分猛烈ぢやありませんか。

原敬 うむ。

高梨 桂内閣を、倒した筆鋒を直ぐ此方へ向けて來たのですな。

原敬 うむ。うむ。

高梨 黨員の中にも、山本伯との妥協に對して、猛烈に反對してゐる者が随分あるやうですな。

原敬 さうだらう。

高梨 山崎さんと小崎さんは、脱黨を賭してまで争ふと云つてゐるさうですな。

原敬 そんな事をきいた。實は、あの二人と、今日茲で會ふ約束をしたのだ。

高梨 さうですか。

原敬 山崎君や小崎君が、もし萬一脱黨でもするとなると、何人位ついて行くとお思ふ。

高梨 二三十人はついて行くのぢやないですか。

原敬 さうかも知れないな。(給仕、名刺を持つて来る。原取り上げて見て)

原敬 忙しいが、五分間位なら、會ふといつてくれ。

高梨 誰ですか。

原敬 院外團の野村老人だよ。

高梨 お會ひにならなくてもいいぢやありませんか。こんな忙しいときに。

原敬 いや、自由黨以來の老人だよ。さうはいかんよ。
(高梨去る。入れ違ひに野村は入つて来る。小軀の精悍らしい老人である)

野村 いつも御壯健でけつこうですな。

原敬 あなたこそ、いつも御丈夫ですな。

野村 閣下。今度、山本權兵衛が、内閣を組織するについて政友會に妥協を申し込んで来たといふ事ですが、本當ですか。

原敬 本當です。

野村 わしは、この際閣下が斷然、さやうな妥協を斥けて、一意政黨内閣の樹立に邁進することを希望します。これは院外團一同の希望です。

原敬 うむ、うむ。

野村 長閥の桂先づ倒れ、薩閥の權兵衛つゞいて、哀を政黨の軍門に乞うてゐるのですから、この際一しよに叩きつけてやるのですな。

原敬 うむ、うむ。

野村 此際、薩長の二大勢力を根本的にやつつけて了ふのですな。我政友會の自由黨以來の根本方針もそこにあるのですからな。閣下一つ御奮闘を願ひます。閣下が此妥協を斥

山崎 今、下で用をして居つた。すぐ来るだらう。

(二人、卓子在中にして腰かける)

山崎 君は、權兵衛なんかと妥協しちやいけないぢやないか。

原敬 なぜ。

山崎 (半分冗談の如く) 君はいつか話したぢやないか。少年時代海軍兵學校の入學試験を受けたが、東北人であるために、充分な點を取りながら落第したと。その恨みのある海軍の親玉と妥協するなんて、怪しからんぢやないか。

原敬 我輩だつて、少年時代の鬱憤をさういつまでも持つてゐやしないよ。あは、あは。

山崎 あは、あは、あは、だが、藩閥官僚を倒して、立憲政治の基礎を固めるのは、これが一番いい機會ぢやないか。われわれとして、今一番本當に考慮すべき時ではないかと思ふのだ。桂には容易に立つべからざる打撃を與へたし、この際山本内閣の鼻を叩きつけてやれば……。

原敬 うむ。然しね、今度の政變で長閥には致命的な大打撃を與へた。わが黨の大勝利だつた。しかし、勝つて兜の緒をしめると云ふことがある。勝つた後の休養と云ふことが大事だ。長閥を破つた後で直ぐ薩閥と戦ふといふことは……。

(小崎は入つて来る。原立ち上つて會釋する)

けて下されば、國民の輿論も政友會を喝采するに違ひありません。

原敬 うむ、うむ。

野村 閣下一つ御奮闘をねがひます。

原敬 まあ一つ考へて置かう。

野村 お考へになることは入りませんな。この際即時斷行して頂きたいですな。

原敬 さうは、いかんよ。西園寺公が隱退せられてから、わが輩が政友會を預つてゐるのだから、一黨の興亡に拘はることは、さう簡單にはやれんよ。

野村 然し閣下、わが黨本來の面目から申しまして。

(給仕は入つて来る)

給仕 山崎さんと小崎さんが、いらつしやいました。直ぐお目にかゝりたいと云つて居られます。

原敬 さうか。野村老人、山崎君と小崎君とが来たよ。二人とも妥協大反對だから、君は後を委して置いてもいい譯だよ。

野村 あは、あは、なるほど。ぢや老人は失禮します。

原敬 さようなら、御機嫌よう。(原、老人を扉のところまで送る。其處では入つて来る山崎と顔を見合せる)

山崎 やあ!

原敬 やあ! 小崎君は?

小崎 やあ。(山崎の横に悠然として腰かける)

原敬 長閥を破つた後で、直ぐ薩閥を相手にすることは、たとへ戦ひに勝つたとしても、わが黨の打撃は可なり大きからうと思ふ。それよりか、この際は山本内閣と妥協することに依つて、退いて勢力を養ふと云ふことが大切だと思ふ。力さへつけて置けば、藩閥も元老も、問題はないからな。何事も一時にやらうとすることはいけないよ。

小崎 だが、原君! 貴下は國民の輿論を喚起して、憲政擁護運動をやつたその手未だ乾かざるに直ぐ藩閥官僚の内閣と妥協することが出来ると思ひますか。(軽く卓子を叩く) それでは、國民に對して公黨として、何の面目があるのです? 憲政擁護の美名の下に、國民の後援を得て、桂内閣を倒しておきながら、直ぐ藩閥官僚の權化たる山本權兵衛と妥協するが如き、全然、國民を賣ると云ふことぢやないですか。(かるく卓を打つ) この際桂内閣を倒した憲政擁護の切先を直ちに山本内閣に、差向けると云ふことが當然な筋道ぢやないですか。昨は長閥と戦ひながら、今は知らぬ顔の半兵衛で薩閥と手を握ると云ふやうな、そんな馬鹿々々しいことが國民の前で、やれると思ひますか。(またかるく卓を叩く)

原敬 わが黨は桂内閣の存在を否認したけれど、山本内閣の出現に反對した行きが、りはないぢやありませんか。國民

に對して面目がないとは、をかしいな。
小崎 驚き入つた議論だ。三百代言的だ。もつと眞面目に話して貰ひたい。

原敬 わが輩は大眞面目です。

小崎 貴下が大眞面目なら、當然山本内閣に反對すべきでないか。

原敬 お言葉ですが、山本内閣に反對して、何うしようと云ふのです。

小崎 無論、山本内閣の出現を壓へて、政黨内閣を組織するのですな。

原敬 政黨内閣と言へば？

小崎 勿論、政友會内閣です。

原敬 西園寺公が隠退された後、政友會中に總理になる人物がありませんか。

小崎 松田君でもよければ、君でもよいではないか。

原敬 君は、本氣でさう云ふのですか。

小崎 勿論。

原敬 君は、あまりに現實を無視する。人間は頭で立つてゐるのではない。足で立つてゐるのだ。君の議論は、頭で立つたうと云ふのではないか。元老が、この際、松田やわが輩を推薦すると思ひますか。松田やわが輩が、上御一人の信頼を得るほど、位置名望があると思ひますか。さすればわ

閣と妥協しなければ官僚はもつと早く亡びたと云ふけれどもさうは行かないよ。今日の議員を率ゐて、官僚と戦ひ解散また解散を受ければ、黨員は何人になると思ふ。官僚を亡す前に、此方が亡んでしまふかもしれないのだ。伊藤公の聲望を以て、政友會を率ゐられた時でさへ、再度の解散を恐れて桂と妥協したではないか。解散を虎よりも怖れる現在の黨員を率ゐて戦争をするには、一度戦つたら退いて休養することが大事なのだ。山本内閣との妥協は、それなのだ。尤も、反對黨も此方と足並を揃へて戦ふとなれば、いく度解散を喰つてもいい。しかしさうは行かない。わが黨が戦へば、反對黨は官僚と妥協するだらう。反對黨は、勢力が弱いから妥協の條件も寛大で官僚に甘い汁を吸はれ、結局は官僚が復活をする機運を作ることになるのだ。わが黨は然らず、官僚と妥協するときにも、必ずその手足を殺ぐことを忘れなかつたのだ。かくして、朝に官僚の一城を取り、夕に一城を陥れ、だんだん官僚を一隅に押しつめて来たではないか。

小崎 其處が、わが輩と貴下の意見が違ふところだ。わが輩は、妥協が貴下の考へるやうなものだとは思はない。政黨が、その黨利を念とし、忌むべき妥協をつゞけた爲めに、日本の憲政は十年以上、その發達が遅れたと思ふ。
原敬 わが輩は、さう思はない。適當なる妥協をしなかつた

が黨がいかに山本内閣に反對すればとて、政權がわが黨に來るべきではない。わが黨が反對すれば、山本は長閑と結んで、同志會と提携するかも知れない。さすれば、半死半生にした長閑を復活させることになり、ひいては同志會の隆盛を來すことになりませんか。それでは、却つて藩閥の勢力を盛り返させることではないか。なるほど、わが黨は憲政擁護の大旗を掲げて桂内閣と戦つた。しかし、山本内閣と妥協するのも、やはり憲政擁護の一つのプロセスなのだ。わが黨の勢力を、地に植ゑる一つの手段なんだ。最も適當な手段だとわが輩は思ふ。

小崎 君は、妥協を手段だと稱して、幾度妥協したと思ふ。君が、桂内閣と數回にわたつて妥協しなければ、長閑はもつと早く亡んでゐるんだ。官僚との妥協は、憲政の發達を阻害するものではないか。

原敬 小崎君、政治は議論ではないよ、現實に即した創造だよ。現實に即して而も現實に囚はれず、現實に新しき組織を與へなければならぬものだ。なるほど、わが輩は桂内閣とも妥協した。しかし、君も御存じの通り、此方から辭を申くうして求めた妥協は一度だつてない。先方から頼んで來た時は此方は自分の政策の根本組織を破壊しない範圍に於て、讓歩してやつたに過ぎないのだ。即ち官僚の政策を自分の組織内に調和したのに過ぎないのだ。君は、桂内

ら、政友會は今日の大をなしてゐないと思ふ。
小崎 政友會は大を爲したも知れないが、日本の憲政は十年遅れた。

原敬 君の云ふ通りそが、君と我輩との意見の相違だ。こんな事を、五分間以上議論をするのは、馬鹿だ。よさう。

小崎 それにしても、犬養君を入閣せしめないのは、あまりに冷酷無情ではないか。

原敬 ぢや、君は犬養君を入閣せしむれば山本内閣を認めてくれるのか。さうなれば問題は、第二段に入つたわけだが犬養君にはいかに氣の毒である。然し、犬養君の入閣を固守すれば、この妥協は破裂だ。破裂すれば長閑復活の機會を與ふることになるのは、先刻も云つた通りだ。その上政界は非常の混亂に陥る。國務は停滞する。かくて、御経驗淺き新帝の觀慮を惱まし奉ることになるではないか。先づこのあたりで、政界の安定を計り、おもむろに後圖を計るべきではないか。その上、山本は政友會の政策を踏襲すると誓言し、閣僚たる、奥田、高橋、山本達雄の三人は政友會に入黨すると云ふから、先づ事實に於て政友會内閣と云つてよいぢやないか。犬養君については、松田正久君が、よく諒解を求めに行つた筈だ。

小崎 わが輩は、この妥協には根本的に反對であるし、その上犬養君の入閣が、ダメだとすると、同君に對する義理か

らも、黨に止まることは出来ないかも知れない。

原敬 (冷然として小崎を見る)

山崎 僕も、小崎君に對する義理上、同君と袂を連ねて去るかも知れない。

原敬 それは、止むを得ないことだ。

(高梨光雄は入つて来る)

高梨 今山本伯からのお電話です。至急、お目にかゝりたいと云ふことです。

原敬 官邸からか。

高梨 左様です。

原敬 すぐ、お伺ひすると云つてくれ。

小崎 ぢや、僕達は失禮しよう。

山崎 うむ、失禮しよう。

原敬 山崎君、僕のところへ、フランスから歸つた人が、百五十一年以上になる葡萄酒を送つて來たよ。近日、それを一つ御馳走しよう。

山崎 ありがたう。

小崎 失禮。

山崎 ぢや失禮。

原敬 失禮。

(扉のところまで送り、再び以前のところへ歸つて来る。それから、ハンカチを取り出し、洋服のちりを拂ふ。高

(給仕は入つて来る)

給仕 お車が参りました。(原靜かに立ち上る所にて、幕)

第三幕

人物

- 原 敬 總理大臣、年六十六歳
- 原 淺子夫人 新聞記者
- 米田 青山 愛國同盟代表者
- 相良 八郎 同
- 工藤 虎太郎 同
- 能田 五郎 同
- 女子參政運動者三人 南部藩古老
- 松崎 秀之進

時

大正十年初春

所

芝公園原敬邸

梨光雄は入つて来る)

高梨 小崎さんは、やつぱりダメですか。

原敬 さうかも知れない。

山崎も一しよかも知れない。一應は止めて見るつもりだが。

高梨 困りましたな。そのために、黨の大動搖を來すことはありませんか。

原敬 二三十人は動くかも知れない。しかし、黨の大事には更へられない。

高梨 何とか小崎さんを引き止める道はありませんか。

原敬 仕方がないだらう。小崎君は、勝敗を度外にして、戦争をしようとするのだ。わが輩は、さうぢやないのだ。どんなことをしても、勝ちたいのだ。藩閥官僚を斃すと云ふ氣持に於て、小崎君や犬養君等には負けなかつた。戦つて居れば氣持がいゝんだ。名分を振りかざして、戦つてゐればいゝんだ。たゞ戦争するのは、やさしいことだ。わが輩はさうぢやない。たしかに勝ちたいんだ。そのために、世間から、何と云はれたつて何度でも妥協するつもりだ。本當に、藩閥官僚を斃す手段だと分つたら、どんなことでもやるつもりだ。あはゝゝゝ、しかしわが輩はきつと、勝つて見せる。

情景

二十疊位の洋風應接間、マンテル・ピースの上に聖母マリヤの像が置かれてゐるのが目につく。淺子夫人が、女中を指揮して掃除してゐる。

淺子夫人 書棚の本の上には、埃がたまつてゐないかね。

女中 えゝ、昨日ハタキをかけたばかりです。

淺子 窓ガラスは？

女中 昨日拭きました。

淺子 肱かけ椅子の腕木のところもよく拭いて置いて下さいよ。

女中 はい。

(他の女中は入つて来る。訪客の名刺を夫人にとりつぐ)

淺子 あゝ米田さんなの。まだ、お目ざめにはなつてゐないけれど、少しお待ちになつてはいかゞですと云つておくれ。

(女中去る。しばらくして、米田青山は入つて来る。長身

瘦軀の紳士、鼻めがれをかけてゐる)

米田 奥さん、お早うございます。

淺子 米田さん、お早う。

米田 いつも、奥さんが、御自身で御掃除を監督なさるさうですね。

浅子 え、さう。内のキレイ好つたら、ないんですからね。だから、私は掃除係りですよ。内は總理大臣で、わたしは掃除大臣ですよ。

米田 あは、ムムム。 (煙草を取り出さうとして、忘れてあるのに気がつく) 奥さん、煙草をいただけませんか。せうか。

浅子 千代や、煙草を持つておいて。

女中 はい！

(女中去る)

浅子 内は、煙草をよしてあるものですから、煙草を應接間へ出して置くと、つい主人が手を出すものですからね。貰つた煙草なんか随分あるんですけれど。

(女中煙草を持つて来る)

米田 酒も以前は、随分お飲みになつたさうですね。

浅子 え、朝鮮公使時代は、随分飲んださうですよ。そのために、二三度卒倒したさうで、それ以來ふつりよしたさうですよ。

米田 道理で、酒は飲まれないが、われわれ酒飲みの氣持を理解して下さると思つた。

浅子 さうなんです。一しよに御飯をたべてゐるときでもお酒の好きな方には、君も一本いゝだらうとすゝめるのですよ。

米田 ぢや、お庭でお目にかゝりませう。

(米田立ち上がつて去る。浅子夫人米田に出した茶器を片づけてゐる。女中、紹介状を持つては入つて来る)

女中 御婦人の方が、三四人お見えになりました。

浅子 女の方つてどんな風をしてゐる？

女中 (笑つて答へず)

浅子 どれ、その紹介状をお見せ。

(浅子夫人紹介状を見る)

浅子 まあ婦人參政運動の方ですつて。一寸、旦那さまにお取り次ぎしておいで。世の中が新しくなつて来るといういろいろなものが、飛び出して来るもんだな。

(女中去る、直ぐ歸つて来る)

女中 應接間へお通して置けと云ふことでございます。

浅子 ぢあ、御案内しておくれ。

(浅子夫人去る。米田、奥から出て来て、玄關の方へ去る。それと、入れ違ひに、婦人參政運動の人達は入つて来る。二人は洋装、一人は和服。みんな女中に案内され椅子にこしかける。女中去る)

彼女等のA 政黨内閣と云つたつて、官僚内閣と變りはないんだもの。どうせわれわれの主張なんか聞いてくれつこはないわ。

B さうね、無駄かも知れないわ。既成政黨の總裁なんて、

米田 酒のみと云ふものは、チビリ／＼いつまでも飲んでゐたいのを知つて居られるのですな。

浅子 あは、ムムム。

米田 時に奥さん、東宮殿下御外遊反對の聲が、可なり盛んださうですね。

浅子 え、さうなの。毎日、官邸の方へも、玆の家へも、二三十通脅迫状が来るのですよ。これこんな。

(浅子夫人、立つて書棚の引き出しをあけて見せる)

米田 どうも、さう云ふ舊思想の人間が今でも澤山居るのですな。

浅子 昨日なんか、短刀を小包みにして送つて來ましたよ。でも、内はちつとも氣にしてみませんけれど。

米田 昨日は明治神宮に參拜して、中止の祈願をこめたと云ふぢやありませんか。どうもあゝ云ふ團體には、騒いで金にしようと思ふ連中と、誠意誠心國家を思ひながら、分らず屋であるために、つまらないことに騒ぐ連中がゐますね。今度は恐らく、その後者でせう。だが、後の方が却つて扱ひにくいものですな。

(女中は入つて来る)

女中 あの米田さんに。今御主人はお目ざめになつて、御庭に出ていらつしやいますから、もしお急ぎなら、お庭の方へ。

どうせ頭がカチ／＼でせうよ。

C 黨利と黨略の外はなんにもないんですもの。そして、藝妓達の外は、ほんとうの婦人と云ふものに接したことがないんですもの。

A どうせ無駄ね。

B でも、宣傳になるわ。

C さうね、わたしもそれを思つて來たの。婦人參政運動の人々原首相を訪ふと云ふことが、新聞に出れば、それだけでも、社會の注意をうながすことになるわ。

(原首相、和服に袴をつけ、謹嚴な態度で、出て来る。運動者達、あわてゝ立ち上る)

原敬 お待たせしました。

A、B、C 初てお目にかゝります。

原敬 松本君の御紹介ですな。

A はい。

原敬 御用は。

A 私達は、婦人の參政權獲得運動について、御諒解を得に參つたのでございます。抑も婦人の人格を尊重し、政治的にも法律的にも、經濟的にも婦人を男子と同格に扱ふことは、歐洲文明國に於いて……

原敬 一寸お待ち下さい。婦人に參政權を與へねばならぬと云ふことですか。

A 左様。

原敬 それなら、わが輩は主旨に於て、賛成です。

A、B、C (顔を見合はせて) まあ。

B 頼もしいわ。

C ぢや、この次ぎの議會に政府案として出して頂けま

の。

原敬 (苦笑しながら) さうはいきません。實際問題として
は、責任がありますから、容易にお答へすることは出来ま
せん。日本の現在の状態では、まだその機運が到来して
ません。わたくしも、さう云ふ機運の早く到来するやうに
努めますから、貴女方もどうかこの運動をお続けになつて
下さい。御主旨に、賛成だと云ふ意味で、些少ながら、運
動費を寄附させよう。

A まあ、ありがとうございます。

B ほんとうに。

原敬 一寸お待ち下さい。

(原立つて去る)

C まあ、おどろいた。ほんとうに、よく事の分つてゐる人
ね。

A ほんとうに、老人でも馬鹿に出来ないものね。

B それに年寄りだけでも、立派な風采ね。

A 先刻のわたし達の悪口をきゝやしなかつたかしら。

相良 既に、度々お手紙を以て貴意を得ましたが、何のお返

事もございませんな。

原敬 つい忙しくてな。

相良 だが、これは國家の一大事ではありませんか。

原敬 御外遊の方は、一大事だが、君達に返事をする事は

一大事ではないよ。

工藤 御外遊お中止を願ふことが一大事でないといはれるの

ですか。

原敬 左様。

工藤 閣下の言葉はわれわれに分りませんな。東宮殿下の御

一身は、日本帝國にとつて掛換のないものだといふことは、

閣下には判りませんか。

相良 さう云ふ貴い御身體に萬里の波濤を凌がせられ、もし

御病氣にでもなられたら閣下はどうなさるおつもりです

か。

原敬 幸ひな事に、殿下にはあくまで、御壯健に渡らせられ

る。その上御渡歐の船中の設備、萬事遺漏なきを期してゐ

る。日本一の國手を侍醫としてお伴ひになる。さう云ふこ

とは取り越し苦勞だよ。

相良 御病氣は、それで防げるかも知れないが、萬一不逞の

徒が、畏れ多いことでも海外で企てようなら、貴下は何と

なさるのだ。わが帝國の權力を以てしても、海外の取締り

A、B、C おほゝゝゝ。

(原、金一封を持って来て三人に渡す)

原敬 失禮ですが。

A ありがとうございます。

B ありがとうございます。

C ぢや失禮致しませう。

(原三人を送つて、部屋を出る。玄關で、高い烈しい聲が
きこえる。原と二三の間答があつてから、原悠然とは入
つて来る。後から、壯士らしい三人の男がついて来る
原、三人を椅子に案内する。續いて、制服を着た警部と
刑事らしい男、は入つて来る)

原敬 (警部達に) あゝ君達は、あちらへ行つてゐてくれた

まへ!

警部 でも閣下……

原敬 いや、心配しないでよろしい。

(警部達去る)

男の一人 拙者は愛國同盟の代表者相良八郎。

他の一人 拙者は工藤虎太郎。

原敬 あゝさう。

相良 われわれは愛國同盟二萬七千人に代つて閣下にお目に

かゝります。

原敬 うむ。

までは不可能と云ふことがお分りにならないか。歐洲には

君主制を否定せんとするロシアなどがありますぞ。それら

の國が、もし萬一……

原敬 いや、そんなことも心配はない。去年あたりから、外

務省から手を廻して調べてある。左様な危険はないと推定

する。

相良 推定するではいかん。

原敬 だが、將來のことは推定する外ではないか。

相良 だから、御外遊の御中止を奏請しろと云ふのだ。先づ

危険はないだらうではいかんのだ。安全と推定すると云ふ

だけのところへは、大切な御身體をお近づけ申してはなら

ないのだ。御外遊の中止を願つたら、さう云ふ危険は絶對

にないではないか。

原敬 わが輩は、萬に一つも御故障などのないものとして御

外遊を奏請したのだ。もし、萬一のことがあつたら、わが

輩が腹を切る。わが輩の責任を以て、安全を保證し奉るの

だ。

工藤 萬一の故障があつたとき、貴下が腹を切つても何にも

ならん。それよりも、お取り止めを願つた方が、一番安全

なのだ。もし、それでもお取り止めが願へないのなら、わ

れわれ愛國同盟二萬七千人は、總動員して、東京横濱間の

線路の上に寝るから、その上を御召車を運轉させていたゞ

きたい。

(主客しばらくの間沈黙する)

原敬 (急に容を正し) 貴下等は、今上陛下のおん病ひが篤く、茲一二年の内には、いかなる御變事が起るか分らないと云ふことを御存じないか。

相良、工藤 うすく承はつてゐる。

原敬 然らば、東宮殿下が茲二三年の裡に、最も重要な位置におつきになると云ふことが分るだらう。

相良、工藤 だから、御玉體をいやが上にも大切に守るべきだ。

原敬 なるほど、御玉體を大切にせさせ給ふべきは議論のないところだ。しかし、間もなく御重大な御職責につき、將來は帝王の位に即かせ給ふべき殿下として、今御責任のかるい内に、御經驗を増し、御知識を磨いていただくことが、將來の日本にとつてどれほど、大切な事か、君達には分らないか。

相良、工藤 それは分つてゐる。

原敬 それならば、この際短時日の間に御經驗を増し、御知識を磨いて頂くのには、御外遊を願ふことが、一番たしかな道ではないか。日本にゐては、日本のことは分らないのだ。遠くから日本を眺めてこそ初て、日本のほんとうの姿が、分るのだ。この際、東宮殿下に御外遊を願つて、將來

(相良、工藤二人涙ぐんで顔を見合はせる)

相良、工藤 よく分つた。貴下がそれほどの氣持で、やつて

ゐてくれるのなら、われわれは心配することはない。早速歸つて同人を説得しよう。殿下御發程の日は、われわれ二萬七千の同人は御沿道に堵列して、萬歳を三唱しよう。

原敬 ありがたう。よく分つてくれた、ありがたう。

相良 總理大臣、仲直りの握手をして下さい。

工藤 僕にも。

(二人首相と握手す。首相二人を送つて出る。直ぐ歸つて来る。浅子夫人出て来る)

浅子 よく素直に歸りましたね。

原敬 あの人達も、ほんとうに皇室を思ふ忠良な人達なのだ。

浅子 ほんとうに、どんな事になるかと心配してゐました。だつて、愛宕署から、三十人も人が來てゐるのですもの。

(女中名刺を持つて来る。夫人之を見る)

浅子 松崎秀之進と云ふ方御存じ?

原敬 一寸待つてくれ! (首をひれる)

浅子 お疲れになつてゐるし、お斷りになつたら、如何です。原敬 一寸待つてくれ! それは南部藩の古老だ。家の遠縁に當る老人だ。直ぐ通してくれ。

浅子 まあさうでございますか。ぢやわたしは御遠慮しま

交綏すべき諸外國の姿を見て頂くと同時に、將來御統治遊ばすこの日本國の世界列強の間にはさまつてゐる本當の姿を見ていただくことは、どれほど日本國民の將來の幸福になるか分らないと思ふ。恐らくは、世界平和のために役立つと思ふのだ。

相良、工藤 ……

原敬 その上、これからの日本は、昔の日本とは違ふ。國民の赤誠にのみ信頼すべき時代は過ぎてゐると思ふ。思想の波もきつと立ちさわぐと思ふ。さう云ふ將來の日本を、御統治遊ばす君主としてこの際海外の人情風物、思想の一端を見て頂くことは、多年御修業遊ばされた帝王學に畫龍點睛の妙を加へることではないか。

相良、工藤 ……

原敬 君達が、御旅行中の萬一を心配して下さるのは、ありがたい。それでこそ、忠良な國民だ。しかし、日本帝國はそれほど、貧弱な國ではない。日本帝國の國威と實力とで守護し奉つたなら、たとひ千里の異域に在らせられても、不逞の徒に指一本觸らせる事はないと、わが輩は信じてゐる。その上皇祖皇宗の御偉靈もきつとわれわれの意中をお汲み下さつて、御旅程を守つて下さるに違ないと思ふ。日本國民としては、その位な信念は持つてゐてもいいと思ふが諸君はどうだ。

(夫人去る。松崎秀之進出てくる。腰のまがつた八十以上の上の老人)

松崎 お、敬さん。わしをお見忘れたか。

原敬 いや見忘れてゐません。始終、御壯健でけつこうです。

松崎 お、敬さん、よく覚えてゐてくれたのう。俺も、あんたが總理大臣になつてから一度、お祝ひに來ようと思つてゐる中に、かう遅くなつてしまつて、今度やつと娘の婿に連れられて來ました。

原敬 それはけつこうでした。

松崎 敬さん、お前さんは作人館でわしに孟子の素讀を習つたのを忘れたか。

原敬 いや、よく覚えてゐます。

松崎 わしもあんたが、總理大臣になるのを見て死なうと思つた。これで本望だ。これはな、わしが會津戦争のときに使つた、祐定の刀ぢや。これをお祝ひに持つて來たのぢや。

原敬 どうもありがたう。

松崎 あんたも、お目見得したことがあるだらう。薩長の奸賊から朝敵呼ばはりされた大殿さまもきつとあの世でおよろこびになつてゐることだらうと思ふと、それが一番う

れしいのぢや。

原敬 (かんでふくめるやうに) もう、朝敵も官軍もありませんよ。薩関も長関ありませんよ。人民から選出した代議士から出来てゐる政黨が、政治を取ることになつたのです。わたしは、總理大臣になつたことは、むろんうれいしが、それよりも一番うれいことは、ほんとうの人民から出てゐる最初の總理大臣になつたことですよ。

松崎 おうさう、さう。とにかくめでたいことぢや。

原敬 (立つて、金のリキユールを棚から取り出し) これは先年陛下から頂いた天盃です。これで、一つわが輩を祝つて下さい。(呼鈴に應じ、女中來る) おい！ いつかの葡萄酒を持つて來ておくれ！

——幕——

(この戯曲に就ては、牧野良三氏前田蓮山氏に負ふところ頗る多し)

(新築社製本)

新選菊池寛集(續篇)
定價金 壹圓

著者

菊池 寛

發行者

山本 三生
東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地

印刷者

君島 潔
東京市小石川區久堅町百八番地

昭和五年四月十五日印刷
昭和五年四月十八日發行

版權

所有

發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目四十番地

改造社

振替東京八四〇二番
電話芝(43)四三二二番

新選名作集

新 谷崎潤一郎集

神童○愛○癡癡魔○あつ○ The affair of Two Watches○前科者○異端者の悲しみ○人面狸○二人の稚児○女装三藏○ハツサン・カンの妖術○柳湯の事件○富美子の足○ちびさな王國○獨探○呪はれた戯曲○或る少年の性れ○母を戀ふる記○兄弟○恐怖

40版

送定六八四
料價二六六
十二二並
錢圓頁組製

新 菊池寛集

▲小説 藤十郎の戀○船醫の立場○笑ひ○亂世○後實○仇討三態○思を返す話○三浦右衛門の最後○羽織り上人○西南奇聞○ある抗議書○神の如く歸し○死者の囁ひ○魚原心中○晩年○たちあなぬ○羽衣 ▲戯曲 敵討以上○芽の屋根○岩見重太郎○奇蹟○浦の苦風○玄宗の心持○世評○貞徳○戀愛病患者○兄の場合○無事に立つ妻○ある兄弟○時の氏神○順番○温泉場小景 (長篇小説) 火毒

52版

送定五八四
料價二六六
十九二並
錢圓頁組製

新 菊池寛集 (續篇)

▲長篇小説 赤い白鳥。第二の接吻。 ▲戯曲

刊新最

送定五八四
料價二六六
十百二並
錢圓頁組製

新 前田河廣一郎集

三等船客○脱船以後○赤い馬車○露音地獄○裏切る者○ストライキ中○麴麴○骨威○十三段の階段○佐吉の父親○手○慈善○海の女○盗人○瓦斯タンク○エレナの話○ドウリスの話○マイの話○目撃者○ダンプロ○太陽の黒點○故郷○俄鬼○海の煙草○スキヤップ○ムツソリーニ

24版

送定五八四
料價二六六
十百二並
錢圓頁組製

新 前田河廣一郎集 (續篇)

▲短篇小説 水倉○去勢○復讐○汽船○下駄○マリヤ○引越○傍觀者○橋樑○番○變な客人○ロシア夫人の舞踏○コレット○南京橋○破壊の前夜○惡戯○眞○無さんの死○罰金○玩具のピストル○最後の襲撃○灰色○黒い海○一寸法師○皮○上陸禁止○大○寒河江前會○宣傳ビラ○死を囁ふ群○風○他五篇 ▲中篇小説 快楽師の群○琴筑を賣つた男○地獄○最後は笑ふ者○戯曲 ラスプーチンの死○クレオパトラ○他十篇 ▲長篇小説 大暴風雨時代

20版

送定八八四
料價二六六
十百二並
錢圓頁組製

新 永井荷風集

歡樂○夢の女○深川の唄○あの人達○新編朝者日記○花瓶○露草の裏○小品集 春のおとづれ○花より雨に○夏の町○狐○傳道院○下谷の家○樂器○日本の庭○露衣花立森○ふらんす物語○舟と車○ローン河のほとり○秋のちまた○蛇つつかひ○晩餐○祭の夜がたり○霧の夜○おもかげ○再會○ひとり旅○雲○巴里のわかれ○緑の落葉其他○佛蘭西○佛蘭西近世抒情詩選○ボオドレール外十二篇○江戸藝術論 浮世繪の繪巻(外九篇)○大津だより

18版

送定五八四
料價二六六
十百二並
錢圓頁組製

新 藤森成吉集

▲短篇小説 雲雀○古匣二篇○娘○研究室○山○子供○床基○風○故郷を去るまで○東京へ○雀の来る○鳩を放つ○路上○地主○こぼろぎ○北見○拍手しない男○鈴の感謝 ▲戯曲 櫻性○櫻茂左衛門○何が彼女をそうさせたか? ○親友○夫婦 ▲長篇小説 寛先生○妹の結婚

24版

料定六八四
送價七
二二並
錢圓頁組製

新 葉山嘉樹集

▲長篇小説 海に生くる人々 ▲短篇小説 淫賣婦○誰が殺したか○別離○被害者○出しゃちのないう手紙○セント・パウルの手紙○むむたらしい出来事○遺書○支那人の夢○馬鹿を見たけりやこいつらを見る○平蕨の半日○正礼付賃婦人○刺された男○眼○労働者の居ない船○そりや何だ○住むべき處を求めて○山掛け○歌歩○どこも冷たい○赤い荷札○春の悩み○焼けた金で拂ふ○田舎者が都會を見る○退屈○精○校正係○櫻の咲く頃○淡雲○印度の藍○乳色の雲○其他

22版

送定五八四
料價二六六
十百二並
錢圓頁組製

新 北原白秋集 (詩歌)

「邪宗門」抄○「思ひ出抄」○「雪と花火」抄○「煙の祭抄」○「眞珠」抄○「白の金兜樂」抄○「雁日異」抄○「水雲異抄」○「秋の歌抄」○「日本の笛抄」○「あしの葉抄」○「とんぼの眼玉」抄○「兎の電報抄」○「祭の笛抄」○「まきあき」抄○「花咲盆さん抄」○「子供」抄○「象の子抄」○「二重虹」抄○「からたちの花」抄○「短歌抄」○「口語歌抄」○「長歌抄」○「詩文抄」○「俳句抄」○「詩論抄」

34版

送定六八四
料價二六六
十百二並
錢圓頁組製

新 北原白秋集 (散文)

生ひたちの記○桐の花小品○桐の花とカステラ○畫の思ひ○感覺の小品○植物園小品六篇○南海小品○瀨村の秋○肥後の三角○河原○パヤ物語○油煙○正覺坊○蟻と黒人○小笠原の夏○蕨飾小品六篇○小田原小品その一○五篇○小田原小品その二○四篇○海の畫の解説四篇○雀の生活○山莊主人手記四篇○季節の窓十九篇○風景は動く八篇○子ぎるま九篇○▲小説 蕨飾文筆○哥路○よはよは順禮○影○秋山小助

20版

送定五八四
料價二六六
十百二並
錢圓頁組製

新 吉田絃二郎集

▲小説 芭蕉○愛○人間を悲しむ○櫻○老來○寒日○砂丘日記○支那燈籠○救はれぬ人間○草の上○鐘の中○カフスとカラー○凡人の一生○故郷の町○生れ来る者○或る男と女○交軌の日○花梨の下○二人と彼○或る時○少年○小犬○雪の野渡○タビと子津○霧の中○春日和▲感想 靜かな雨○奥の旅○日の暮るる頃○詩の心○心の影○睡蓮○旅人の如く○雨の音は悲し○渡り鳥○夜空○感謝○五月の天城○一人苦しむ者○夢の裏に○幻影を追ふ心(他二十四篇)

40版

送定六八四
料價二六六
十百二並
錢圓頁組製

新 吉田絃二郎集 (續篇)

▲小説 金○時計○盗人の妻○新婦○形見分○秋をゆく○家出漢○三人○青い毒藥○紙袋○海賊の夜○秋一人○静かなる墓○石田老人○小梅の母○ト君への手紙○高原○地獄○寂しき人々○二人の無能者 ▲戯曲 西郷吉之助○警察の人○門○恋想○踊と獅子○輝かなる五月○夏の朝○十日の旅○草に臥して○小鳥の巢○病みあがり○信濃彦半にて○武藏野の秋○上の其○日暮れ頃○冬の詩○いろいろの旅○母の心○母の心○母の心○冬のうた○五月の夜○この秋他五篇

20版

送定五八四
料價二六六
十百二並
錢圓頁組製

新 森鷗外集

○そめちがへ○魔酔○獨身○青年○藤時繪○興津彌五衛門の遺書○佐橋基五郎○護持院之原の仇討○大鹽平八郎○安井夫人○津下四郎左衛門○栗山大膳○魚支綱○最後の一句○寒山拾得○流江抽簪○(翻譯) 濟院横町の殺人犯○冬の玉○父の爪○鑑定人○復讐○アンドレアスタマイエルが遺書○辻馬車○秋夕夢○戀愛三昧○耶穌降誕祭の買入○僧の夢○債鬼

14版

送定七八四
料價二六六
十百二並
錢圓頁組製

新 横光利一集

▲小説 ナポレオンと田馬○花婿の感傷○街へ出るトンネル○露蟬とした風○マルカスの審判○負けた巨人○無禮な街○眼に見えた顔○青い石を拾ってから○春は馬車に乗って○花園の思想○嘘はどこにもある○計算した女○火の熱いた煙草○表現派の役者○固○青い大尉○月夜○七階の運河○兄妹行進曲○深へる響○南北○敵曲 恐ろしき花○開らぬカーテン○霧の中○帆の見える部屋○幸福を計る機織○愛の挨拶○食はされたもの○男と女と男○他二篇

19版

送定六八四
料價二六六
十百二並
錢圓頁組製

新 長田幹彦集

○ゆく春○厄僧○アイヌの子○小夜ひとり○自殺者の手記○旅鳥○夕潮○露見○癡者心中○風の曲。(以上長篇十篇)

14版

送定七八四
料價二六六
十百二並
錢圓頁組製

新 岡本綺堂集

○西南戦争聞書○城山の月○熊谷出陣○兩國の秋○薩摩藩○切支丹屋敷○小栗権の長兵衛○村井長麻○八鹿の父○亞米利加の便○鬼坊主清吉○自來也○淺茅が宿○品川の台場○築摩の湯○維新小説○新朝日日記○時雨降る夜○長崎の兄弟○江戸名所聞會○お化師屋○三河萬歳○節分○風鈴蕎麥屋○蛇を賣る女

14版

送定七八四
料價二六六
十百二並
錢圓頁組製

新選名著集

新小山内薫集

色の優れた女の手〇病友〇十三年〇不慮〇不男〇足拍子〇堀田の故〇枯土〇海難の語

12版 送定六八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新久保田万太郎集

小説 霧芝〇おみち〇おみち後日〇みぞれ〇ふるさと〇とらふ〇浮ぶ瀨〇きのふのこ

14版 送定七八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新宇野浩二集

子孫を貸し屋〇人心〇空しい春〇蔵の中〇あゝの頃〇事〇鹿と虎〇十軒路〇心づくし〇やんぼ

14版 送定六八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新里見淳集

友達の見舞〇河岸のかへり〇勝負〇箱根行〇題のない小説〇女校生〇妻を買ふ猫姫〇失はれた

10版 送定七八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新近松秋江集

蒼鷹〇無明〇伊年の屏風〇小石川の家〇久世山情〇老若〇人の影〇初しぐれ〇食後〇青草

10版 送定七八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新豊島與志雄集

短篇小説 濁るるもの〇黒點〇不省の兄〇阿蘭〇丘の上〇裸木〇中篇 野ざらし〇戯曲街

10版 送定五八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新夏目漱石集

猫〇幻影の看〇一夜〇二十日〇野茶〇要十夜〇それから〇須永の語〇先生と遺書〇文藝の哲

20版 送定七八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新山本有三集

長篇小説 生きとし生けるもの〇戯曲 多門と七郎右衛門〇スサノナの命〇父親〇本舞〇大

14版 送定五八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新選名著集

新久米正雄集

長篇小説 天と地と〇短篇小説 手師〇虎〇與賀〇流行火事〇柿の木〇山の湯〇父の死

10版 送定六八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新室生犀星集

短篇小説 朝子〇母〇流し〇花輪〇お野田〇山〇各處〇おののこ〇押し花〇雀歌〇人〇稚見〇

20版 送定七八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新徳田秋聲集

長篇 何處まで〇奔流〇短篇 犠牲者〇悲しみの後〇無軌道〇朝陽〇黒い墓〇粗む〇犬を遣

10版 送定五八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新相馬泰三集

短篇小説 ローマンス〇泉水のほとり〇地獄〇夢〇小きき影〇六月〇坂〇ギブスの床〇

10版 送定六八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新島崎藤村集

海へ〇第一章海へ〇第二章地中海の旅〇第三章燕のごとく歸る〇第四章故國を見るまで〇

20版 送定五八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新西條八十集

詩集 春日哀歌(十一篇)〇空の羊(八篇)〇緞人形(十二篇)〇戀の宿(四篇)〇わが家(九篇)〇

20版 送定五八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新宇野千代集

街の灯〇骸骨と母〇過去〇愛三〇おきねと登平〇母親〇世の常の戀文〇ランプ明るく〇倉

10版 送定五八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新岸田國士集

古の玩具〇チロルの秋〇鮎野文六の思案〇葉〇戀愛恐怖病〇温室の前〇可兒君の面會日〇

10版 送定六八四 料價二一六 十〇四 錢圓頁組製

新選名作集 大佛次郎著

新選 佐藤春夫集

忙しすぎる○厭世家の誕生日○春の夜○窓展く○時計のいたづら○指紋○買笑婦マリ○田舎のたより○秋立つ○旅びと○露社○厦門の印象○鷺江の月○濠洲○F・U○(一名)俺もさう思ふ○瀬沼氏の山羊○宇津章○人御事○上々吉○百花村物語○揚州十日記○風流論○其他

刊近 四五六 判並 送料各二十錢

新選 池谷信三郎集

▲長篇小説 望郷○花はくれない
▲短篇小説 橋○マクダレナ○街に笑ふ○窓○殺幻○まいとん○首飾の幸福○線○郵便○忠僕
▲戯曲 三月廿二日○獨り○歸りを待つ人々○首○假裝舞踏會○歸つて来た喰○繼母○おらん人形

刊近 六八六 判並 送料各二十錢

新選 大町桂月集

○冷汗記十篇○皇城拜觀○赤坂御苑拜觀○箱根神社祈願の記○野哭の記○傳語○病院○あたる形見○稱也塾の記○雨の高田○感謝の記○練馬の一夜○じき叔父○畫ける美人○夢の跡○古塚○須磨の一夜○荒野の鶴鶴○櫻守○風流鴨○かた袖○小春日和○一日の土工夫○春のひと夜○夜の電車○夜行記○而師の弟子○無妻主義○風船玉○小犬○雨奇録○花の小金井○柏木の閉居○狸征伐○嵐日記(上・中・下)○動物合戦○獨笑記○書齋に於ける我○秋の天地○洪水を看

刊近 八六六 判並 送料各二十錢

新選 武者小路實篤集

▲長篇 ○或る男 ▲短篇 ○小さき世界○芳子○一休に聞いた話○い話○友の話○へんな原稿○ユダの舞臺○ヨハネ・ユダの舞臺を聞いて ▲戯曲 桃源にて○日本武尊○二十八歳の耶蘇○佛陀と孫悟空○ある青年の夢○父と娘

刊近 四六六 判並 送料各二十錢

新選 佐々木茂索集

○魚の心○或日の日記○雪に鳥○海邊の町○古い新芽○影○ふるさとびと○逆目立つ○兄との関係○所謂生き死に○父子一面○父のおもはく○竹植えて○躰難○長い一日○嘲笑○或冬の日○おもふは○人おのおの○傷つく○願新○微妙な注ぎ○ゆきつり心○獨笑○生活の一例○青きを踏む○選挙立會人○水いらす○翅鳥○おちいさんとおはあさんの話○王城の従兄○おしやべり置面備○臘日○來住○或日あるく○哀悼○杜くまま○臘日○ある次の死○他三十五篇

刊近 四六六 判並 送料各二十錢

赤穂浪士

大衆文學の權威大佛氏苦心の畫期的傑作。正しく新しき忠臣蔵である。藝術的香氣高く、絶對的正当な義士觀として讀者の嘆稱堪かざるところ。各巻何れも百版を突破した出版界空前の賣行を示した良書。

112版 全六判上 定價各一圓五十錢 送料各二十錢

ごろつき船

兇惡貪慾の徒に謀られて、露國に命した三木原伊織の壯奇を極めた物語。渺茫たる大洋を背景に活躍跳躍する劍俠、怪僧、義士、惡漢。蕭條の凄壯な傳奇の香氣、氣宇高邁、詩美横溢、著者の歴筆は正にその高潮に達す。

40版 全六判上 送料各二十錢

からす組

細谷十太夫は滅び行く武士階級の代表者だ。命にかけての戀人から夫の仇と狙はれる淋しい流涙の身を、明治維新に逢着して革命の狂熱に投じた。讀者を魅惑する波瀾に富む筋の中に、詩情ゆたかに而かも正しく歴史を觀てゐる。

25版 全六判上 送料各二十錢

11

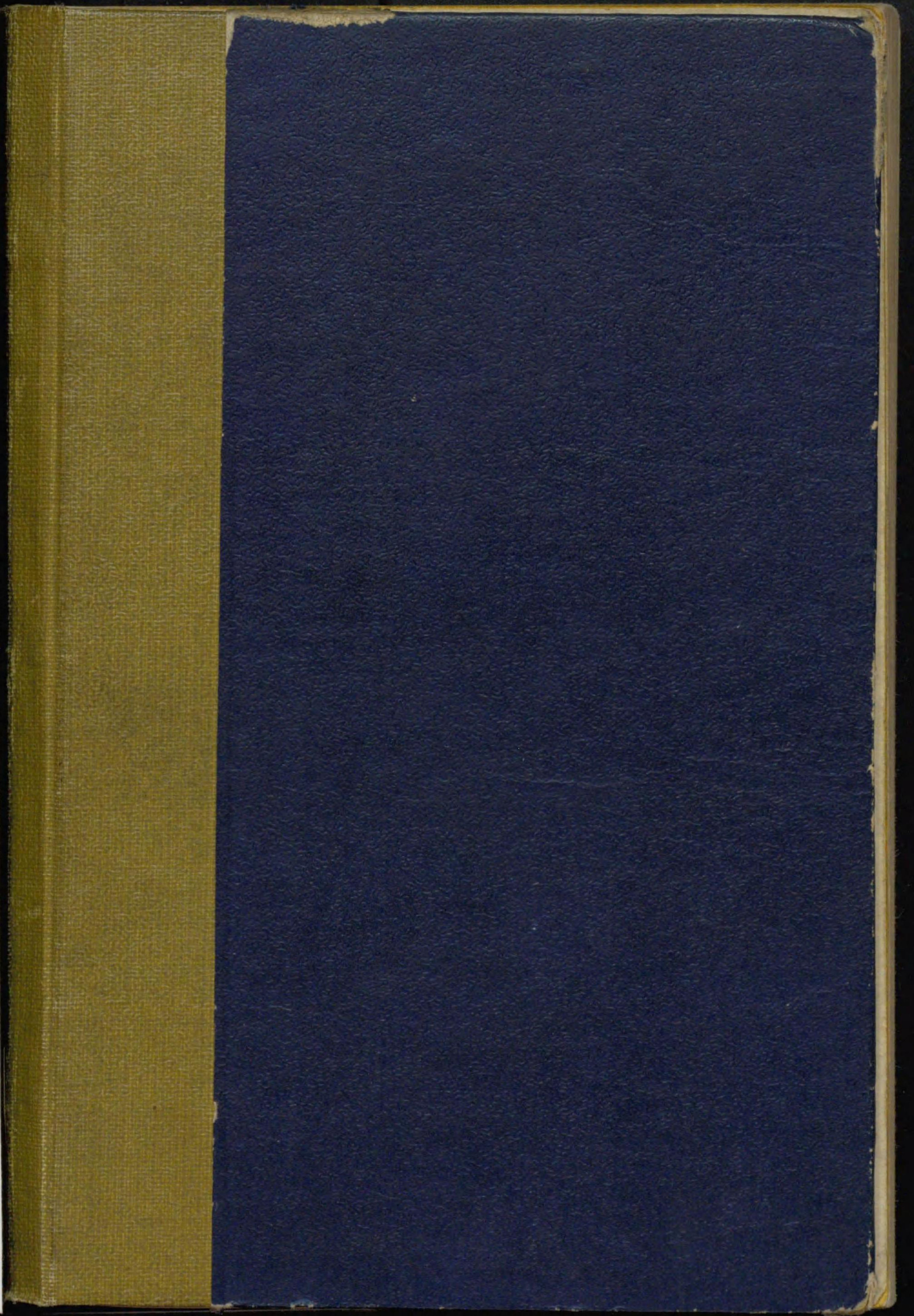
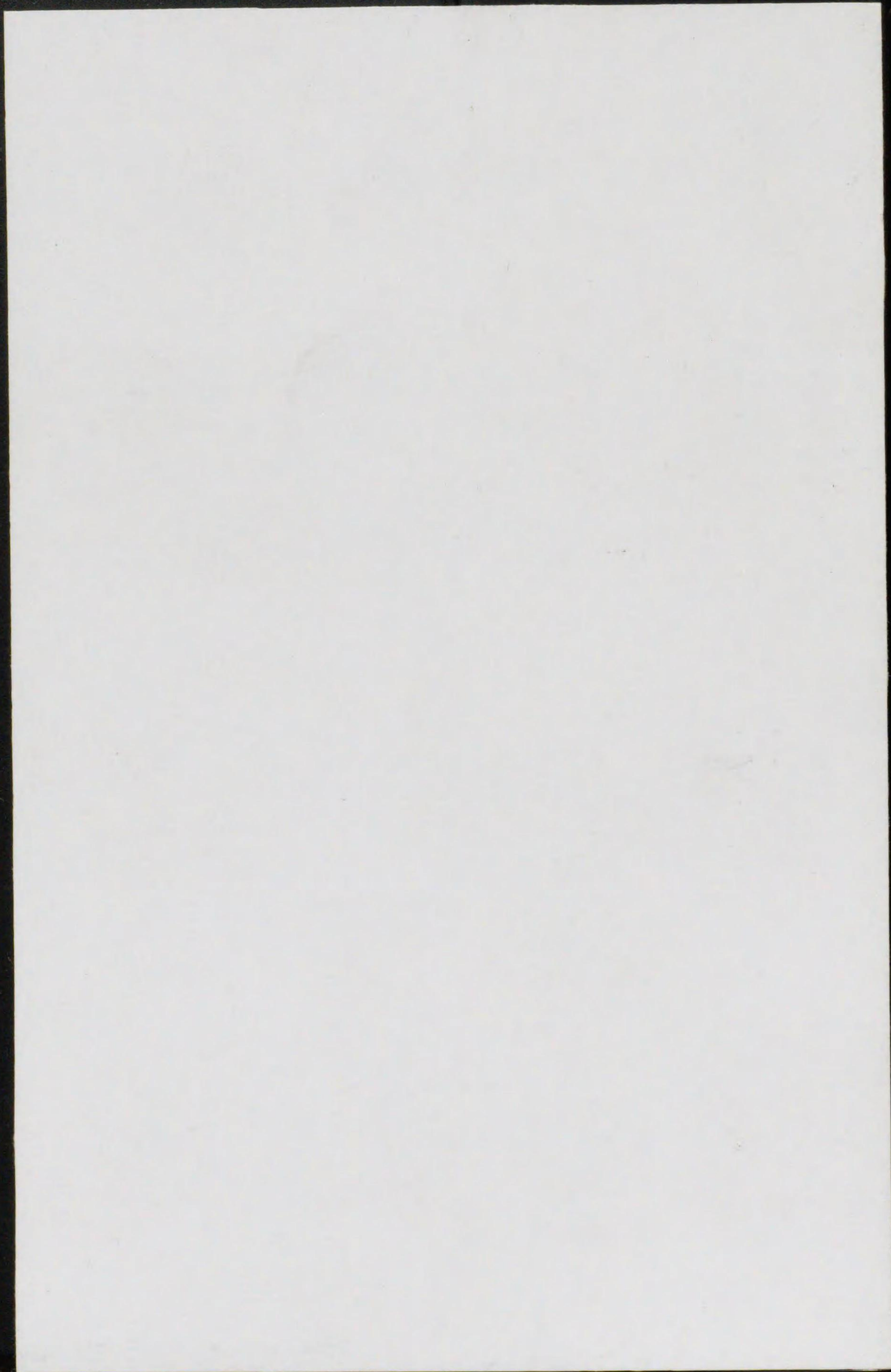
6

納本

21



603
131

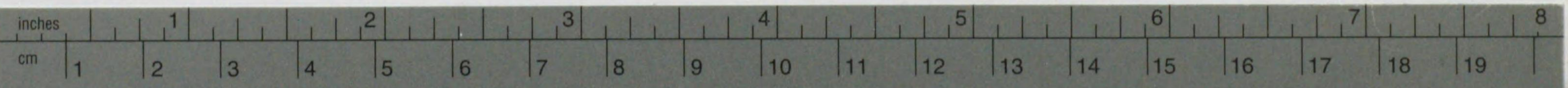


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

